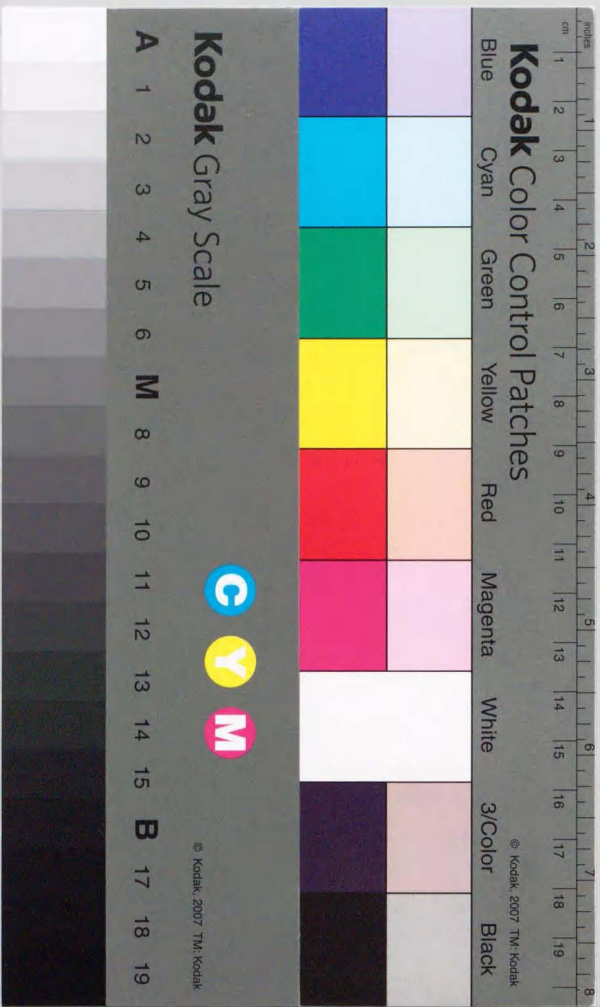


痴呆性高齢者の記憶障害に対する補助環境に関する研究

2000年2月

大橋美幸



①

痴呆性高齢者の記憶障害に対する補助環境に関する研究

大橋美幸

論文要旨

痴呆では早期から記憶障害（物忘れ）が問題となる。特に最近の出来事に関するエピソード記憶の障害が顕著であり、過去の習慣による乗っ取り型エラーを起こしやすい。記憶障害は日常生活の様々な面に支障をきたすが、居住環境の記憶に関する補助機能を高めることで一部解消できる。具体的には①記憶内容の一部を視覚化・聴覚化することで想起の手がかりを提供したり、②記憶が必要な行為の一部を自動化してエラーを防いだり、忘却や記憶違いによってエラーが起こっても大きな事故につながらないような準備をしておくことができる。

従来、痴呆性高齢者の居住環境について、このような視点からの研究はほとんど行われていない。「記憶に対する補助」という点から居住環境を捉え、痴呆性高齢者の日常生活を補う方法を検討することは有用であると考えられる。

本研究は、居住環境の記憶に対する補助機能を調査し、痴呆性高齢者に応じた居住環境の構築に役立てることを目的とする。

本論文は序論、本論3章、結論からなる。以下に要約を記す。

序論

痴呆性高齢者の記憶障害特性と居住環境の記憶補助機能、研究目的、方法、既往研究と本研究の位置づけについて述べた。

本論

第1章 高齢者及び介護者による記憶補助の手法と有効性

本章では、痴呆性高齢者や介護者が行っている物忘れに関する工夫を整理することで、居住環境の補助機能を高める手法と有効性を明らかにした。

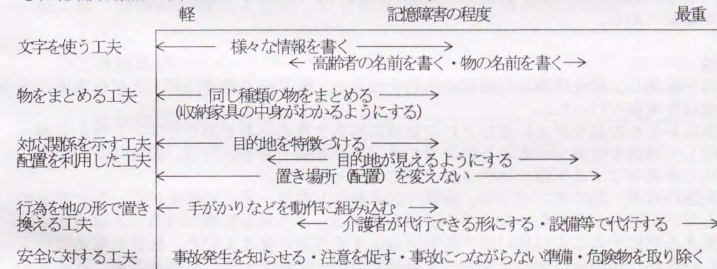
調査は、物忘れを補う工夫について痴呆性高齢者及び介護者から聞き取りを行った。調査項目は工夫の目的、方法、実施者（高齢者／介護者）、使用状況、効果であった。

結果は以下の通りである。

①記憶障害の全ての段階で居住環境の記憶補助機能を高める可能性があり、環境づくりに対する援助が必要である。

②移動性が小さい工夫は、補助機能を利用する空間的・時間的文脈を、固定された場所に依存できるため、痴呆性高齢者が利用しやすく、さらに、一定の場所に固定されているため、周囲の人が痴呆性高齢者を手助けしやすい。また、移動性が小さい工夫は、あらかじめ設備や居室配置などに埋め込んでおくことが可能である。

③記憶補助機能を高める手法は図のとおりである。



第2章 想起された出来事本文脈と手がかり使用の傾向

本章では、痴呆性高齢者で問題となりやすい最近の出来事に関するエピソード記憶を想起し、想起の手がかりとしての居住環境を検討した。

調査は、痴呆性高齢者と居室において自由会話をを行った。会話の中から過去から現在ま

での出来事に関するものを取り上げ、内容、想起に利用された手がかりをまとめた。出来事相互の関係や現在へのつながりを含めて分析を行った。

結果は以下の通りである。

①記憶障害の全ての段階で、適切な手がかりによって、失われた時を取り戻し、現在へつなげていく可能性が考えられる。

②手がかりの中で「景色・天候・季節」「音・匂い」は多様な事柄を思い出させていた。逆に「写真」「家具」は特定の事柄を思い出させていた。利用される手がかりは、記憶障害が重度になるに従って、日常的に接する機会があるものへ移り、最重度で利用されていたのは「高齢者自身」「音・匂い」などであった。

想起内容の中で、家族に関する事柄は、様々な手がかりによって話されていた。逆に、最近の天候、生い立ち、昔の職業に関する事柄は、特定の手がかりによって話されていた。記憶障害が重度になるに従って、最近の出来事に関する話題が減り、最重度では、生い立ち・家族・昔の職業などが話されていた。

③想起内容の間違いは、軽度では、毎年の旅行など、同じ種類の出来事が繰り返し起こっている場合、前後関係が区別できなくなり、2つの出来事が混じってしまった。中等度では、以前の出来事を思い出せないために、最近の出来事の分脈が変わり、違う解釈になってしまっていた。重度・最重度では、現在のわずかな手がかりから、過去の出来事の多くを説明しようとするため、過去の認識が大きく異なったものになってしまっていた。

第3章 過去の習慣による乗っ取り型エラーにおける状況の類似性

本章では、痴呆性高齢者で起こりやすい過去の習慣による乗っ取り型エラーを取り上げ、エラーを制御する環境を検討した。

調査は、過去の習慣によると推測される間違いについて、痴呆性高齢者及び介護者から聞き取りを行った。調査項目は間違いの内容、取り違えたものの類似性、生活内容を変更してからの経過などであった。

結果は以下の通りである。

①記憶障害の全ての段階で、エラーを制御する環境を検討し、環境づくりを援助していく可能性がある。

②記憶障害が比較的軽い場合は、主に高齢者に積極的に働きかけ、現在の状況を詳しく知らせる手がかりが必要である。生活内容を変更した場合は、これまでの習慣との相違点を示して間違いを防ぐと共に、新しい状況での経験の積み重ねを助ける工夫が必要である。記憶障害が進むと、主に過去の出来事と現在を正しい分脈でつなげるための手がかりが必要である。新しい状況での経験をこれまでの出来事の延長線上に積み重ね、生活像の修正を助ける工夫が必要である。加えて、間違いが起こっても大きな事故につながらない安全対策が重要である。

結論

本論を総括し、居住環境の記憶補助機能を捉えた。痴呆性高齢者に応じた居住環境の構築に向けた考察を行った。

①あらかじめ設備や居室配置などに記憶補助機能を埋め込んでおくと共に、後から個々に対応して機能を変更できるようにしておくことが必要である。今後、環境移行への対応を含めた多職種による支援システムが必要であると考えられる。

②記憶内容の一部を文字で示し、確認できる形にしたり、多くの物をいくつかにまとめることで、記憶への負担を少なくすることができる。目的地を特徴づけることは検索を助け、見える形にすることは思い出す作業を確認する作業へ変えている。配置を変えないことは、残された記憶を活用し日常生活を継続するのを助けている。設備などで、記憶を必要とする行為の一部を置き換えたり、安全対策を行うことも重要である。

さらに、手がかりを選び、時間的・空間的な文脈をわかりやすくすることで、過去の出来事を現在につなげ、痴呆性高齢者がこれまでの経験を活かしつつ、新たに生活を展開していくことを助けることが考えられる。

③居住環境の記憶補助機能が痴呆性高齢者以外の多くの人々に果たす役割や、まちづくりについては、今後の課題である。

目次

序論

1.痴呆性高齢者の記憶障害特性と居住環境の補助機能	1頁
2.記憶補助に関する既往研究と本研究の位置づけ	3頁
3.目的と研究課題	6頁
4.方法	7頁
5.各章の位置づけ	7頁

本論

第1章 高齢者及び介護者による記憶補助の手法と有効性	
1.1.目的	10頁
1.2.調査概要	10頁
1.3.物忘れを補う工夫	13頁
1.4.補われている記憶内容と工夫の移動性	23頁
1.5.記憶障害の重症度別の傾向 - 記憶補助機能を高める手法	28頁
第2章 想起された出来事の文脈と手がかり使用の傾向	
2.1.目的	35頁
2.2.調査概要	35頁
2.3.手がかりと想起内容	38頁
2.4.出来事相互の関連性と現在とのつながり	49頁
2.5.記憶障害の重症度別の傾向 - 出来事を想起させる環境	54頁
第3章 過去の習慣による乗っ取り型エラーにおける状況の類似性	
3.1.目的	59頁
3.2.調査概要	59頁
3.3.間違いの種類と起序	61頁
3.4.状況の類似性・習慣変更との関係	76頁
3.5.記憶障害の重症度別の傾向 - エラーを制御する環境	97頁

結論

1.各章の要約	100頁
2.居住環境の記憶補助機能	102頁
3.補助環境構築の方向性	105頁
4.今後の課題 - ユニバーサルデザインに向けて	107頁

序論

1. 痴呆性高齢者の記憶障害特性と居住環境の補助機能

(1) 痴呆性高齢者の記憶障害特性

痴呆は進行性の脳器質性疾患であり、継続的なケアや環境づくりを必要とする。脳の器質性変化から現れる症状（中核症状）は進行するが、そこから派生して現れる日常生活への支障（周辺症状）はケアや周囲の環境によって軽減することが可能である。適切なケアや環境づくりは、痴呆性高齢者が過去の経験を活かしつつ、新たに生活を展開していくことを助ける。

脳の器質性変化から現れる症状には、記憶障害（物忘れ）、高次皮質機能障害、運動性障害などがあり、その中でも特に記憶障害は早期から現れ、後々まで影響し続ける（表1）。記憶障害は、火の消し忘れ、物をなくす等、日常生活の様々な面に支障をきたす。

表1 痴呆性高齢者の症状^{X1}（参照）

重症度	中核症状	周辺症状
軽度	記憶障害	抑うつ症状等
中等度	記憶障害+高次皮質機能障害	迷子、「家に帰ります」等
重度	記憶障害+高次皮質機能障害+運動性障害	徘徊、歩行困難

記憶・記憶障害によるエラーには様々な種類があるが、痴呆では、特に①最近の出来事に関するエピソード記憶が障害されやすく、②過去の習慣による乗っ取り型のエラーを起こしやすい。

①エピソード記憶は、個人が体験した出来事の記憶であり、幼少期から個人の人生と共に蓄積されてくるものである。旅行の思い出や、生まれ育った家の情景などがこれにあたる。記憶内容は個別性が高く、自伝的記憶とも呼ばれる（資料1）。

資料1 記憶の種類^{X2}

エピソード記憶	: 自伝的記憶	(例) 旅行へ行った時の出来事、生まれ育った家の思い出
意味記憶	: 知識の記憶	(例) リンゴをリンゴだと分かる、終戦は1945年、地球は丸い
手続き記憶	: 体にしみ込んでいる動作パターン	(例) 包丁さばき、和裁の手つき、歩き方 等

痴呆性高齢者は昔の記憶に比べて、最近の記憶が障害されやすい。昔の記憶が残っていても、最近の記憶が障害されることで、過去の出来事と現在の出来事が時間の流れの中でうまくつながらなくなり、誤解や分脈の歪みが生じてしまう。誤解や文脈の歪みは、現在の行為に支障をきたすだけでなく、個人の過去（人生）に対する認識を変えてしまうこと

になる。例えば、Aさんに物をあげた記憶が障害されることで、Aさんに盗まれたのではないかと疑うようになり（現在の行為への支障）、Aさんと仲良くしていた過去のイメージが変わってしまうことになる（過去の認識への影響）。

②乗っ取り型のエラーは、慣れない事をしている時に、行動が途中から、慣れ親しんだ行動へ置き換わってしまうものである。エラーは生活内容を変更した時におこりやすい。例えば、休日に平日と同じように行動してしまう、小物を新しくしたのに古いものを使ってしまうことなどがあげられる（資料2）。エラーは生活内容を変更して、時間が経過してからも現れる（例：タバコをやめてしばらくたつのに、考え事をしながら手さぐりでタバコを探していた）。

資料2 エラーの種類^{※3)}

乗っ取り型エラー	: 頻繁に遂行される活動が意図していた行為を乗っ取ってしまう (例) 日曜日に買い物へ行こうと家を出たのに、会社へ向かっていた 新しい靴を買い、荷物を入れ替えたのに、古い靴を持って出た
記述エラー	: 行為を間違った対象 (似ていることが多い) に対して行う
データ駆動型エラー	: 感覚刺激によって引き起こされた自動的な行動が、意図的な行為に割り込んでしまう
連想活性化エラー	: 頭の中の考えによって引き起こされた自動的な行動が、意図的な行為に割り込んでしまう
活性化消失エラー	: 行為の途中で目的を忘れてしまう
モードエラー	: 装置の操作を間違えてしまう

痴呆性高齢者は、過去の習慣によって乗っ取り型のエラーを起こしやすい。エラーには状況の似かよりと、生活内容を変更してからの経過が関係している。過去の習慣はそのままの形ではなく、その後の出来事や現在の影響を受けて修正された形で現れる。例えば、昔、かまどでご飯を炊いていたことが、電気炊飯器を使っている現在の状況と混じり、電気炊飯器をコンロにかけて火をつけてしまうことが生じてしまうのである。

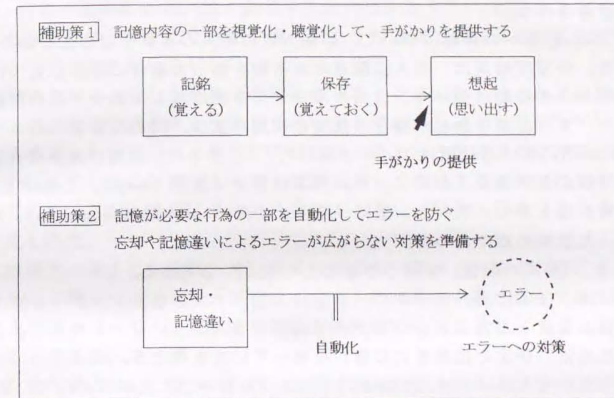
(2) 居住環境の記憶に対する補助機能

記憶障害は日常生活の様々な面に支障をきたすが、居住環境の記憶に対する補助機能を高めることで一部解消できる。

記憶は、時間的・空間的な文脈などによって整理されて保存されている。このため時間的・空間的な文脈をわかりやすくすることで、思い出すための手がかりを提供することができる。また、行為の一部を自動化したり、エラーを起こしても大きな事故につながらないような対策を準備しておくことができる（資料3）。そして、これらは特別な設備や器具を必要とせず、現存のものを一部修正することで対応が可能である。

従来、痴呆性高齢者の居住環境について、このような視点からの研究はほとんど行われていないが（2.記憶障害に関する既往研究と本研究の位置づけ 参照）、「記憶に対する補助」という点から居住環境を捉え、痴呆性高齢者の日常生活を補い支援する方法を検討することは、痴呆性高齢者に応じた居住環境を構築する上で有用であると考えられる。

資料3 記憶障害に対する補助策



2. 記憶障害に関する既往研究と本研究の位置づけ

(1) 記憶障害に焦点をあてた介入研究

痴呆性高齢者の記憶障害を補う手法については、施設において介入研究が行われている。研究は、いずれも記憶補助具としてノートなどを利用したシングルケーススタディである。

Hanley^{※4, 5)}はスケジュールが覚えられない痴呆性高齢者に対して、時計とメモ帳を使用している。時計とメモ帳の使用練習を行ったところ、日課にそった行動が可能になった。Kurlychek^{※6)}もノートとアラームを使用し、同様の結果を報告している。

また、Hanley^{※4)}は、すでになくなった夫を探していた痴呆性高齢者に対して、夫の死亡を含め個人的な情報を書いたノートを使用している。ノートを使用し個人的な話を続けたところ、夫の死亡や個人的な情報に対する反応の改善が得られた。Coon^{※7)}も、個人的な情報を書いたノートなどを使用し、安心して眠るようになった痴呆性高齢者を報告している。

以上の報告は、痴呆性高齢者に対して記憶補助具を用いる有用性を示している。しかし、記憶補助具としてノートなどを利用するにとどまっており、手法の広がり欠ける。

(2) 記憶に関する工夫

一方、記憶を補う手法として位置付けられてはいないが、記憶を補っていると推測される工夫や介入研究は数多く行われており、多様な手法が用いられている。

Hanley ら⁸⁾は、高齢者施設において立体的な道表示をして有効性を検証している。結果、表示だけではあまり効果がなかったが、見当識訓練を合わせて行うことで、痴呆性高齢者の移動が改善された。

Namazi ら⁹⁾は、居室への移動について、居室入口に老人の写真や記念品を飾る有効性を検証している。中程度痴呆は、老人に関連のある物を飾った場合に居室を見つけやすかった。また、便所への移動について、便所のカーテンを開け放した場合と閉めた場合を比較している。カーテンを開け放した場合の便所の利用回数は、閉めた場合の約8～11倍であり、便所の利用に要する時間は1/7であった¹⁰⁾。さらに、便所の表示の有効性を検証している。病棟の共同便所において、床に矢印付きで「便所 (toilet)」と表示した状態が、便所の利用が最も多く、次いで、「便所」の表示、「休憩室 (restroom)」の表示、便所の絵を貼った状態の順であった¹¹⁾。

以上の結果は、「場所の記憶」を補う手法として役立つと考える。

Holden ら¹²⁾は、在宅においてヘルパーの援助のもとで大きなカレンダーを使う作業を続け、何か不確かなことがあるとカレンダーで確認できるようになった痴呆性高齢者を報告している。これは「予定と出来事の記憶」を補っていると考える。

さらに、施設や在宅においては、介護者の手によって様々な工夫が行われている¹³⁻¹⁵⁾(表1)。これらの工夫を記憶を補うという点で整理することは有用であると考ええる。

表1 施設や在宅における工夫 (例)

	荒木・足立 (1992) ¹³⁾ 高齢者施設70ヶ所 訪問調査	Corinne Dolan Alzheimer Center (1990) ¹⁴⁾ 在宅痴呆性老人59名(米国) 電話調査	金 (1996) ¹⁵⁾ 在宅痴呆性老人758名(日本) アンケート調査
失禁に対する工夫	・便所のドアを開け放しておく。 ・夜間にわかりやすいように、照明をつけておいた。 ・入口に「便所」と書いた提灯をぶら下げた。	・便所の照明をつけっぱなしにしておいた。 ・便所に目印をつけた。 ・便所のドアを目立つやすい色に塗った。	・夜でも便所を明るくしておいた。 ・便所のドアを開けたままにしておいた。 ・便所のドアに目印をつけた。
徘徊に対する工夫	・外への出入口に家庭のような玄関を設けた。 ・外への出入口に郵便ポストなどの他へ注意を向けるものを置いた。	・ドアに思いとどまらせるような貼り紙をした。	・「ここは〇〇の家です。新築したから昔とは少し違いますので安心して下さい」と書いて貼った。 ・昔、住んでいた家の写真を大きくして貼った。
防火・安全に対する工夫	・侵入されては困る場所に、黄色の布で通行止めをした。	・夜間照明をつけた。 ・警告表示をした。	・ガス器具を電気製品に変えた。 ・風呂の元栓に「さわるな」と書いて貼った。
その他の工夫	・自動止水栓にした。 ・センサー自動洗浄便器にした。		・幻覚の原因になる物を取り除いた。

(3) 回想に関する研究

回想は、過去の出来事を思い出す過程やその内容を言う¹⁶⁾。回想によって心理的安定や適応が促されるため、定期的に回想の機会をもうける回想法は、痴呆性高齢者に対する一つのアプローチとされている^{16, 17)}。

回想を促すために、昔の生活用品や季節の草花、行事の飾り付けなどが用いられる。これらの材料は、痴呆性高齢者が出来事を思い出す手がかりになっている¹⁶⁾。

日常生活場面においては、本間ら¹⁸⁾が回想と住まい方を調査している。痴呆性高齢者は、現在の行為や行為の対象(人・物・空間)から、類似する過去の行為や行為の対象を思い出していた。しかし、デイサービスに行くことを「学校へ行く」と言うなど、異なる点も多く見られた。

これらの回想に関する知見は、特に痴呆性高齢者で障害されやすい最近のエピソード記憶を補うために役立つと考える。回想は「過去」の出来事を取り扱っているが、過去から現在に至る経過を追って、出来事相互の関連性を見ていくことで、「最近」を含めた分析が可能であると考ええる。

また、記憶を補うという観点からは、想起された記憶内容の正確性が重要になる(偽りの記憶は、現在の行為に支障をきたすだけでなく、過去の認識を変えてしまう: 痴呆性高齢者の記憶障害特性参照)。従来、回想はコミュニケーションを重視しており、想起された記憶内容の質はあまり分析されてこなかった。本間ら¹⁸⁾が行っているような、想起された記憶内容と、実際の出来事との照合が必要と考える。

(4) 痴呆性高齢者へ対するケア

痴呆性高齢者は記憶障害などから、現実とは異なる「世界」を持つ^{19, 20)}と言われる。痴呆性高齢者の「世界」は過去に遡ったものであることが多く、「家に小さな子供が待っているから、早く帰って食事の支度をしなければならぬ」と話す痴呆性高齢者は、その一瞬、小さな子供を抱えていた数十年前の世界に生きているのである²¹⁾。

居住環境は、このような痴呆性高齢者の「世界」を支える舞台や小道具として位置付けられている²¹⁾。

施設においては、和室の居室をもうけたり、陶器の食器を使用するなどの配慮が行われている²²⁾。在宅においては、結婚前の旧姓を老人室に大きく書いて貼ったり、古い家具を使い続けるなどの工夫が行われている¹⁵⁾。

この痴呆性高齢者が持つ「世界」に対する分析はほとんど行われていないが、これらの一部は、痴呆性高齢者で起こりやすい過去の習慣による乗っ取り型エラーであると考えられる。状況の類似性、習慣変更との関係などを調査することで、その背景を捉えることができる。

そして、この「世界」を支える居住環境は、乗っ取り型エラーに対する一つのケアの方向性を示していると考えられる。「世界」に対する分析が十分でないため、ケアも個々の痴呆性高齢者に対応したものにはなっていないが、乗っ取り型エラーについて分析を進めることで、エラーを制御する方法を検討できると考える。

(5)本研究の位置づけ

以上の成果を踏まえ、本研究では次のような調査・分析を行う。

①在宅や施設で、高齢者自身や介護者によって行われている物忘れを補う工夫を調査し、手法を整理する。

これまで記憶を補う手法として位置付けられてこなかった工夫を取り上げ、整理することで、記憶を補う多様な手法を捉えることができると考える。手法の傾向や方向性を分析し、さらに発展的に手法を展開する方法を検討する。

②痴呆性高齢者と自由会話をを行い、会話の中から過去から現在までの出来事に関するものを取り上げ、内容、想起に利用された手がかりをまとめる。

過去から現在に至る経過を追って、出来事相互の関連性を見ていくことで、痴呆性高齢者で障害されやすい「最近」のエピソード記憶を含めた分析を行う。また、想起された記憶内容と、実際の出来事との照合を行う。

③過去の習慣によると推測される間違いについて、高齢者自身や介護者から聞き取り調査を行い、状況の類似性、習慣変更との関係についての分析を行う。結果から、エラーを制御する方法を検討する。

①～③の結果を、記憶障害の重症度別にまとめ、居住環境の記憶に対する補助機能を捉える。記憶障害の重症度別にまとめるのは、居住環境の記憶に対する補助機能を、痴呆進行に対応させて縦層的に捉えるためである。痴呆性高齢者に応じた居住環境の構築に向けた考察を行う。

3. 目的と研究課題

本研究は、居住環境の記憶に対する補助機能を調査し、痴呆性高齢者に応じた居住環境の構築に役立てることを目的とする。

4つの研究課題を設定する(図3)。

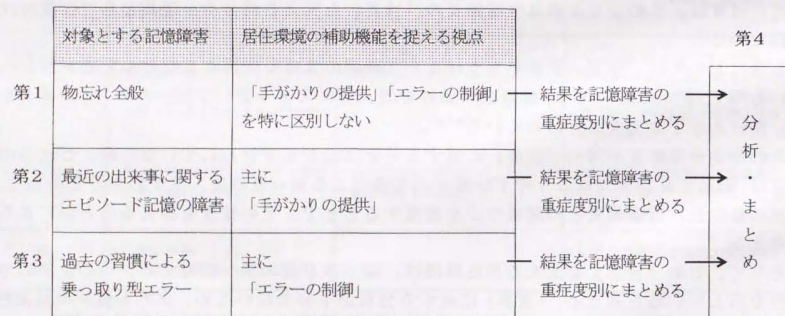


図3 4つの研究課題の関係

第1に、痴呆性高齢者や介護者が行っている物忘れを補う工夫を整理することで、居住環境の補助機能を高める手法と有効性を明らかにする。

第2に、痴呆性高齢者で問題となりやすい最近の出来事に関するエピソード記憶を取り上げ、想起の手がかりとしての居住環境を検討する。

第3に、同じく痴呆性高齢者で起こりやすい過去の習慣による乗っ取り型エラーを取り上げ、居住環境との関係を検討する。

第4に、第1～3の研究課題の結果をまとめ、居住環境の記憶に対する補助機能を捉える。痴呆性高齢者に応じた居住環境の構築に向けた考察を行う。

4. 方法

第1の研究課題に対して、物忘れを補う工夫について痴呆性高齢者及び介護者から聞き取り調査を行った。調査内容は工夫の目的、方法、実施者(高齢者/介護者)、使用状況、効果であった。結果から手法と有効性を分析する。

第2の研究課題に対して、痴呆性高齢者と居室において自由会話をを行った。会話の中から過去から現在までの出来事に関するものを取り上げ、内容、想起に利用された手がかりをまとめた。内容の正確性については介護者から照合を行った。出来事相互の関係や現在へのつながりを含めて分析を行う。

第3の研究課題に対して、過去の習慣によると推測される間違いについて、痴呆性高齢者及び介護者から聞き取り調査を行った。調査内容は間違いの内容、状況、取り違えたものとの類似性、生活内容を変更してからの経過などであった。状況の類似性、習慣変更との関係に着目し、エラーを制御する環境を検討する。

第4の研究課題に対して、第1～3の研究課題の結果を総括し、記憶に対する補助策をまとめた。痴呆性高齢者に応じた居住環境の構築は、家具・小物などへの配慮を含み、日課・ケアの体制などと関連するが、本項では主に設備や居室配置などに埋め込まれた記憶補助機能を取り上げた。補助環境構築の方向性、今後の課題と合わせて記述する。

5. 各章の位置づけ

第1の研究課題が本論・第1章、第2の研究課題が本論・第2章、第3の研究課題が本論・第3章、第4の研究課題が結論にそれぞれ対応している(図4)。

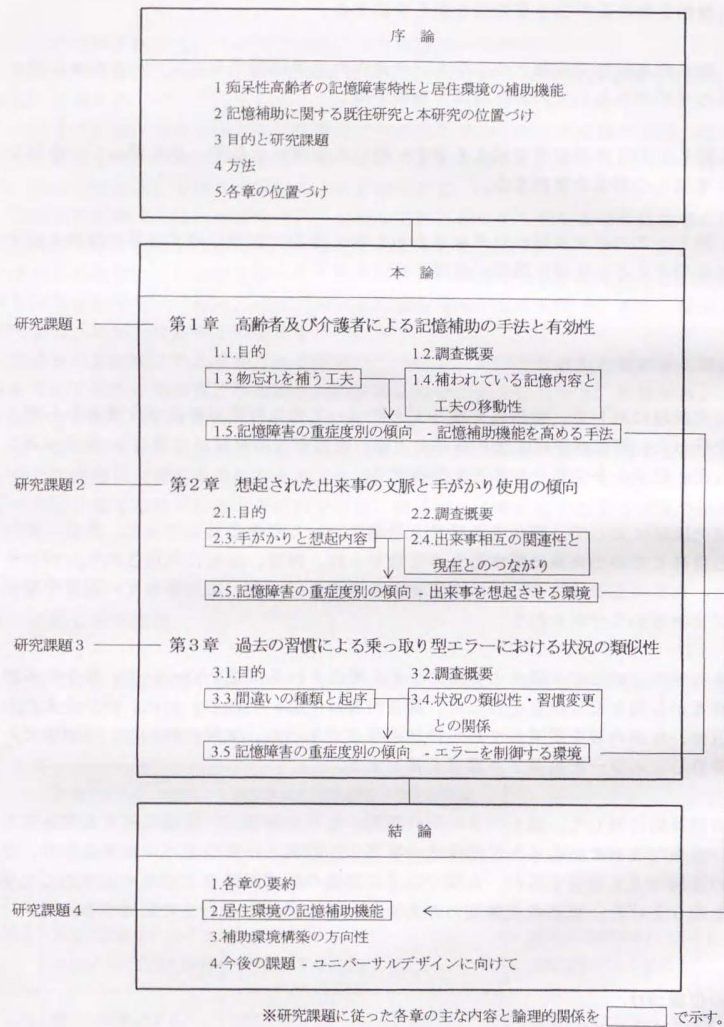


図 4 各章の位置づけ

文献

文 1) 長谷川和夫編：老年期痴呆の診断と治療、中央法規、1994
 文 2) Wilson B.A. and Moffat N. Clinic management of memory problems, Chapman & Hall, London, 1992 (綿森淑子訳：記憶障害患者のリハビリテーション、医学書院、1997)
 文 3) Norman D.A.: The psychology of everyday things, Basic Books Inc., New York, 1988 (野島久雄訳：誰のためのデザイン、新曜社、1993)
 文 4) Hanley I.G.: Reality orientation in the care of the elderly patient with dementia - three case studies, Hanley I., Gilhooly M.: Psychological therapies for the elderly, Croom Helm, London, 1986
 文 5) Hanley R.T.: Case histories and shorter communications - memory aids in reality orientation a single-case study, Behav. Res. Ther. 22 (6), pp.709-712, 1984
 文 6) Kurlychek R.T.: Use of an alarm chronograph as a memory aid in early dementia, Clinical Gerontologist 1, pp.93-94, 1983
 文 7) Coons D.H., Weaverdyck S.E.: Wesley hall - a residential unit for person with Alzheimer's disease and related disorders, The Haworth Press Inc., pp.29-53, 1986
 文 8) Hanley I.G.: The use signposts and active training to modify ward disorientation in elderly patients, J. Behav. Ther. & Exp. Psychiat. 12 (3), pp.241-247, 1981
 文 9) Namazi K.H., Rosner T., and Rechlin L.: Long-term memory cueing to reduce visuo-spatial disorientation in Alzheimer's disease patients in a special care unit, American Journal of Alzheimer's Care and Related Disorders & Research 6 (6), pp.10-15, 1991
 文 10) Namazi K. and Johnson B.: Environmental effects on incontinence problems in Alzheimer's disease patients, American Journal of Alzheimer's Care and Related Disorders & Research 6 (6), pp.16-21, 1991
 文 11) Namazi K. and Johnson B.: Physical environmental cues to reduce the problem of incontinence in Alzheimer's disease unit, American Journal of Alzheimer's Care and Related Disorders & Research 6 (6), pp.22-28, 1991
 文 12) Pinkston E.M., Linsk N.L.: Care of the elderly - A family approach, Pergamon Press Inc., 1984 (浅野仁、芝野松次郎訳：高齢者の在宅ケア - 家族に対する新しいアプローチ、ミネルヴァ書房、1992)
 文 13) 荒木兵一郎、足立啓：痴呆性老人のケア環境、全国社会福祉協議会出版部、1992
 文 14) Home modifications - responding to dementia, Developed and Produced by the Research Center of the Corinne Dolan Alzheimer Center at Heather Hill, 1990
 文 15) 金栄敏、水野弘之：痴呆性老人の生活行動と生活空間に関する研究 - 住まいや住み方の工夫について、日本建築学会近畿支部研究報告集、pp.337-340、1995
 文 16) 野村豊子：痴呆性老人の心理・社会的アプローチ - 回想法およびリアリティ・オリエンテーションを中心として、OT ジャーナル 27、pp.685-693、1993
 文 17) Norris A.: Reminiscence with elderly people, Winslow Press, Oxon, 1986
 文 18) 中間敏行、川村和巳、菅野賢、他：回想要素の形態と住み方の関連 - 痴呆性高齢者の住宅・施設計画に関する基礎研究 その 2、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp.229-230、1996
 文 19) 杉山孝博：ぼけ - 受け止め方・支え方、家の光協会、1997
 文 20) 室伏君士：老年期痴呆への精神医学的接近、内科 MOOK No.40 老年期痴呆の臨床、pp.115-124、1989
 文 21) 雨宮克彦、雨宮洋子、軸丸利恵：痴呆性老人へのアプローチ - その理念と実際、OT ジャーナル 27、pp.680-684、1993

本論

第1章 高齢者及び介護者による記憶補助の手法と有効性

1.1.目的

痴呆性高齢者及び介護者が行っている物忘れを補う工夫を整理することで、居住環境の記憶障害に対する補助機能を高める手法と有効性を明らかにする。

1.2.調査概要

(1)調査方法

痴呆性高齢者と介護者から、物忘れを補う工夫について聞き取り調査を行った。高齢者からの聞き取りは可能な場合に限った。物忘れを補う工夫は、「物忘れを補うために、メモを使ったり、必要な物を準備して目立つ位置に置いておくような工夫を何かしていますか」というように例^(*)をあげて尋ね、できるだけ数多くの工夫をあげてもらうように促した。調査項目は、工夫の目的、方法、実施者(高齢者/介護者)、使用状況、効果であった。聞き取り結果から、工夫を通じて日常生活への支障が軽減されたもの、現存しており確認できるものを取り上げた。

合わせて、小物・家具を含む住環境の記録を行った。これは、もともと住環境が記憶に負担をかけない構造であったために、特に手を加えなくても工夫として役立っていたもの(潜在的な工夫)を取り上げるためである。

(2)対象者

対象者は在宅18名、老人保健施設入所者36名、計54名であった。対象者は、介護者が「呆け老人をかかえる家族の会」会員であり、訪問による詳細な調査に応じたもの、または高齢者がH老人保健施設の一般棟へ2ヶ月以上入所している者であった。H老人保健施設には痴呆棟があるが、痴呆棟は小物などの持ち込みに制限があるため、一般棟入所者に限った。また、入所直後で生活が落ち着かない中では、十分な工夫が行えないため、2ヶ月以上入所している者に限った。

高齢者は簡単な話ができ、屋内の移動が自立している者とした。これは、記憶障害以外に日常生活へ支障をきたす要因をできるだけ除外するためである。会話は、挨拶を言葉で返すことができれば良く、つじつまが合っているかどうかは問わなかった。移動は、一人で場所を移動できれば良く、道に迷うかどうかは問わなかった。

対象者の基本属性は表1.1のとおりである。痴呆の疑い9名、軽度痴呆15名、中等度痴呆11名、重度痴呆19名であった。屋内の移動は多くが歩行であり、13名が車椅子を使用、1名が這って移動していた。

記憶障害は軽度15名、中等度12名、重度12名、最重度15名であった。記憶障害はリバーミード記憶のチェックリスト(資料)^(*)を用いて評価した。リバーミード記憶のチェックリストは、行動観察によって、日常生活における記憶の問題を評価するものである。本研究では、記憶障害が日常生活へ及ぼしている支障の程度を評価するために用いた。該当する項目数による区分(軽度/中等度/重度/最重度)は便宜上のものである。

表1.1 対象者基本属性

	性別	年齢	痴呆重症度 *1	記憶障害の重症度 *2	屋内の移動方法		性別	年齢	痴呆重症度 *1	記憶障害の重症度 *2	屋内の移動方法
在宅1	女性	78歳	中等度痴呆	15項目、最重度	歩行	施設11	女性	82歳	痴呆の疑い	4項目、軽度	歩行
2	男性	80歳	重度痴呆	15項目、最重度	歩行	12	女性	73歳	軽度痴呆	6項目、中等度	車椅子
3	女性	73歳	中等度痴呆	9項目、中等度	歩行	13	女性	73歳	重度痴呆	15項目、最重度	車椅子
4	女性	83歳	中等度痴呆	14項目、重度	歩行	14	女性	82歳	重度痴呆	11項目、重度	歩行
5	女性	83歳	重度痴呆	15項目、最重度	歩行	15	女性	69歳	痴呆の疑い	3項目、軽度	車椅子
6	女性	80歳	軽度痴呆	4項目、軽度	歩行	16	女性	83歳	重度痴呆	15項目、最重度	車椅子
7	女性	93歳	軽度痴呆	9項目、中等度	歩行	17	女性	91歳	重度痴呆	17項目、最重度	歩行
8	男性	73歳	痴呆の疑い	3項目、軽度	歩行	18	女性	92歳	重度痴呆	17項目、最重度	歩行
9	女性	71歳	軽度痴呆	4項目、軽度	歩行	19	男性	87歳	軽度痴呆	8項目、中等度	車椅子
10	女性	76歳	重度痴呆	11項目、重度	歩行	20	女性	82歳	中等度痴呆	10項目、重度	車椅子
11	女性	78歳	中等度痴呆	15項目、最重度	歩行	21	男性	84歳	軽度痴呆	2項目、軽度	歩行
12	女性	82歳	軽度痴呆	3項目、軽度	歩行	22	女性	80歳	軽度痴呆	5項目、中等度	車椅子
13	男性	84歳	中等度痴呆	8項目、中等度	歩行	23	女性	71歳	軽度痴呆	2項目、軽度	歩行
14	女性	83歳	中等度痴呆	16項目、最重度	車椅子	24	女性	88歳	軽度痴呆	4項目、軽度	歩行
15	男性	77歳	重度痴呆	15項目、最重度	這って移動	25	男性	84歳	中等度痴呆	11項目、重度	車椅子
16	女性	92歳	中等度痴呆	13項目、重度	歩行	26	女性	90歳	重度痴呆	12項目、重度	歩行
17	女性	83歳	中等度痴呆	8項目、中等度	歩行	27	女性	83歳	重度痴呆	13項目、重度	歩行
18	女性	75歳	中等度痴呆	12項目、重度	歩行	28	男性	88歳	重度痴呆	10項目、重度	車椅子
施設1	女性	74歳	痴呆の疑い	2項目、軽度	歩行	29	女性	72歳	軽度痴呆	5項目、中等度	歩行
2	女性	82歳	軽度痴呆	7項目、中等度	歩行	30	男性	82歳	重度痴呆	13項目、重度	車椅子
3	女性	85歳	痴呆の疑い	2項目、軽度	車椅子	31	女性	84歳	重度痴呆	14項目、重度	車椅子
4	女性	81歳	軽度痴呆	5項目、中等度	歩行	32	男性	89歳	重度痴呆	16項目、最重度	車椅子
5	女性	83歳	痴呆の疑い	2項目、軽度	歩行	33	女性	72歳	重度痴呆	15項目、最重度	歩行
6	女性	83歳	軽度痴呆	8項目、中等度	歩行	34	女性	91歳	重度痴呆	17項目、最重度	歩行
7	女性	80歳	軽度痴呆	5項目、中等度	歩行	35	女性	92歳	重度痴呆	15項目、最重度	歩行
8	女性	88歳	痴呆の疑い	4項目、軽度	歩行	36	女性	89歳	重度痴呆	16項目、最重度	歩行
9	女性	82歳	痴呆の疑い	2項目、軽度	歩行						
10	女性	78歳	痴呆の疑い	3項目、軽度	歩行						

*1 CDR で評価、*2 リバーミード記憶のチェックリストで評価

(3) 分析方法

工夫は、工夫を使用できる場所の範囲によって、①携帯の補助具、②可動補助具、③固定補助具に大別した。工夫の移動（可能）性は①が最も大きく、②、③の順で小さくなる（図 1.1）。工夫の移動性によって、補われている記憶の種類、潜在的工夫などの分析を行った。

工夫の使用状況から、記憶補助機能をまとめた。記憶補助機能は、記憶を補う手法に関して報告されている事項の中から、痴呆性高齢者にも該当すると考えられるものを取り上げて分析を行った（表 1.2）。

Norman はわかりやすいデザインの原則として、①可視性、②よい概念モデル、③よい対応づけ、④フィードバックをあげている^(x1)。このうち、①可視性と③よい対応づけをまとめて、「物をまとめる工夫」「対応関係を示す工夫」「配置を利用した工夫」として分析を行った。②よい概念モデル、④フィードバックは、本研究では高齢者自身からの聞き取りが充分に行えないことが多く、工夫の有効性の確認が難しいため取り上げなかった。

また、Norman はエラーに備えたデザインを紹介している^(x1)。本研究ではこれらをまとめて「安全に対する工夫」として分析を行った。Norman は健常者を対象としているため、エラーに備えたデザインに、間違いのフィードバックと修正を含んでいるが、本研究は痴呆性高齢者を対象としているため、安全対策についてエラーの過程を追って分析を試みた。

Wilson と Moffat は、記憶障害の外的補助手段として、①情報を貯蔵する補助具、②行動の手がかりを与える補助具をあげている^(x3)。①情報を貯蔵する補助具の具体例の中から、ノート、日記など、痴呆性高齢者が使用できるものを「文字を使った工夫」として取り上げた。パソコン、ポケットベルなどの電子機器は、痴呆性高齢者が取り扱うことが難しいため、本研究では取り上げなかった。

これらの外的補助手段は、対象者が補助具を利用して記憶を必要とする行為をやりとげることが前提としている。しかし、痴呆性高齢者では、一連の動作のうち一部は行いが、全てをやりとげることが難しく、日常生活に支障をきたしている例が少なくない。このため「（一連の動作のうち、記憶を必要とする）行為を他の形で置き換える工夫」を加えて分析を行った。

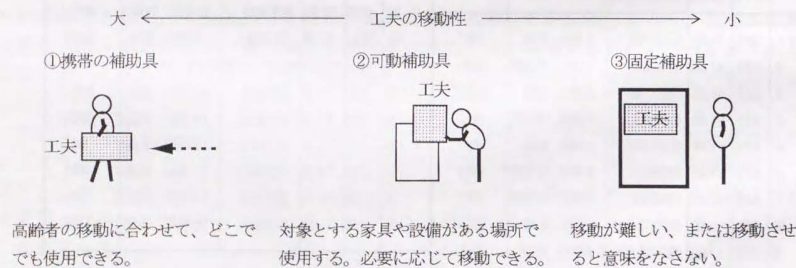


図 1.1 移動性による工夫の分類

表 1.2 記憶を補う手法に関して報告されている事項

	対象	概念	手法
Norman (1988)	健常人	わかりやすいデザインの原則	①可視性 : 目に見える ②よい概念モデル : 操作結果から利用者に、一貫性のあるシステムモデルを提供できる ③よい対応づけ : 行為と結果の対応関係が確認できる ④フィードバック : 利用者が行為の結果を常に受け取れる
		エラーに備えたデザイン	①エラーの原因を少なくする ②行為を元に戻せる (undo できる) ③生じたエラーを発見しやすく、訂正しやすい。 ④利用者のエラーを理解する
Wilson & Moffat (1992)	記憶障害者	記憶障害者の外的補助手段	①情報を貯蔵する補助具 : ノート、日記、パソコン等 ②行動の手がかりを与える補助具 : アラーム付の時計、タイマー等

さらに、聞き取りから得られた工夫には、前記のような住環境の物的な性能（機能的意味）を利用したもの他に、なじみの関係に基づく心的なより拠としての住環境（帰属的意味）を利用したものが見られた。痴呆性高齢者では、住環境の工夫として、使い慣れた家具や小物などの帰属的意味が重要視されている^(x4-x8)。このため、これらの工夫を「帰属的意味を利用した工夫」として取り上げた。

以上から、記憶補助機能を分析するために取り上げた手法は次のとおりである。

- (1) 文字を使った工夫
- (2) 物をまとめる工夫
- (3) 対応関係を示す工夫
- (4) 配置を利用した工夫
- (5) 行為を他の形で置き換える工夫
- (6) 帰属的意味を利用した工夫
- (7) 安全に対する工夫

最後に、記憶障害の重症度別に特徴をまとめ、記憶補助機能を高める手法を考察した。

1.3. 物忘れを補う工夫

多くの工夫が行われ、物忘れを補うのに役立っていた（表 1.3）。工夫の使用状況から、記憶補助機能をまとめる。

(1) 文字を使った工夫

メモ、日記、手帳などは、痴呆性高齢者に限らず利用される補助具である。多くの情報を文字などで示して、検索しやすい形に整理し保存するものであると考える。

表 1.3 物忘れを補う工夫 (全データ)

認知障害の重症度	①携帯補助具	②可動補助具	③固定補助具
軽度	<ul style="list-style-type: none"> メモ[在 8, 施 1, 施 7, 施 8, 施 23] 日記[在 9, 施 7] カレンダー[在 6, 在 8, 在 9, 在 12, 施 8, 施 23] 手帳[在 9, 在 12, 施 10, 施 15] 小物をまとめて箱や袋に入れた[在 6, 在 12, 施 1, 施 9, 施 10, 施 23] 杖に紐をつけ、忘れないように手にかけた[施 3, 施 23] 持ち物を準備して、枕元に置いた[施 10, 施 15, 施 24] ガスコンロを使っている時は、輪ゴムを手にかけた[在 12] 	<ul style="list-style-type: none"> 風呂の自動洗浄器に、操作方法を書いて貼った[在 8] タンスの代わりに脱衣カゴを使った[在 8] 	<ul style="list-style-type: none"> ガスを消し忘れるため、火災警報機をつけた[在 9] ガラス戸にぶつからないように、色テープを貼った[在 9] 物の置き場所を変えないようにしていた[在 8, 在 9, 施 3, 施 23] エアコンのリモコンを、エアコンに貼り付けた[在 8]
中等度	<ul style="list-style-type: none"> メモ[在 13, 施 4, 施 19, 施 22] 小物をまとめて箱や袋に入れた[在 3, 施 2, 施 6, 施 7, 施 19] コップなどの必要な物は、いつも車椅子に乘せしていた[施 12, 施 22] 持ち物に全部名前を書いた[在 3, 施 7, 施 29] 	<ul style="list-style-type: none"> ストーブをヒーターにした[在 7, 在 17] 介護者が出かける時に、行き先を書き添えて貼った[在 13] 電話に電話番号を書いて貼った[在 7] 着替えることを忘れるため、「着替えましょう」と貼り紙をした[施 12] 1日の流れを書いて、壁に貼った[施 7, 施 12] 	<ul style="list-style-type: none"> タンスの引き出しに中身を書いて貼った[在 7, 施 12, 施 22] 食卓の席ご名前を書いて貼った[施 4, 施 6, 施 29] 居室の入口に名前を書いて貼った[施 2, 施 4, 施 7, 施 19] 夜間、便所の電気をつけっぱなしにしておいた[在 7, 在 13] 便所のドアに目印を付けた[在 7, 施 2]
重度	<ul style="list-style-type: none"> 持ち物に全部名前を書いた[在 4, 施 25] 	<ul style="list-style-type: none"> ストーブをヒーターにした[在 16] 1日の流れを書いて、壁に貼った[施 28] 居室ご名前や年齢の書いた誕生日カードなどを貼った[在 10, 施 20] 	<ul style="list-style-type: none"> 自動洗浄式の風呂にした[在 18] ボータブルトイレに「トイレ」と書いて貼った[施 31] 汚し物を入れる箱に、「汚し物入れ」と書いた[施 31] 食卓の席ご名前を書いて貼った[施 14, 施 30, 施 31] 居室の入口に名前を書いて貼った[施 25, 施 31] 便所に行くのに迷うため、便所までの道のりのドアを開け放した[在 16] 夜間、便所の電気をつけっぱなしにしておいた[在 16]
最重度			<ul style="list-style-type: none"> 家具にぶつかるので壁面収納にした[在 14] ドアを開め忘れるので、ドアクローザーをつけた[在 5] 掃き出しから落ちるのでテラスをつけた[在 1] 便所の鍵をかけた開けられなくなるので、鎖を取り外した[在 1] 便所のスリッパのまま歩き回るので、マットを敷きスリッパを使わないようにした[在 5]

※ []内は事例番号、在：在宅、施：施設、□ は介護者が工夫を行っていることを示す。

痴呆性高齢者は、情報の記入・分類・検索などが難しく、周囲の手助けを受けて利用していた。

「1日の流れを書いて、壁に貼った」「着替えましょう」と貼り紙をした」工夫は、メモなどの補助具を壁に貼ったのものであると考えられる。壁に貼ることで工夫の移動性に乏しくなった(携帯補助具→可動補助具)ものの、目に入りやすくなり、痴呆性高齢者が補助具に気づきやすくなっていた。また、同時に周囲の人々の目にもふれるため、痴呆性高齢者が補助具を使用する援助を受けやすくなっていた。

「手帳」の使用状況[在 9]

デイサービスで、他の利用者やスタッフの名前を覚えられないため、小さなノートを利用していた。ノートに名前を書くのは本人ではなく、「ここに名前書いて」と頼み、相手に名前を書いてもらっていた。また、名前を覚えていない相手に会った時、ノートから名前を探すのも本人ではなく、「ここに名前書いてもらったことある?どこにある?」と相手に探してもらって名前を確認していた。

小さなノートは、いつも持っている手提げ鞆に入れて持ち歩いていた。

「メモ」の使用状況[施 7]

老人保健施設で日課の時間やスタッフの名前、家族が来る予定、売店に買いに行く物など、何でもメモに書いて、床頭台に入れていた。しかし、メモの整理が悪いため、何を書いたメモなのかわからなくなってしまっていた。

その後、目立つところにメモをすれば確認しやすいことに気づき、枕元にあるティッシュの箱にマジックでメモをするようになった。これもメモでいっぱいになってしまうとわからなくなってしまうが、スタッフが気づいて、用が済んだメモを二本線で消したり、大切な用件は箱の上の部分にメモを貼り付けたりして、メモの整理を助けていた。

「日記」の使用状況[在 9]

介護者と一緒に、毎日日記を付けていた。日記の内容は、散歩に行った、誰かが訪ねてきたなどのその日の出来事と、天気良くて気持ち良かった、また来てくれるといいなどの簡単な感想である。介護者が「今日の天気は?」「今日は何した?」「それでどう思った?」と声をかけ、「じゃあ、そう書いて」と促していた。

時折、日記をめくりながら、介護者と以前の話をする事があった。

「手帳」の使用状況[施 10]

老人保健施設で、タバコをスタッフが管理し、時間を決めて手渡していた。しかし、高齢者がタバコをもらったことを忘れてしまうため、「渡した」「いや、もらっていない」と押し問答になることがあった。このためノートを作り、タバコを渡した時に時間を記入するようにした。

しばらく、タバコをもらいに来ると、スタッフと一緒にノートを確認することを続けたところ、タバコをもらったことを忘れて取り来ても、一人でノートを確認して帰っていくようになった。

「1日の流れを書いて、壁に貼った」の使用状況[施12]

老人保健施設に入所して、食事やおやつ時間に食堂へ行ったり、入浴やサークルへ行ったりするスケジュールがなかなか覚えられなかった。

このため1日の流れを大きく書いて、ベッドの横に貼った。居室へむかえに行ったスタッフが貼り紙を使って何度も説明しているうちに、おおまかな流れはわかるようになった。しかし、時間までは覚えられず、時間になるとスタッフが声をかけていた。

「着替えることを忘れるため、『着替えましょう』と貼り紙をした」の使用状況[施12]

老人保健施設に入所して、朝食時、着替えてから食堂へ行くことがなかなか覚えられなかった。このためベッドの横に「着替えましょう」と大きく書いて貼った。

高齢者は、貼り紙には気づいているようだったが、書いてあることを確認する様子はなく、状況はあまり変わらなかった。朝食前に声をかけに行ったスタッフが、貼り紙を示して着替えるようにくりかえし説明することを続けたところ、着替えることが徐々に習慣になっていった。

「風呂の自動湯沸器に操作方法を書いて貼った」「電話に電話番号を書いて貼った」は、設備や家具の使用方法を文字で示した工夫である。自動湯沸器や電話に直接貼ることで、補助具と対象物の対応をわかりやすくしていると考えられる。

一方、「ポータブルトイレに『トイレ』と書いて貼った」「汚れ物を入れる箱に、『汚れ物入れ』と書いた」工夫は、設備の種類を文字で示している。対象物の同定（それが何であるかがわかる）を助ける工夫であると考えられる。また、これらの工夫は対象物を、貼り紙等することで特徴づけている。対象物を目立たせることで、痴呆性高齢者の注意を引き、対象物を利用するように促していると考えられる。

「風呂の自動湯沸器に、操作方法を書いて貼った」の使用状況[在8]

浴室を改築し、風呂の湯沸かしがボタン式で温度調節するものになった。主電源を入れて、温度調節をして、スイッチをONにするという操作が覚えられなかった。

操作パネルの横に、「①左上の□ボタンを押す。②▲▼で温度を合わせる。③右下の○ボタンを押す（赤いランプがつく）」と貼り紙をして、使っていた。

「電話に電話番号を書いて貼った」の使用状況[在7]

老人室に電話があり、介護者の部屋と内線につながっていた。

高齢者は電話を使うことはできたが、介護者の部屋の番号が覚えられなかった。介護者は何度も、番号を書いてわたしていたが、どこかにしまい込んでなくなってしまっていた。このため、電話に「〇〇（介護者の名前）は受話器を上げて2」と書いて貼り付けた。電話番号をなくすことはなくなったが、高齢者が電話をかけることはほとんどなかった。

「ポータブルトイレに『トイレ』と書いて貼った」の使用状況[施31]

老人保健施設で便所にたどりつくまでに失禁してしまうため、ベッドの横にポータブルトイレを置いたが、ポータブルトイレを置いたことを忘れてしまい、相変わらず便所に行こうとして失禁していた。

ポータブルトイレに「トイレ」と書いて貼ったところ、時々、ポータブルトイレを使うようになった。しかし、便所に行くことも続いており、ポータブルトイレがポータブルトイレであることを忘れてしまい、トイレをゴミ箱にしてしまったこともあった。

「汚れ物を入れる箱に、『汚れ物入れ』と書いた」の使用状況[施31]

汚した衣類をタンスにしまい込んでいた。汚れ物を入れる箱を作って説明しても、その直後は箱へ入れても、すぐに忘れてしまい、またタンスに入れてしまっていた。

箱に「汚れ物入れ」と書いたところ、時々、汚した衣類を箱に入れるようになった。しかし、タンスへ入れることも続いている。

(2)物をまとめる工夫

「小物をまとめて箱や袋に入れる」「エアコンのリモコンをエアコンに貼り付けた」工夫は、対象物を機能別などにまとめることで記憶への負担を少なくしたと考えられる。ただし、対象物をまとめても、まとめて置いた場所は覚えていなければならない。

例えば、タンスは物を整理するための使われ、もともと対象物をまとめる役割を果たしている。しかし、同じ様な引き出しが並んでいるため、物を入れた場所を覚えることが難しい。これについてはいくつか工夫が行われており、「タンスの引き出しに中身を書いて貼った」工夫は、まとめた対象物を文字で示し、「タンスの代わりに脱衣カゴを使った」工夫は、まとめた対象物が見えるようにすることで、記憶を補っていると考えられる。

「エアコンのリモコンをエアコンに貼り付けた」の使用状況[在8]

エアコンのリモコンをどこかに置いて忘れてしまい、度々探すことがあったため、エアコンに貼り付けた。その後、エアコンのリモコンがなくなったことはない。

「小物をまとめて箱や袋に入れた」の使用状況[施23]

クッキーの空き缶の中に、チラシや広告を利用して箱を作り、幾層にも重ねて利用していた。施設で手芸クラブに参加しており、手芸用品や材料などをまとめて箱に入れていた。

箱は床頭台や押して歩く老人車の中、衣装箱、タンスの中と、たびたび行方不明になったが、ある程度大きいので見つけやすかった。

「タンスの引き出しに中身を書いて貼った」の使用状況[在7]

介護者の家に同居して、新しいタンスを使うようになったが、どこに何が入っているのかがなかなか覚えられず、出し入れが一人でできなかった。引き出しに「シャツ」「ねまき」などと中身を書いて貼ったところ、徐々に覚えて使えるようになった。

「タンスの代わりに脱衣カゴを使った」の使用状況[在8]

タンスに服を入れると、どこに何を入れたかわからなくなってしまうため、タンスの前に服を積み上げていた。しかし、服を積み上げると、種類ごとに分けておいても崩れてきて混じってしまうので、一部を脱衣かごに入れて整理していた。脱衣かごは中が見えるため、何を入れたかが確認しやすかった。

(3) 対応関係を示す工夫

「居室の入口に名前を書いて貼った」「食堂の席に名前を書いて貼った」「便所のドアに目印を付けた…」工夫は、空間を特徴付けることで識別を助けていると考えられる。「便所までの道すじのドアを開け放した」工夫は、目的地を見えるようにすることで、思い出す作業を、確認する作業へ変えていると考えられる。

前者は間接的な工夫であり、「目印があるドア=トイレ」のように特徴と場所の対応関係を覚えなければならない。これに比べて、後者は直接的な工夫であり、場所をそのまま確認するため、痴呆性高齢者にとってわかりやすい工夫であると考えられる。また、後者の工夫は、見えるようにすることで、注意を引き、便所へ行くことを促しているとも考えられる。

「居室の入口に名前を書いて貼った」の使用状況[施2]

老人保健施設に入所したが、居室が覚えられず、周りの部屋に入ってトラブルになったりしていた。居室の入口に「〇〇さんの部屋」と大きく書いて貼ったところ、徐々に覚えて部屋を間違えることがなくなった。高齢者に居室の場所を尋ねると「あの表札の出ている部屋だ」と答えていた。

「食堂の席に名前を書いて貼った」の使用状況[施4]

食堂の席が覚えられず、手近な席に座ってしまうため、周りの人とトラブルになっていた。席に名前を書いて貼ったところ、「名札が付いている席だから…」と周りに席を探してくれるように頼むようになった。

「便所のドアに目印を付けた」「夜間、便所の電気をつけっぱなしにしておいた」の使用状況[在7]

介護者の家に引っ越してきて、便所の場所がなかなか覚えられなかった。便所のドアノブに目印のボブリアをぶら下げたところ、徐々に覚えて一人でできるようになった。

夜間は目印が見えないため、便所の電気をつけっぱなしにしておいた。

「便所に行くのに迷うため、便所までの道すじのドアを開け放した」の使用状況[在16]

同じ家に長年住んでいるが、便所に行くのに迷うようになった。このため道すじを覚えていなくても、便所に行けるように、便所までの道すじのドアを開け放した。一人で便所に行ける頻度が増えた。

(4) 配置を利用した工夫

「持ち物を準備して、枕元に置いた」工夫は、必要な物を忘れないだけでなく、入浴があること自体を思い出させていた。持ち物が枕元にあることが、物を準備して目立つ位置に置いた高齢者自身の行為（の目的）を思い出させているのである。

同じく「物の置き場所を変えないようにしていた」工夫は、物の置き場所を忘れないだけでなく、それぞれの物を利用してそれぞれの場所で行った高齢者自身の行為を思い出させていたと考えられる。物の配置が、高齢者が作業を行う手順や進行段階に対応していたことも考えられる。

特定の物が特定の場所にあることが、高齢者自身の行為内容を示していると考えられるのである。

「持ち物を準備して、枕元に置いた」の使用状況[施10]

老人保健施設で入浴は午後、週2回だった。朝「今日はお風呂の日ですよ」とスタッフから声をかけられると、すぐに着替えなどを用意して枕元に置いていた。午後には入浴があることも忘れていたが、居室に帰ってくると、枕元の着替えを見て入浴を思い出すことができた。

「物の置き場所を変えないようにしていた」の使用状況[在9]

介護者が老人室を片付けると、高齢者は何があるかわからなくなり、混乱して、日頃の簡単な身の回りのこともできなくなってしまっていた。

このため介護者は、老人室を掃除しても、物の配置を変えないようにしていた。

(5) 行為を他の形で置き換える工夫

「杖に紐をつけ、忘れないように手にかけた」は、体を移動させると自動的に杖が付いてくるようにした工夫である。杖を忘れずに持って帰ることを、一連の動作の中に自動的に組み込んでいると考えられる。「必要な物は、いつも車椅子に乗せていた」も、車椅子の移動に応じて必要な物が自動的に移動するようにした工夫であり、必要な物を持ち歩くことを、動作の中に自動的に組み込んでいると考えられる。

一方、「ガスコンロを使っている時は、輪ゴムを手にかけた」工夫は、ガスの元栓を開く時に元栓にかかっていた輪ゴムを手に移し、コンロを使い終わって元栓を閉める時に輪ゴムを元栓に戻している。輪ゴムは「ガスコンロを使用中であること」を示す手がかりであ

り、元栓にかかっていた輪ゴムを手に移すことで、一連の動作の中に「手がかりの提供」を自動的に組み込んでいられると考えられる。ただし、このような工夫は「手がかり」を使いこなせないと意味がないため、前2者に比べて、痴呆性高齢者にとってやや難しい工夫であると考えられる。

「持ち物に全部名前を書いた」は、高齢者が物を間違えて持って帰ってきた時に、介護者が対応できるようにした工夫である。一連の動作の中で、記憶に負担をかけていた部分を、介護者の行為で事後に置き換えられるようにしたものと考えられる。

さらに、「便所にマットを敷き、スリッパを使わないようにした」工夫は、スリッパの履き替えを省略している。便所へ行って排泄するという一連の動作の中で、記憶に負担をかけていた部分を、マットを敷くことで置き換えていると考えられる。「ドアクローザーを付けた」工夫は、高齢者がドアを閉め忘れても、自動的にドアが閉まるようにしたもので、記憶に負担をかけていた部分を、設備によって置き換えていると考えられる。

「杖に紐をつけ、忘れないように手にかけた」の使用状況[施3]

老人保健施設で居室から食堂などへ行く時、杖を持って行く時と持っていない時があり、杖を持って行く時と忘れてきていた。杖に名前を書いてもらい、持ち手の部分に紐をつけた。紐は歩いている時も常時手にかけており、食堂などに腰かけている時も手にかけたままにしていた。その後、杖を忘れる頻度が減り、紐の部分に鈴を付けるなど工夫を重ねていた。

「コップなどの必要な物は、いつも車椅子に乗せていた」の使用状況[施12]

老人保健施設で、必要な物を忘れないように車椅子に乗せたままにしていた。コップ、箸、スプーン、湿布、塗り薬、ハサミ、鉛筆、自宅の電話番号などを書いたメモ、テレホンカード、小銭入れ、タオル、ティッシュペーパー、排泄用のパッド、おかし、膝掛け、カーディガンなどである。車椅子の後方ポケット、座席の隅、車椅子の横と後ろに手提げ鞆を下げて入れていたが、整理が悪いため、どこに何を入れているのかわからなくなっていた。「どこかにあるから探して」とスタッフに探してもらったり、タオルやテレホンカードなどはいつも車椅子に乗っていた。

「ガスコンロを使っている時は、輪ゴムを手にかけた」の使用状況[在12]

やかんを火にかけていて、一度、忘れてしまい火を付けたままにしたことがあった。このため、忘れないようにガスコンロを使っている時は、輪ゴムを手首にかけるようにした。輪ゴムは普段、ガスコンロの元栓にかけておき、元栓を開ける時に手首にかけ、また、元栓を閉める時にガスコンロの元栓に戻していた。この後、ガスコンロを使っていて忘れたことはない。

「持ち物に全部名前を書いた」の使用状況[在3]

近くの銭湯に通っていたが、違う洗面器を間違えて持ってきたり、持って行っていない傘を持って帰ってきたりしていた。このため持ち物に全部名前を書き、間違えて帰ってくると、介護者がまとめて銭湯へ取り替えに行っていた。高齢者自身は名前が書いてあっても、名前を確認している様子はなかった。

「便所のスリッパのまま歩き回るので、マットを敷きスリッパを使わないようにした」の使用状況[在5]

家の中で普段はスリッパを履いていない。便所へ行くとスリッパを履くが、便所から出る時にスリッパを脱ぐことを忘れてしまい、便所のスリッパを履いたまま家の中を歩いていた。このため、便所にマットを敷き、スリッパを使わないようにした。

「ドアを閉め忘れるので、ドアクローザーを付けた」の使用状況[在5]

便所に行き、ドアを閉め忘れていた。便所のドアに「ドアを閉めましょう」と貼り紙をしたが、あまり効果がなく、ドアを閉め忘れても自動的に閉まってくれるように、ドアクローザーを付けた。

(6) 帰属の意味を利用した工夫

「居室に名前や年齢の書いた誕生日カードなどを飾った」「介護者が出かける時に行き先を書いて貼った」工夫は、年齢や介護者の行き先等を示すだけでなく、介護者と以前の話をする手がかりになったり、介護者の姿の代わりになったりしていた。誕生日カードや貼り紙等が示している機能的意味（年齢や介護者の行き先等）だけでなく、帰属の意味（誕生日の時の思い出、介護者が残したもの）を利用した工夫であると考えられる。

機能的意味は利用者により比較的共通しているのに比べ、帰属の意味は利用者によって様々であり、利用や効果の評価が難しい。さらに、これらの工夫は、あまり意図的に行われていないため、聞き取り調査では捉えにくい、実際には数多く存在していると考えられる。

「居室に名前や年齢の書いた誕生日カードなどを飾った」の使用状況[在10]

自分の年齢や、今の季節を間違えるが、年齢が書いてある誕生日カードや、最近の行事の写真（クリスマス等）を見ると正確に答えることができた。

介護者は、高齢者の部屋に年齢が書いてある誕生日カードや、最近の行事の写真を飾っており、「誕生日の時には…」「クリスマスには…」と誕生日カード等を示して、よく話をしていた。

「介護者が出かける時に、行き先を書いて貼った」の使用状況[在13]

介護者は高齢者に、出かけることを言ってから出かけていた。しかし、高齢者はそれを忘れてしまい、介護者の姿が見えないため、介護者を探し歩いていた。介護者が出かける時に、行き先を大きく書いて貼るようになったところ、高齢者は貼り紙を見て待つていられるようになった。

高齢者は、貼り紙に行き先が書いてあることはよくわかっていないようであったが、介護者が残して行った紙がある（介護者の姿の代わりがある）ことで、安心していた。

(7) 安全に対する工夫

「ガラス戸に色テープを貼った」は、ガラス戸にぶつからないように注意を促す工夫で

ある。家庭内事故を起こす相手であるガラス戸を目立たせることで、危険を防いでいると考えられる。「火災警報機をつけた」は、事故が起こった時に周囲に知らせる工夫である。事故発生を聴覚的にうったえることで、早期対応を促していると考えられる。事故に対して、予防-想起対応という各段階で工夫が行われていることがわかる。

一方、設備によって危険を防ぐ工夫が行われている。「家具にぶつかるため、壁面収納にした」工夫は、家庭内事故を起こす相手である家具の引っ張り自体を取り除き、危険を防いでいる。「便所の鍵を取り外した」工夫も、事故を起こす相手を取り除いている点で、同様の工夫であると考えられる。「自動濾過式の風呂にした」工夫は、痴呆性高齢者が風呂を沸かし忘れても、自動的に風呂が沸いているようにたもので、自動化によって危険を防いでいると考えられる。「掃き出しにテラスを付けた」工夫は、痴呆性高齢者が間違っただけで掃き出しから出ても転落しないようにしたもので、安全設備によって危険の拡大を防いでいると考えられる。「ストーブをヒーターにした」工夫も、痴呆性高齢者が間違っただけで温熱機器を取り扱っても火傷等をしないようにしたもので、より安全な器具を使用することによって危険の拡大を防いでいると考えられる。

「ガラス戸にぶつからないように、色テープを貼った」の使用状況[在 6]
 家の中を、杖をついて歩くようになった。ずっと下を向いているため、ガラス戸が閉まってもわからず、度々ぶつかっていた。ガラス戸の近くで一度、立ち止まれば良いのだが、下を向いたままで、立ち止まる時間加減がなかなか覚えられなかった。このためガラス戸に色テープを貼った。少し遅くから、ガラス戸があることがわかるようになり、ぶつからなくなった。

「ガスを消し忘れるため、火災警報機をつけた」の使用状況[在 6]
 ガスコンロを使っていて忘れてしまい、鍋をこがしたことがあった。このため天井に火災警報機をつけた。しかし、現在までに、火災警報機がなったことはない。

「家具にぶつかるので壁面収納にした」の使用状況[在 14]
 家の中で車椅子を使っていたが、移動する時にタンスなどにぶつかるようになった。不注意や視力の低下等と共に、タンスなどの位置を忘れてしまい、車椅子で直進してしまうためぶつかることが考えられた。このため家を改築する際、壁面収納にした。

「便所の鍵をかけて開けられなくなるので、鍵を取り外した」の使用状況[在 1]
 便所へ行くとドアを閉めて鍵をかけるが、便所から出る時には鍵をかけたことを忘れてしまい、そのまま出ようとして出られなくなっていた。このため鍵を取り外した。

「自動濾過式の風呂にした」の使用状況[在 18]
 夜間起き出してきて、風呂に入っていることがあった。一人で風呂に水を入れるが、湯をわかすことやその方法を忘れてしまい、水風呂に入っていた。このため常時お湯がわいている自動濾過式の風呂にした。

「便所のスリッパを使う方法」に関する工夫と潜在的工夫

工夫 便所のスリッパのまま歩き回るので、マットを敷きスリッパを使わないようにした[在 5]
潜在的な工夫 下記 一部
 「便所のスリッパを使う方法」に関する工夫例以外の対応（記憶障害の重症度：最重度）
 在 1, 在 11, 在 14, 施 17, 施 18, 施 33, 施 35, 施 36 - 便所の床は他の場所と同じであり、もともと便所専用スリッパは利用していない
 在 2, 在 15, 施 16, 施 32, 施 34 - オムツ等を使用しており、高齢者が便所へ行くことはない

※工夫例以外の対応が見られなかった7つの工夫は、省略した。

以上のような「潜在的な工夫」は、痴呆性高齢者に補助具を使用するための労力や違和感を感じさせることなく、その状況に応じた記憶を補っていると考えられる。

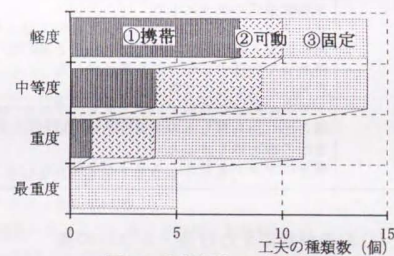
1.5. 記憶障害の重症度別の傾向 - 記憶補助機能を高める手法

記憶障害の全ての段階（軽度から最重度）で、それぞれ工夫が行われ、物忘れを補うのに役立っていた。記憶障害の全ての段階で、記憶補助機能を高める可能性があることがわかる。記憶障害の重症度別の傾向をまとめ、記憶補助機能を高める手法について考察する。

(1) 記憶障害の重症度別の傾向

記憶障害の重症度によって、工夫内容は異なり、軽度から最重度になるに従って、工夫の移動性が大きいもの（①携帯の補助具）から小さいもの（③固定補助具）へ移っていく傾向が見られた（図 1.3）。

移動性が大きい工夫は、応用性が高い反面、使いこなすために労力を必要とし、記憶障害が重度になると利用が難しい。このため、自由度は低いが、利用が比較的容易な移動性が小さい工夫へと移っていったと考えられる。



(I) 文字を使う工夫、(II) 物をまとめる工夫、(III) 対応関係を示す工夫、(IV) 配置を利用した工夫、(V) 行為を他の形で置き換える工夫、(VI) 安全に対する工夫について、記憶障害の重症度別の傾向を見る。(VII) 帰属の意味を利用した工夫については、第 2 章で詳しく分析を行う。

(I) 文字を使う工夫は、軽度から重度までに見られ、重度になるに従って「様々な情報」を書くものから、「高齢者の名前」「物の名前」を書くものへと移っていた（図 1.4）。文

表 1.4 工夫で補われている記憶内容

	工夫	補われている記憶内容
① 携帯の 補助具	メモ、カレンダー、手帳 日記 小物をまとめて箱や袋に入れた 杖に紐をつけ、忘れないように手にかけて 持ち物を準備して、枕元に置いた ガスコンロを使っている時は、輪ゴムを手にかけて 必要な物は、いつも車椅子に乗せていた 持ち物に全部名前を書いた	- 今後のスケジュール、人の名前・連絡先等 - 以前の出来事（人の名前を含む） - 小物が置いてある場所 - 持ってきた杖を、持って帰ること - 今後の予定と、必要な物を持って行くこと - ガスを使用中であり、最後に消すこと - 必要な物を持って行くこと - 持ってきた物を、持って帰ること
② 可動 補助具	風呂の自動湯沸器に、操作方法を書いて貼った タンスの代わりに脱衣カゴを使った ストーブをヒーターにした 介護者が出かける時に、行き先を書いて貼った 電話に電話番号を書いて貼った 「着替えましょう」と貼り紙をした 1日の流れを書いて、壁に貼った 居室に名前や年齢の書いた誕生日カード等を飾った	- 風呂の自動湯沸器の操作方法 - 衣類などの場所 - 温熱機器を安全に取り扱う方法 - 介護者が出かけており、帰ってくること - 電話番号（電話の操作方法） - 朝食前に着替えること - 1日の流れ - 年齢や今の季節、以前の出来事
③ 固定 補助具	ガスを消し忘れるため、火災警報機をつけた ガラス戸にぶつからないように、色テープを貼った 物の置き場所を変えないようにしていた エアコンのリモコンを、エアコンに貼り付けた タンスの引き出しに中身を書いて貼った 食堂の席に名前を書いて貼った 居室の入口に名前を書いて貼った 夜間、便所の電気をつければなしにしておいた 便所のドアに目印を付けた 自動湯過式の風呂にした ポータブルトイレに「トイレ」と書いて貼った 汚れ物を入れる箱に「汚れ物入れ」と書いた 便所までの道すじのドアを開け放した 家具にぶつかるので壁面収納にした ドアを閉め忘れるので、ドアクローザーをつけた 掃き出しから落ちるのでテラスをつけた 便所の鍵を取り外した 便所にマットを敷き、スリッパを使わないようにした	- ガスを消すこと - ガラス戸の場所 - 物の置き場所 - エアコンのリモコンの場所 - タンスの引き出しの中身（収納場所） - 食堂の席の場所 - 居室の場所 - 便所の場所 - 便所の場所 - 風呂を沸かすこと、沸かす方法 - ポータブルトイレを使う方法（使いみち） - 箱を使う方法（使いみち） - 便所の場所、便所までの道すじ - 家具が出っ張っている場所 - ドアを開めること - 転落の危険性がある場所 - 便所の鍵の操作方法 - 便所のスリッパを使う方法（一般的な規則）

(2) 工夫が対応する行為・エラーの数

移動性が小さい工夫は、「ガスを消すこと」「便所の場所」のように、特定の行為・エラーに対応する記憶を補っていることが多かった。移動性が大きい工夫で、「今後のスケジュール、人の名前・連絡先等」「以前の出来事」のように、複数の領域にまたがる記憶内容をカバーするものが見られるのと逆である。

移動性が小さい工夫は、工夫を使用できる空間的・時間的文脈が限られるため、応用性に乏しいと考えられる。一方で、空間的・時間的分脈を、工夫が固定されている状況に依存できるため、使いこなすための労力を必要とせず、痴呆性高齢者にとって利用しやすい工夫であるとも言える。

(3) 潜在的な工夫 - 移動性が小さい工夫に関して

さらに、移動性が小さい工夫は”工夫”という形ではなく、ごく自然に記憶補助機能その場に埋め込んでしまうことが可能である。設備や居室配置等が持つ”潜在的な工夫”である。このような”潜在的な工夫”は、③固定補助具で対応している内容について聞き取りを重ねていく中で散見される。

「一番近い席」「水槽の隣の机」は食堂の席に名前を貼らなくても、席を識別するのを助けている。「角の部屋」「トイレの隣の部屋」「見える位置にある居室・便所」は同じく、工夫を加えなくても、居室や便所の場所をわかりやすくしている。有効なランドマークを持ち、目的が視覚的に確認できる構造が、場所に関する記憶を補っているのである。

「食堂の席の場所」に関する工夫と潜在的な工夫

工夫 食堂の席に名前を書いて貼った[施 4,施 6,施 29,施 14,施 30]

潜在的な工夫 下記 部

「食堂の席の場所」に関する工夫例以外の対応（記憶障害の重症度：中等度・重度）

在 3,在 4,施 7,施 26 - 特に席は決まっていない。間違えても問題にならない。

在 7,在 10,在 17 - 高齢者が食堂へ来ると、介護者が席へ誘導している。特に工夫はしていない。

施 12,施 19,施 25,施 28 - スタッフが食堂へ誘導している。

在 13,在 16,在 18 - 老人室から食堂へ来て、一番近い席が高齢者の席になっている。在宅であり食卓も小さく、席を覚えている。

施 20 - 居室から食堂へ来て、一番近い机であり、席を覚えている。

施 2 - 大きな水槽の隣の机であり、席を覚えている。

施 22 - 同じ部屋の高齢者と一緒に来て、同じ机にそのまま座る

施 27,施 31 - 特になし

「居室の場所」に関する工夫と潜在的な工夫

工夫 居室の入口に名前を書いて貼った[施 2,施 4,施 7,施 19,施 25,施 31]

潜在的な工夫 下記 部

「居室の場所」に関する工夫例以外の対応（記憶障害の重症度：中等度・重度）

在 3,在 4,在 13 - 長年住んでいる家であり、自分の部屋は覚えている

在 7,在 10,在 17 - 自分の部屋は覚えている。他の部屋へ入ることもあるが問題にならない。

在 16,在 18 - 家の中を歩き回っているが、特に工夫はしていない

施 6 - 角の部屋であり、場所を覚えている

施 20 - 角から2番目の部屋であり、場所を覚えている。

施 14 - 併設病院へ行ったり、スタッフステーションへ行ったりするが、道を教えてもらいながら居室へ帰ることができる。トイレの隣の部屋であり、トイレが見えると居室の場所がわかる。

施 30 - 食堂から部屋が見えており、場所を覚えている

施 12,施 28 - スタッフが居室へ誘導している。

施 22 - 同じ居室の高齢者と一緒部屋へ帰る

施 26,施 27 - 施設の中を歩き回っているが、特に工夫はしていない。

施 29 - 食堂ですぐすことが多い。特に工夫はしていない

「便所の場所」に関する工夫と潜在的な工夫

工夫 夜間、便所の電気をつけっぱなしにしておいた[在 7,在 13,在 16]

便所までの道すじのドアを開け放した[在 16]

便所のドアに目印をつけた[在 7,施 2]

潜在的な工夫 下記 部

「便所の場所」に関する工夫例以外の対応（記憶障害の重症度：中等度・重度）

在 3,在 10,在 17,在 18,施 22,施 31 - 便所の場所を覚えている

在 4,施 25 - オムツを使用しており、便所へ行くことはない

施 4,施 27 - 日中はスタッフが便所へ誘導している。他の場所で失禁することがあり、便所に貼紙をしたが、居室入口から便所が見えない位置にあったため、効果がなかった。

施 26 - 日中はスタッフが便所へ誘導している。他の場所で失禁することがあるが、特に工夫はしていない。

施 6,施 14,施 20 - 居室を出ると便所が見え、便所へ行くことができる

施 29 - 日中は食堂ですごしていることが多く、食堂から見える向かいの便所へ行ける。夜間はオムツを使用している。

施 7,施 12,施 19,施 28,施 30 - 日中はスタッフが便所へ誘導している。夜間はオムツを使用している。

また、在宅と施設では、居住空間の規模や居住期間が異なっている。家庭の「小さな食卓」は、それだけで席を識別するのに助けている。「長年住んでいる家」で部屋の場所がわかりやすいのももちろんである。痴呆性高齢者で、長年の生活習慣によって体にしみついた記憶（手続き記憶）は残りやすいとされている。これまでの行為パターンで対応できる家庭的なしつらえは、痴呆性高齢者が残った記憶を活用するのに役立つと考える。

「器具に付着した操作パネル」は操作パネルの紛失を防ぎ、「見える位置にある物」は物の場所をわかりやすくするだけでなく、物に気付きやすくし、使用を促している。「くもりガラスや線の入ったガラス等」はガラス戸への注意を促しており、「ガスコンロの自動消火装置」「外側からも外せる鍵」は一般的になった安全装置である。「他の場所と同じ床」はスリッパの履き替えを省略している。

「リモコンの場所」に関する工夫と潜在的工夫

工夫 エアコンのリモコンをエアコンに貼り付けた[在 8]

潜在的な工夫 下記 部

「リモコンの場所」に関する工夫例以外の対応（記憶障害の重症度：軽度）

在 6 - ストープを使っておりスイッチはストープに付いている。テレビはチャンネルがテレビに付いている旧式のものである。

在 9 - 高齢者がテレビやエアコンを操作することはない

在 12 - ヒーターはスイッチがヒーターに付いている。テレビは不明。

施 1, 3, 5, 8, 9, 10, 11, 15, 21, 23, 24 - 高齢者がテレビやエアコンを操作することはない。

「物の置き場所」に関する工夫と潜在的工夫

工夫 物の置き場所を変えないようにしていた[在 8,在 9,施 3,施 23]

潜在的な工夫 下記 部

「物の置き場所」に関する工夫例以外の対応（記憶障害の重症度：軽度）

在 6,在 12,施 1,施 9,施 10,施 23 - 小物をまとめて箱や袋に入れた

施 11,施 15 - 必要な物はベッドの上に乗せていた。結果的に、必要な物が目に見える位置にあった全ての事例で、介護者は掃除等以外で、高齢者の物を勝手に触らないようにしていた。

「ガラス戸の場所」に関する工夫と潜在的工夫

工夫 ガラス戸にぶつからないように、色テープを貼った[在 6]

潜在的な工夫 下記 部

「ガラス戸の場所」に関する工夫例以外の対応（記憶障害の重症度：軽度）

在 8, 9, 12 - サッシは下半分がくもりガラスになっている。他はふすま・ドアで特に問題はない

施 1, 3, 5, 8, 9, 10, 11, 15, 21, 23, 24 - 老人保健施設出入口がガラス戸であるが、最初から線が入っている。浴室もガラスは上半分だけである。他はふすま・ドアで特に問題はない。

「ガスを消すこと」に関する工夫と潜在的工夫

工夫 ガスを消し忘れるため、火災警報機をつけた[在 6]

潜在的な工夫 下記 部

「ガスを消すこと」に関する工夫例以外の対応（記憶障害の重症度：軽度）

在 8 - 鍋をこがしたことはあるが、コンロが最初から自動消火装置付であったため問題にならなかった。また、家には火災警報機が最初から付いている

在 9 - 高齢者が調理をすることはない

在 12 - ガスコンロを使っている時は、輪ゴムを手にかけた

施 1, 3, 5, 8, 9, 10, 11, 15, 21, 23, 24 - ガスコンロは自動消火装置付であり、普段は元栓を閉めている。

別室の机に埋め込んである形で、スタッフと一緒に使うことはない。また、老人保健施設にはスプリンクラーが付いている。

「便所の鍵の操作方法」に関する工夫と潜在的工夫

工夫 便所の鍵をかけて開けられなくなるので、鍵を取り外した[在 1]

潜在的な工夫 下記 部

「便所の鍵の操作方法」に関する工夫例以外の対応（記憶障害の重症度：最重度）

在 11,施 18,施 36 - もともと外側からも開けられる鍵である

在 5 - 今のところ、特に問題ない。工夫はしていない

施 17,施 33,施 35 - スタッフが便所へ誘導している

在 2,在 14,在 15,施 16,施 32,施 34 - オムツ等を使用しており、高齢者が便所へ行くことはない

「便所のスリッパを使う方法」に関する工夫と潜在的工夫

工夫 便所のスリッパのまま歩き回るので、マットを敷きスリッパを使わないようにした[在 5]

潜在的な工夫 下記 部

「便所のスリッパを使う方法」に関する工夫例以外の対応（記憶障害の重症度：最重度）

在 1, 在 11, 在 14, 施 17, 施 18, 施 33, 施 35, 施 36 - 便所の床は他の場所と同じであり、もともと便所専用スリッパは利用していない

在 2, 在 15, 施 16, 施 32, 施 34 - オムツ等を使用しており、高齢者が便所へ行くことはない

※工夫例以外の対応が見られなかった7つの工夫は、省略した。

以上のような「潜在的な工夫」は、痴呆性高齢者に補助具を使用するための労力や違和感を感じさせることなく、その状況に応じた記憶を補っていると考えられる。

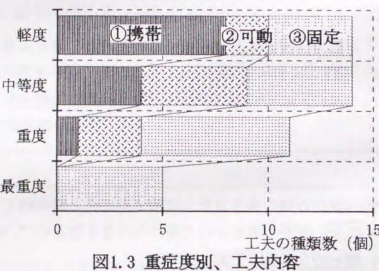
1.5. 記憶障害の重症度別の傾向 - 記憶補助機能を高める手法

記憶障害の全ての段階（軽度から最重度）で、それぞれ工夫が行われ、物忘れを補うのに役立っていた。記憶障害の全ての段階で、記憶補助機能を高める可能性があることがわかる。記憶障害の重症度別の傾向をまとめ、記憶補助機能を高める手法について考察する。

(1) 記憶障害の重症度別の傾向

記憶障害の重症度によって、工夫内容は異なり、軽度から最重度になるに従って、工夫の移動性が大きいもの（①携帯の補助具）から小さいもの（③固定補助具）へ移っていく傾向が見られた（図 1.3）。

移動性が大きい工夫は、応用性が高い反面、使いこなすために労力を必要し、記憶障害が重度になると利用が難しい。このため、自由度は低いが、利用が比較的容易な移動性が小さい工夫へと移っていったと考えられる。



(I) 文字を使う工夫、(II) 物をまとめる工夫、(III) 対応関係を示す工夫、(IV) 配置を利用した工夫、(V) 行為を他の形で置き換える工夫、(VI) 安全に対する工夫について、記憶障害の重症度別の傾向を見る。(VII) 帰属的意味を利用した工夫については、第2章で詳しく分析を行う。

(I) 文字を使う工夫は、軽度から重度までに見られ、重度になるに従って「様々な情報」を書くものから、「高齢者の名前」「物の名前」を書くものへと移っていた（図 1.4）。文

字によって補われる記憶内容が、徐々に狭くなっていくことがわかる。「高齢者の名前」「物の名前」は日常的によく使われる単語であり、比較的保たれやすいと考えられる。

(II) 物をまとめる工夫は、軽度から中等度までに見られ、「同じ種類の物をまとめる」「収納家具の中身がわかるようにする」が行われていた（図 1.5）。

「収納家具の中身がわかるようにする」ものは、「同じ種類の物をまとめる」の応用型である。物をまとめる工夫は、多数の物をいくつかに分類することで記憶への負担を少なくするものである。しかし、分類した項目や結果は覚えていなければならず、重度になると利用が難しいと考えられる。

同様の起序を持つ潜在的な工夫として「器具に付着した操作パネル」があげられる。物をまとめる工夫は、工夫の移動性が小さい場合、記憶補助機能を設備等にあらかじめ備えておくことが可能であると考える。

(III) 対応関係を示す工夫は、中等度から重度までに見られ、「目的地を特徴づける」「目的地が見えるようにする」が行われていた。前者よりも後者の方がより重度に対応していた（図 1.6）。「目的地を特徴づける」は、記憶を必要とするものを選択肢の一つを際立たせ、識別を助けている。「目的地が見えるようにする」は、選択肢が見える形で提示することで、思い出す作業を確認する作業へ変えている。記憶障害が重度になっても利用できる工夫であることがわかる。

図 1.4 文字を使った工夫

記憶障害の重症度	①携帯の補助具	②可動補助具	③固定補助具
軽度	・メモ ・日記 ・カレンダー ・手帳	・風扇の自動感温器に、操作方法を書いて貼った	
中等度	・メモ	・介護者が性別わかる時に、行き先を書いて貼った ・電話に電話番号を書いて貼った ・着替えることを忘れるため、「着替えましょう」と貼り紙をした ・1日の流れを書いて、壁に貼った	
重度	・持ち物に全部名前を書いた	・1日の流れを書いて壁に貼った	・食堂の席に名前を書いて貼った ・居室の入口に名前を書いて貼った
最重度	・持ち物に全部名前を書いた		・高齢者の名前を書く ・ポータブルトイレに「トイレ」と書いて貼った ・汚れ物を入れる箱に「汚れ物入れ」と書いた

図 1.5 物をまとめる工夫

記憶障害の重症度	①携帯の補助具	②可動補助具	③固定補助具
軽度	収納家具の中身が分かるようにする	・タンスの代わりに脱衣かごを使った	
中等度	・小物をまとめて箱や袋に入れた	・同じ種類の物をまとめる	・エアロンのリモコンを、エアロンに貼り付けた ・タンスの引き出しに中身を書いて貼った
重度			
最重度			

図 1.6 対応関係を示す工夫

記憶障害の重症度	①携帯の補助具	②可動補助具	③固定補助具
軽度			
中等度		目的地を特徴づける	・食堂の席に名前を書いて貼った ・居室の入口に名前を書いて貼った
重度			・夜間、便所の電気をつけっぱなしにしておいた ・便所に行くのに迷うため、便所までの道すじのドアを開け放した
最重度			目的地が見えるようにする

工夫の移動性が小さいため、多くの潜在的工夫が見られる。「一番近い席」「角の部屋」「トイレの隣の部屋」などは、目的地を特徴づけることにあたり、「見える位置にある居室・便所」などは目的地が見える形にすることに当たる。これらは、記憶補助機能をあらかじめ居室配置などに埋め込んだものであり、(VI) 配置を利用した工夫へつながるものである。

(IV) 配置を利用した工夫は、「目立つ位置に置く」ものと「置き場所を変えない」ものが行われていた(図 1.7)。これらは小物・家具に対する工夫であるが、(III) 対応関係を示す潜在的な工夫と共通する部分がある。居室配置などに配慮して、目的地を特徴づけたら、目的地が見える形にすることは、「目立つ位置に置く」ことに相当する。目立つ位置に置くことで、高齢者の行為を思い出させ、利用を促していると考えられる。

さらに、潜在的な工夫である「長年住んでいる家」は、場所の配置を変えないことに相

当する。場所の配置を変えないことで、痴呆性高齢者が残った記憶を活用することを助けていると考えられる。

これらの潜在的工夫と合わせて考えると、配置を利用した工夫は、軽度から重度までに対応している。記憶障害が重度になっても利用できる工夫であると考えられる。

(V) 行為を他の形で置き換える工夫は、軽度から最重度までに見られ、重度になるに従って「手がかりを動作に組み込む」「行為を一連の動作に組み込む」ものから、「介護者が代行できるようにする」もの、「設備等で代行する」へ移っていた(図 1.8)。前二者は移動性が高く自由度が高い反面、使いこなすために労力が必要であるため、記憶障害が重度になると利用が難しくなったと考えられる。設備等の補助機能を組み合わせることで、より重度に対応する工夫が可能であると考えられる。

図 1.7 配置を利用した工夫

記憶障害の重症度	①携帯の補助具	②可動補助具	③固定補助具
軽度	持ち物を準備して、枕元に置いた 目立つ位置に置く		物の置き場所を変えないようにしていた 置き場所を変えない
中等度			
重度			
最重度			

図 1.8 行為を他の形で置き換える工夫

記憶障害の重症度	①携帯の補助具	②可動補助具	③固定補助具
軽度	・ガスコンロを使っている時は、輪ゴムを手にかけた ・杖に紐をつけ、忘れぬように手にかけた	手がかりを動作に組み込む	
中等度	・コップなどの必要な物も、いつも車いすに乗せていた ・持ち物に全部名前を書いた	行為を一連の動作に組み込む 介護者が代行できるようにする	
重度	・持ち物に全部名前を書いた		
最重度		設備等で代行する	・ドアを閉め忘れるので、ドアクローサーをつけた ・便所のスリッパのまま歩き回るため、マットを敷き、スリッパを使わせないにした

(VI)安全に対する工夫は、軽度から最重度で見られ、「事故発生を知らせる」もの、「注意を促す」もの、「間違っても事故につながらないように準備する」もの、「危険物を取り除く」ものが見られた(図1.9)。工夫は、軽度から最重度までに対応しており、全ての段階で可能であることがわかる。

工夫の移動性が小さく、潜在的な工夫が見られる。「くもりガラスや線の入ったガラス」はガラス戸を目立たせて注意を促しており、「ガスコンロの自動消火装置」「外側からも外せる鍵」は間違っても事故につながらないようにしていると考えられる。

図1.9 安全に対する工夫

記憶障害の重症度	①携帯補助具	②可動補助具	③固定補助具
軽度		事故発生を知らせる 注意を促す	・ガスを消し忘れるため、火災警報機をつけた ・ガラス戸にぶつからないように、色テープを貼った
中等度		・ストーブをヒーターにした	
重度		・ストーブをヒーターにした	・自動燃過式の風呂にした
最重度	間違っても、事故につながらないように準備する		・掃き出しから落ちるのでガラスをつけた ・家具にぶつかるので壁面収納にした ・便所の鍵を開けられなくなるので、鍵を取り外した

工夫の実施者は重度になるに従って、高齢者から介護者へ移っていた(図1.10)。特に、中等度が高齢者から介護者へ移行する移行期にあたり、工夫実施を周囲が援助するようになっていくことがわかる。

記憶障害が軽い間は、工夫の考案・利用が高齢者にまかされているわけだが、本来、居住環境は、早い段階から進行に備えた配慮を行い、その後、使い続けていくことが望ましい。このことから、軽度を含め、全ての段階において、工夫実施を援助していく可能性が考えられる。

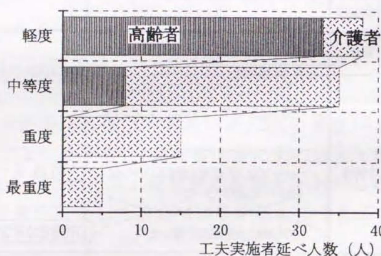


図1.10 重症度別、工夫の実施者

(2)記憶補助機能を高める手法

記憶障害の重症度別に、記憶補助機能を高める手法をまとめると図1.11の通りである。

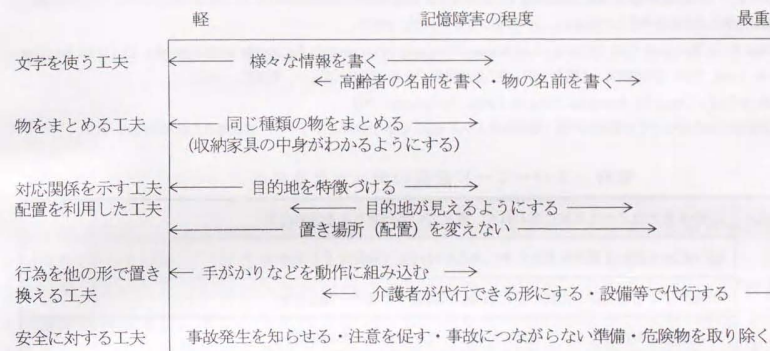


図1.11 記憶補助機能を高める手法

記憶障害が軽度であれば、移動性の高い工夫を多様な行為・エラーに対応して準備することができる。メモ、日記、手帳等の比較的複雑な補助具については、ホワイトボードやカレンダーを活用するなど、移動性を少し落として、周囲の手助けが得られるような配慮が必要である。

記憶障害が進むと、個々の行為・エラーに対応して移動性の低い工夫を選択すると共に、痴呆性高齢者の負担を少なくする配慮が必要である。手がかりは間接的なもの(例:特徴づけ)よりも、直接的なもの(例:見えるようにする)の方が良く、見えるようにする工夫は、痴呆性高齢者の注意を引き、使用を促すためにも効果的であると考えられる。

さらに記憶障害が進んだ場合、物をまとめる工夫をそれだけで活用することは難しくなり、文字を使った工夫にも高齢者や物の名前だけにする配慮が必要になる。置き場所を変えないことは、記憶障害が重度になっても有効であり、一連の動作の中で、記憶に負担をかける部分を設備等で代行することができる。

記憶障害の全ての段階において、安全対策は重要である。工夫の移動性が低いため、設備や居室配置などに安全に配慮した機能を埋め込んでおくべきであると考えられる。

文献

- 文1)Norman D.A. The psychology of everyday things, Basic Book Inc., New York, 1988 (野島久雄訳:誰のためのデザイン?, 新曜社, 1993)
- 文2)Wilson B.A.: Rehabilitation of memory, The Guilford Press, New York, 1987 (江藤文夫訳:記憶のリハビリテーション, 医歯薬出版, 1995)
- 文3)Wilson B.A. & Moffat N Clinical management of memory problems, Chapman & Hall, London, 1992 (綿森淑子訳:記憶

障害患者のリハビリテーション、医学書院、1997)

文4) Mace N.L. & Rabin P.V.: The 36-hour day, The John Hopkins University Press, 1991 (中野英子訳: ぼけが起こったら、サイマル出版会、1992)

文5) Olson R.V., Ehrenkrantz E. and Hutching B.: Homes that help, New Jersey Institute of Technology, 1993 (柴田博・溝端光雄訳: 痴呆性老人のためのやさしい住まい、ワールドプランニング、1997)

文6) Cohen U. & Weisman G.D.: Holding on to home - designing environments for people with dementia, The John Hopkins University Press, 1991 (岡田威雄・西崎裕子訳: 老人性痴呆症のための環境デザイン、朝国社、1995)

文7) Calkins M.P.: Design for dementia, National Health Publishing, 1988

文8) 東京都老人総合研究所生活環境部門編: 痴呆性老人ケア施設的设计計画ガイドライン、東京都老人総合研究所、1999

資料 リバーミート®記憶のチェックリスト

A. 物忘れ	(1) 昨日または2~3日前に言われて、覚えているべきことを忘れたか	
	(2) なにかを置いた場所を忘れたか、あるいは付近で物をなくしたか	
	(3) 物がいつもある所を忘れたか、あるいは間違った場所を搜したか	
	(4) あることが起きたとき、例えば昨日だったか先週だったかを忘れたか	
	(5) 持ってきたものを忘れたか、あるいは物を置き忘れてとりに戻らなくてはならなかったか	
	(6) しようとしていると言ったことをやり忘れたか	
	(7) 前日に行ったことの要点を忘れたか	
	(8) 日常的な手順の要点を忘れたか	
	(9) 日常的な手順の変更を忘れたか	
	(10) 以前に会ったことのある人の名を忘れたか	
B. 会話において	(1) 重要でないか、または無関係な出来事についてとりとめのない話をしたか	
	(2) "舌の先まで" 出ている、知ってはいるが完全には思い出せない言葉があったか	
	(3) 誰かの言ったことの要点を取り違えたか	
	(4) 以前にも話したことのある物語や冗談を話したか	
	(5) 既に言ったことを忘れ、おそらく今言ったばかりのことを繰り返したり、あるいは"自分は 何について話をしていたのか?" と言ったことがあるか	
C. 動作	(1) 新しい技術を覚えることが困難である、例えばゲームをしたり、新製品の扱いを覚えること	
	(2) しようとしていたことをやり終えたか否かを確かめる	
	(3) 旅行中、あるいは以前に行ったことのある建物の中で迷子になる	
	(4) はじめにやりかけていたことを、ほかの何かに気をそらされて忘れる	
該当する項目数		

該当する項目数 0~4項目: 軽度、5~9項目: 中等度、10~14項目: 重度、15項目以上: 最重度とした。

第2章 想起された出来事の文脈と手がかり使用の傾向

2.1. 目的

痴呆性高齢者で問題となりやすい最近の出来事に関するエピソード記憶を取り上げ、想起の手がかりとしての居住環境を検討する。

2.2. 調査概要

(1) 調査方法

痴呆性高齢者と、老人保健施設の居室において自由会話を行った。老人保健施設の居室で調査を行った理由は、調査場面の条件をおおよそ統一するためである。本研究は、自由会話で手がかりとして利用された周囲の家具や小物などを分析の対象としている。調査場面の条件が異なると、手がかりの使用傾向などが異なる可能性があり、今回は構造上一定の条件を持つ老人保健施設の居室とした。在宅とは場面の条件が異なっており、在宅高齢者については今後調査が必要である。

老人保健施設の居室は全て4人部屋で、ベッド、床頭台、タンスがあらかじめ用意されている。それ以外に家具を持ち込んでいるものは少なく、床頭台、タンスに私物を入れている。ベッド周りの飾り付けは豊かであり、写真、ぬいぐるみ、高齢者が作った手芸作品などが置かれていることが多い(写真2.1)。バルコニーを通して田園風景が見えていた。季節は秋であった。

調査は午後の施設プログラムがない時間帯に行った。会話は「少しお話をさせてくださいよろしいですか」というように始め、対象者が自発的に話を展開していくように促した。調査時間はそれぞれ個別に2~4時間であった。時間にばらつきがあるのは、一定の区切りがつくまで会話を続けたためである。

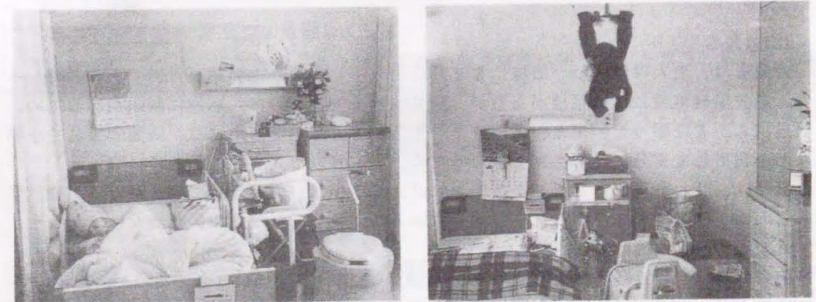


写真 2.1 調査場面 老人保健施設の居室(例)

研究者は老人保健施設のスタッフ（理学療法士）であり、対象者と面識がある。自由会話からデータを収集するにあたって、面接者や面接行為自体が対象者にとって非日常的なものであると、データが実態からかけ離れたものになってしまう危険性がある。この点で、研究者はこれまでから対象者と日常生活場面で会話を繰り返しており、おおよそ日常的な会話場面が設定できたと考える。一方、施設スタッフである研究者の立場が、自由な会話展開を妨げ、データに影響することが考えられる。しかし、実際に自由会話は施設プログラムに限らず、様々に展開されており、会話をデータとして用いることに支障はないと判断した。研究者は直接ケアに携わる介護職員ではなく、対象者の受け止め方は比較のおおらかなものであったと考える。また、面接にあたって、対象者の既知感が薄く、対象者の対応に合わせて初対面のように接することもあった。

会話は、対象者及び家族・介護職員の了承を得て、テープに録音した。対象者が利用した手がかりは、その都度メモした。手がかりは、写真や装飾品など、形があるものだけでなく、天候や匂いを含め、面接者も五感で感じることができたものとした。手がかりの利用は、対象者の行動や視線の動き、話題の展開・文脈上のつながりなどから総合的に判断した。手がかりや話の内容がわかりにくい場合は、話の展開を妨げない程度に、同じ話を繰り返し、対象者から確認した。

調査終了後、テープから過去から現在に至る出来事に関する事柄を書き出し、利用した手がかりと合わせた。テープには対象者に特定の言い回しや迂遠表現、意味のある沈黙、話題の変更・戻りなどが含まれるため、これらを意識して書き出した。会話からデータを収集する調査・研究では、データの精度を上げるため、テープから書き出した事柄を対象者に読んでもらい、内容を確認したり、コメントを付け加えてもらう作業が行われることがある。しかし、本研究では痴呆性高齢者を対象としているため、対象者自身に確認を取ることが困難であった。このため、書き出した事柄が実態とかけ離れたものにならないよう、データに研究者が判断した理由などを記述し、さらに、これまでに研究者が対象者と日常生活場面において会話を繰り返してきた記録とつき合わせて注意書きを書き加えた。

想起内容は、老人保健施設の介護職員・ケースワーカーと共に、実際の出来事と照合した。不明な点は、一部、家族に問い合わせた。

(2) 対象者

対象者は、老人保健施設一般棟に2ヶ月以上入所しており、会話が可能である者であった。老人保健施設には痴呆棟があるが、痴呆棟は小物などの持ち込みに制限があるため、一般棟入所者に限った。また、入所直後で生活が落ち着かない中では、周囲の家具や小物などを利用して十分に話を展開できないため、2ヶ月以上入所している者に限った。

会話は、話しかけに応じることができれば良く、つじつまが合っているかどうかや、同じ話の繰り返しは問わなかった。会話を嫌がらない者を選んだため、全員女性であった。

対象者の基本属性は表 2.1 の通りである。

痴呆の疑い9名、軽度痴呆13名、中等度痴呆15名、重度痴呆3名であった。記憶障害は軽度14名、中等度11名、重度10名、最重度5名であった。記憶障害はリバーミード記憶のチェックリストを用いて評価した（第1章 資料参照）。

屋内の移動は8名が車椅子を使用しており、5名に何らかの介助が必要であった。

表 2.1 対象者基本属性

	年齢	入所期間	痴呆重症度*1	記憶障害の重症度*2	屋内の移動方法		年齢	入所期間	痴呆重症度*1	記憶障害の重症度*2	屋内の移動方法
1	86歳	2ヶ月	痴呆の疑い	2項目、軽度	車椅子介助	21	88歳	5ヶ月	中等度痴呆	7項目、中等度	歩行介助
2	84歳	3ヶ月	軽度痴呆	3項目、軽度	歩行自立	22	71歳	2ヶ月	中等度痴呆	8項目、中等度	歩行自立
3	72歳	2ヶ月	軽度痴呆	4項目、軽度	歩行介助	23	75歳	3ヶ月	中等度痴呆	8項目、中等度	車椅子介助
4	69歳	8ヶ月	軽度痴呆	4項目、軽度	歩行介助	24	80歳	11ヶ月	軽度痴呆	5項目、中等度	車椅子自立
5	74歳	11ヶ月	痴呆の疑い	2項目、軽度	歩行自立	25	72歳	7ヶ月	軽度痴呆	5項目、中等度	歩行自立
6	85歳	2ヶ月	痴呆の疑い	2項目、軽度	車椅子自立	26	82歳	9ヶ月	重度痴呆	11項目、重度	歩行自立
7	83歳	4ヶ月	痴呆の疑い	2項目、軽度	歩行自立	27	80歳	4ヶ月	中等度痴呆	11項目、重度	車椅子自立
8	88歳	3ヶ月	痴呆の疑い	2項目、軽度	歩行自立	28	79歳	8ヶ月	中等度痴呆	11項目、重度	歩行介助
9	82歳	2ヶ月	痴呆の疑い	2項目、軽度	歩行自立	29	84歳	10ヶ月	中等度痴呆	12項目、重度	歩行自立
10	77歳	8ヶ月	痴呆の疑い	3項目、軽度	歩行自立	30	83歳	3ヶ月	中等度痴呆	12項目、重度	歩行自立
11	82歳	6ヶ月	痴呆の疑い	4項目、軽度	歩行自立	31	87歳	4ヶ月	中等度痴呆	10項目、重度	車椅子自立
12	88歳	9ヶ月	軽度痴呆	2項目、軽度	歩行自立	32	81歳	2ヶ月	中等度痴呆	14項目、重度	歩行自立
13	88歳	6ヶ月	軽度痴呆	4項目、軽度	歩行自立	33	85歳	2ヶ月	中等度痴呆	11項目、重度	歩行自立
14	69歳	8ヶ月	痴呆の疑い	3項目、軽度	車椅子自立	34	85歳	2ヶ月	中等度痴呆	12項目、重度	歩行自立
15	82歳	5ヶ月	軽度痴呆	5項目、中等度	歩行自立	35	82歳	3ヶ月	中等度痴呆	13項目、重度	歩行自立
16	81歳	4ヶ月	軽度痴呆	5項目、中等度	歩行自立	36	91歳	5ヶ月	重度痴呆	17項目、最重度	歩行自立
17	83歳	9ヶ月	軽度痴呆	8項目、中等度	歩行自立	37	92歳	2ヶ月	重度痴呆	17項目、最重度	歩行自立
18	80歳	7ヶ月	軽度痴呆	5項目、中等度	歩行自立	38	80歳	3ヶ月	中等度痴呆	15項目、最重度	歩行自立
19	73歳	10ヶ月	軽度痴呆	6項目、中等度	車椅子自立	39	76歳	2ヶ月	中等度痴呆	15項目、最重度	歩行自立
20	82歳	2ヶ月	軽度痴呆	5項目、中等度	歩行介助	40	84歳	2ヶ月	中等度痴呆	17項目、最重度	歩行自立

*1 CDR で評価、*2 リバーミード記憶のチェックリストで評価

(3) 分析方法

手がかりを下記の10項目に分類した。

手がかりは、ベッドに座っているという状況から「自分は病人だ」と言う、周囲にあまり物が無いという状況から「泥棒に入られた」と言うなど、現在の状況が手がかりになっていることがある。この時は、前者のように高齢者自身の状況をさしている場合を⑥高齢者、後者のように周囲の状況をさしている場合を④家具とした。

- | | |
|-----------|-----------|
| ①写真 | ⑥高齢者自身 |
| ②装飾品 | ⑦面接者 |
| ③生活用品 | ⑧職員や他的高齢者 |
| ④家具 | ⑨音・匂い |
| ⑤景色・天候・季節 | ⑩その他 |

想起内容を下記の10項目に分類した。

- | | |
|----------|------------|
| ①生い立ち | ⑥施設のプロダグラム |
| ②家族 | ⑦最近の天候 |
| ③昔の職業 | ⑧職員や他の高齢者 |
| ④病気 | ⑨習慣や好み |
| ⑤施設入所の経緯 | ⑩その他 |

手がかりと想起内容の関係は、手がかりから話が始まるとは限らず、話の途中で手がかりを使って話を広げていくといった形が良く見られた。また、1つの手がかりから、話は幾重にも展開されていた。このため、会話の中の時間的な前後関係・時点の一致ではなく、文脈上のつながりから、手がかりと想起内容の関係を捉えた(例2.1)。

例2.1 手がかりと想起内容の捉え方

「昔、歌が好きでよくラジオを聞いていたが、ここにはラジオがない」という話をしており、家族がこの前、面会に来た(…がラジオを持ってこなかった)話になった。
 床頭台の上にあったぬいぐるみを見せて、孫が持ってきたと話し、床頭台の引き出しに入っていた写真を取りだした。写真は、老人保健施設の行事時に、家族と一緒に撮ったもので、写真を見せて家族の紹介をした。その後、話は行事時にもらったカードに移った。

- (下線部 _____) 「ぬいぐるみ」と「孫が持ってきた」話に対応していると考え
 手がかり「装飾品」→ 想起内容「家族」である
- (下線部) 「写真」と「家族の紹介」に対応していると考え
 手がかり「写真」→ 想起内容「家族」である

想起内容は、少なからず現実とは異なった事柄を含んでいた。このような間違いを、下記の4点から捉えた。

- | |
|-------------------------------|
| ①欠損：出来事内容の一部が、思いだそうとしても思い出せない |
| ②修正：話の一部が事実と異なる |
| ③短縮：昔の出来事を、現在や最近のように話す |
| ④合成：複数の異なった時点の出来事を、区別せずに混ぜて話す |

①と②は出来事内容の間違いであり、③と④は時間軸上の位置づけの間違いである。
 既往研究において、記憶障害による想起の間違いは、出来事内容の不正確さと、時間軸上の位置づけの不明瞭さを含んでおり、両者が関係して生じていることが報告されている^(x1,2)。また、想起の間違いは、記憶が保たれている部分(昔の記憶)と失われた部分(最近の記憶)の境界で起こりやすく、失われた部分の文脈を補うために出来事相互の関連性に変化することが報告されている^(x3)。

このことから、①～④の複合関係、出来事相互の関連性や現在へのつながりを含めて、間違いの起こり方を分析した。

最後に記憶障害の重症度別の傾向をまとめ、出来事を想起させる環境について考察した。

2.3. 手がかりと想起内容

利用された手がかりは表2.2のとおりである。「装飾品」「景色・天候・季節」「高齢者自身」「職員や他の高齢者」などが多く利用されていた。想起された内容は表2.3のとおりである。家族、病気、職員や他の高齢者などについて、話す者が多かった。

表2.2 利用された手がかり

	事例番号																
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1112131415	1617181920	2122232425	2627282930	3132333435	3637383940	
写真	x					x	x	x	x		x						
装飾品	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x		
生活用品	x					x	x	x	x	x	x	x	x	x	x		
家具						x											x
景色・天候・季節	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x		
高齢者自身	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
面接者						x	x										x
職員や他の高齢者	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
音・匂い						x											x
その他							x	x			x	x	x	x		x	x

xは該当する項目を示す

表2.3 想起内容

	事例番号															
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1112131415	1617181920	2122232425	2627282930	3132333435	3637383940
生い立ち	x	x				x					x	x	x	x	x	x
家族	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
昔の職業	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x		x
病気	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x		x
施設入所の経緯	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x		x
施設のプロダグラム	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x		x
最近の天候	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
職員や他の高齢者	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
習慣や好み	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
その他						x	x				x	x	x	x	x	x

xは該当する項目を示す

(1) 手がかり「写真」「装飾品」

写真は、家族の写真、遺影、施設行事の写真などを手がかりにして、「家族」「施設入所の経緯」「施設のプロダグラム」に関する事柄が話された。家族の話をしている時に、家族を詳しく紹介するために写真を使ったり、話が途切れた時に話題を提供するために、写真を使ったりする様子が見られた。写真は床頭台の上に飾られているものだけでなく、引き出しから意図的に持ち出して使われていた。

装飾品は、ぬいぐるみ、花、誕生日カード、高齢者自身が作った貼り紙・折り紙などを手がかりにして、「家族」「昔の職業」「病気」「施設入所の経緯」「施設のプログラム」「職員や他的高齢者」「習慣や好み」に関する事柄が話された。装飾品の多くは、ベッド周囲に飾ってあるため、自然に目に入って話題になっていた。装飾品をくれた人を紹介したり、作った時の状況を話したり、見た目感想を言ったりしていた。

一部を紹介する。

事例1： 手がかり「写真」「装飾品」 想起内容「家族」

「昔、歌が好きでよくラジオを聞いていたが、ここにはラジオがない」という話をしており、家族がこの前、面会に来た（…がラジオを持ってこなかった）話になった。

床頭台の上にあったぬいぐるみを見せて、孫が持ってきたと話し、床頭台の引き出しに入っていた写真を取り出した。写真は、老人保健施設の行事時に、家族と一緒に撮ったもので、写真を見せて家族の紹介をした。その後、話は行事時にもらったカードに移った。

事例16： 手がかり「写真」 想起内容「家族」

面接者が話を聞かせるように頼むと、自分の生年月日と住所を言い、家族構成を説明し始めた。最初は名前と続柄、職業などが言えていたが、途中で名前が出てこない人がいて、床頭台から色紙を取り出した。色紙には寄せ書きが書いてあり、写真が貼られていた。色紙は家族からのものようで、名前と写真を確認しながら、もう一度、家族構成を説明し始めた。

話は、夫が早く亡くなり、仕事をしながら子育てをしたことへ続いていった。

事例24： 手がかり「装飾品」 想起内容「家族」

外泊の時の話をしていた。外泊では家族が皆、集まって一緒に食事をしたと話し、ダンスの上を立ててあったカードを指さして、「あれは孫がくれた」と言い、孫の話を始めた。

話は、それぞれの家族の紹介へと続いた。

事例18： 手がかり「装飾品」 想起内容「施設のプログラム」

身障手帳の話をしている、手帳を探そうと床頭台の引き出しをあけたところ、施設のサークルで作った折り紙が出てきた。面接者がのぞき込むと、「嫌やと言うのに、誘われて…」とサークルに行っていた時の話を始めた。〇〇さんは上手だが、なかなか同じようにはできないとか、結局、先生に仕上げをしてもらったとか、この細かい所が難しいとか、いろいろな話が出てきた。

話は、以前いた病院で作ったカバンの話へと続いた。

事例17： 手がかり「装飾品」 想起内容「施設のプログラム」

ダンスの上に草花が飾ってあった。面接者が見ていることに気づいたようで、高齢者が職員と一緒に花をつみに行った話を始めた。話は花の種類に続き、花の種類に詳しい人がいる話へと移った。

(2) 手がかり「生活用品」

手提げ袋、時計、カレンダー、日記、メモ、薬、タオル、コップなどを手がかりにして、「生い立ち」「家族」「昔の職業」「病気」「施設入所の経緯」「施設のプログラム」「職員や他的高齢者」「習慣や好み」に関する事柄が話された。

時間を確認するために時計を見るなど、話の途中で生活用品を使ってそのまま話題になったり、病気の話をしている薬を取り出すなど、話を詳しく説明するために生活用品を使ったりする様子が見られた。生活用品を使うことで、話は広がり、時計を見て目が見えにくくなった話になったり、薬を取り出して飲むときに薬をこぼす話になったりしていた。話の内容は多岐にわたり、生活用品を手に入れた時の様子、購入した理由、使用方法や形状、使いやすさ、使っていた時の失敗談、以前に使っていた生活用品の説明、生活用品の好みなどであった。

一部を紹介する。

事例30： 手がかり「生活用品」 想起内容「家族」

「これ見て」と座っていた押し車を指さし、「これは〇〇さんがくれたの」（長男の名前）と家族の話を始めた。その後、押し車の使い心地や柄の話へと続き、「なくさないように名前が書いてある」と荷物入れの蓋の裏を見せたところで、「これは〇〇さんがくれたの」と最初に戻った。

その後、家族の話から「なくさないように名前が書いてある」までの話を、もう一度繰り返した。

事例6： 手がかり「生活用品」 想起内容「施設入所の経緯」

自宅で介護していた娘が入院し、自分は施設に入所した話をしてきた。バタバタして入所したため、当初、必要な物がなく、施設の物を借りていたと言い、スリッパを指さした。

入所当初、履き物がなく、施設で大きな靴を借りていたが大きすぎて、売店で皆と同じように上靴を買ったが、靴を履く習慣がなかったため、なんとなく気持ちが悪かった。その後、家族がスリッパを持ってきたが、すぐに脱げてしまうため、スタッフがゴムをつけてくれたと話した。

話は、一度スリッパを落としてきて探したことへと続いた。

事例2： 手がかり「生活用品」 想起内容「病気」

家族の話をしていたが、ふと床頭台の上にあった時計を見て、時間を確認した。その後、「時計の針が見えにくい」と言い、目がかすみやすくなった話をした。話は、若い頃は元気だった話に続いた。

事例4： 手がかり「生活用品」 想起内容「施設入所の経緯」

ベッド横に段ボール箱が積み上がっている状態で、荷物が増えていく話をし、以前一人暮らしだったが、一人暮らしが難しくなったため施設に入所した話をした。その後、病院や施設を転々とした話へと続き、病院の医者と家族が知り合っていたことから、家族の話へと移った。

事例14： 手がかり「生活用品」 想起内容「好み」

車椅子のブレーキが甘くなり、見てもらっているがなかなか直らない話をしていた。車椅子のブレーキを見せながら話をしていたが、ふと車椅子にかかっている手提げ袋を見て、「そうそう、これね…」と、他の高齢者が持っていた手提げ袋をほめたところ、その高齢者の家族が同じ物を作ってきてくれた話をした。

手提げ袋の柄や仕上げ方について、しばらく話は続き、「こんな物が作れるんだねえ」と、自分は不器用で学校の裁縫の時間にも苦労した話へと移った。

(3)手がかり「家具」

小物を入れているかご、タンス、ふとん、床頭台、ベッドなどを手がかりにして、「家族」「病気」「職員や他の高齢者」「習慣や好み」に関する事柄が話された。

家具は、高齢者が現在おかれている状況を説明するために使われることが多かった。ベッドに座っていることから、自分は病人であると話したり、周りにあまり物がないことから、泥棒に入られたと話したりしていた。

タンスの一部が壊れていたり、ふとんが外に干してあるというような、家具が通常と異なった状況にある場合は、その状況を手がかりにして話が始まることもあった。以前にタンスを直したことや、ふとんの綿を入れ直したことが話された。

一部を紹介する。

事例38： 手がかり「家具」 想起内容「家族」

面接者が尋ねたことには答えるが、あまり自分から話をしなかった。

面接者が何をしているのか尋ねたところ、居室内にベッドが並んでいるのを見て、「自分は管理人だ」と言った。自分は一人暮らしで、ここを管理するために、1年前に移り住んだと話した。

その後、居室にスタッフが入ってきたため、話はスタッフへと移った。

事例28： 手がかり「家具」 想起内容「家族」

「寒いから上着が欲しい」と言われ、面接者が上着を探そうとタンスを見たところ、タンスの取っ手が片方取れていた。高齢者も気づいたようで「直せばいいのになあ…」と言い、直す方法を説明し始めた。面接者が日曜大工の経験を尋ねると、「仕事ではないけれど、父親がそんなこともしていた」と話していた。

その後、高齢者は、直す方法を手真似して繰り返した。

事例32： 手がかり「家具」 想起内容「その他」

面接者が「いかがですか」と尋ねたところ、周りにあまり物がないという状況から、「泥棒に入られた」と話した（そのような事実はない）。「晩に根こそぎ持って行かれた」と繰り返した。

その話をしていた時に、同じ部屋の高齢者が廊下に出ていったため、「あいつが泥棒や」と言い始めた。

面接者が「大変ですね」と言ったところ、「みんな良くしてくれるので」と話が変わり、家族の話へと移っていった。

(4)手がかり「景色・天候・季節」

外の風景、天気、温度、明るさなどを手がかりにして、「生い立ち」「家族」「昔の職業」「病気」「施設入所の経緯」「施設のプログラム」「最近の天候」「職員や他の高齢者」「習慣や好み」に関する事柄が話された。

話が途切れた時に天気や季節の話になったり、生い立ちや昔の職業などを詳しく説明するために風景を使ったり、病気や施設入所の経緯などの時期を説明するために季節を使ったりする様子が見られた。景色・天候・季節は現況について感想を言ったとしても、その話だけに終わることは少なく、同じ様な景色・天候・季節の中で起こった出来事の話になったり、これらの移り変わりから高齢者自身や他の移り変わる出来事を回想したり将来を展望した話になっていた。

一部を紹介する。

事例3： 手がかり「天候」 想起内容「最近の天候」「病気」

施設のプログラムの話をしていたが、話がひとくぎりついたところで、天気の話 시작했다。

外は雨が降っており、「最近はや、寒い」という話をし、トイレが近くなった話へと移った。夜間、トイレへ行くのは大変であり、一度トイレで便座から落ちた話をした。

事例31： 手がかり「面接者」「天候」 想起内容「最近の天候」

面接者を近づいてきたのを見て「あんたどこ行って来たの」と言い、「みなさん元気？」などど何気ない話をしていた。ふと面接者の服装を見て「あんた寒いのに」と、天候の話になった。「また雨が降るかもしれないから、用意して出かけないと」と話していた。

事例19： 手がかり「天候」 想起内容「最近の天候」

「施設の行事が良い天気でもよかった」という話から、「今日はくもっている」「最近、ずっと天気が悪い」と話し出した。話は「天気が悪いと、どこへも行けない」「仕事にならない」と続いていた。

事例20： 手がかり「天候」 想起内容「病気」

「腰が痛い」と話していた。その日はくもりで、「こんな天気の日、よけいに痛い」と、腰痛が良くなったり、悪くなったりしている話を続けた。

話は、腰痛治療のために通っているリハビリで、よく出会う高齢者のことへと移っていた。

事例11： 手がかり「外の景色」 想起内容「生い立ち」

老人保健施設で行っている手芸サークルの話をしていた、「今度は編み物だ」と冬に向けた話になった。

外を見て、山が色づき始めた話から、以前山中に住んでおり、どこへ行くにも徒歩で毎日山道を歩いた話へと移った。

事例21： 手がかり「外の景色」 想起内容「生い立ち」

外を眺めて、稲刈りが終わった話をしていた。すると、生まれ育った家は裏一面がススキで、ススキを取りに行った話を始めた。ススキを何に使ったのかまでは思い出せなかったが、姉妹でススキを取りに行った時のことを詳しく話した。

事例15： 手がかり「季節」 想起内容「施設入所の経緯」

秋になったと話していると、ちょうどこのくらいの気候の時に施設へ入所したという話を始めた。冬に骨を折って病院に入院し、暖かくなったら家に帰ろうと思っていたら、施設に入ることになり、また冬になってしまうと、順序が行ったり戻ったりしながら話された。

最後は、「正月には家に帰りたい」という話であった。

(5) 手がかり「高齢者自身」

高齢者自身の服装、年齢、病気、施設に入所しているという状況などを手がかりにして、「生い立ち」「家族」「昔の職業」「病気」「施設入所の経緯」「施設のプログラム」「習慣や好み」に関する事柄が話された。

高齢者自身を説明するために服装や年齢を使ったり、あまり話が進まない時に高齢者自身のことを話題にして、話の枝葉を広げていく様子が見られた。高齢者自身の事柄を話題に出す時には、高齢者自身がそれについてどう思っているかが一緒に話されることが多く、同じような気持ちを持った出来事の話へ移っていた。

過去の出来事が詳しく話されるときは、「よく失敗するが、昔からそうよく怒られた」「力仕事をしていたので節くれた手になった」など、高齢者自身は過去と現在をつなげるために使われていた。

一部を紹介する。

事例10： 手がかり「高齢者自身」「写真」 想起内容「家族」「昔の職業」

あまり話が進まず、面接者がいろいろ尋ねてみても、「ぼけてるさかい、あきませんにや」と繰り返す。

話は「ぼけてるさかい、あきませんにや」から、少しずつ枝葉に分かれる形で「〇〇にもよく怒られる」と家族の名前が出たり、「ようお客さんにも迷惑かけて」と昔の職業の話が出たりしていた。家族の名前が出た時に、床頭台の上を立ててあった写真を見せて、「これが〇〇や。忘れんように名前が書いてある」と裏に書いてある名前を見せた。

事例37： 手がかり「高齢者自身」 想起内容「家族」

挨拶をし、面接者と天気や今日の昼食の話をしていた。

ベッドに一人で座っているという状況から、いきなり「みんな殺されてしまった」と言い出し、「お父さんも、お母さんも」殺されてしまったと話す。自分自身は病気で入院していたから助かったと言い、「お父さんも、お母さんも」殺されてしまったと繰り返す。

事例5： 手がかり「高齢者自身」 想起内容「昔の職業」

施設のプログラムで洗濯物たたみがあり、以前は参加していたが、疲れるのでやめた話をしていた。昔は家の商売と家事を一手に引き受けており、「ここに来てまで（洗濯物をたたまなくても）」と言っていた。そして、自分の手を見て、「力仕事をしていたので節くれた手になった」と話した。

その後、話は、父親が厳しい人でよく叱られた話に移った。

事例39： 手がかり「高齢者自身」 想起内容「昔の職業」

話はあまり続かず、とぎれとぎれであった。

面接者が何をしているのかと尋ねたため、エプロンをしているという状況から「商売」をしていると話す。長年、夫と一緒に商売をしており（何の商売かは不明）、お金の苦労がたえないと話す。

事例23： 手がかり「高齢者自身」 想起内容「病気」

「本当にお世話になって」「バチがあたります」を繰り返していた。話はあまり発展しなかったが、「本当にお世話になって」に「私は役にたたんから…」と手がしびれて細かいことができなくなった話が入ったり、「こんなおばあさんになって…」と徐々に体が動きにくくなっていった話が出てきたりしていた。

事例25： 手がかり「高齢者自身」 想起内容「病気」

今日のおやつを話していると、「最近太ったと言われる」と言い始め、「顔が丸くなった」「おなかが出てきた」と気にしだした。話は、「以前、糖尿の気があると言われた」ことに続き、最近動きにくくなり、腰や膝が痛くなってきた話へと移っていった。

事例35： 手がかり「高齢者自身」 想起内容「好み」

面接者が挨拶をし「お話を聞きたいのですが…」と頼むと、「こんな格好で恥ずかしい」と言う。さらに、「こんな汚い格好で」と服装の話を続けた。「白いスラーッとした服」が好きだと話し、昔、モデルが着ていてあこがれていたと言った。

事例13： 手がかり「高齢者自身」 想起内容「その他」

額に青あざをつくっていた。話をはじめるとすぐに、転倒して顔をうった話をし、「恥ずかしいから閉じこもってる」と言った。

その後、顔を見て、家族に笑われた話をし、話は家族や施設に入所した経緯へと移った。

(6) 手がかり「面接者」「職員や他的高齢者」

面接者の服装、容貌、年齢、口調、面接をしているという状況などを手がかりにして、「家族」「病気」「施設入所の経緯」「施設のプログラム」「職員や他的高齢者」「習慣や好み」に関する事柄が話された。

会話の導入時に面接者の服装や面接をしているという状況を話題にしたり、他の誰かを詳しく説明するために面接者の体格や年齢を使ったりする様子が見られた。

一部を紹介する。

事例8： 手がかり「面接者」 想起内容「施設のプログラム」

面接者が入っていくと、「今日は忙しい日や」と朝から施設の行事の練習をして、家族の面会があり、昼すぎまで喫茶店で一緒にいて、そこから併設病院へリハビリへ行き、施設2Fでしているサークルに参加して、居室に帰ってきたばかりだと話した。

「忙しい方がいい」と、話は昔の職業へと移った。

事例40： 手がかり「面接者」 想起内容「その他」

面接者を見て「きれいな服、着て」「お駄賃もらってきたか」と言い、「今、お母さんが帰ってくるから…」と話すが、いつの時点の誰のことを指しているのかは不明。

その後、「良かったなあ、〇〇さんも喜んでるわ」（〇〇さんが誰かは不明）、「私はあかん」と話し続けた。

職員・他の高齢者の出入り、廊下から聞こえる話し声などを手がかりにして、「家族」「昔の職業」「病気」「施設入所の経緯」「施設のプログラム」「職員や他の高齢者」「習慣や好み」に関する事柄が話された。

話の内容は、以前に職員・他の高齢者との間であった出来事が多く、相手は本人ではなく、似た人・似た状況の出来事であることも少なくなかった。高齢者自身を説明するために知り合いを紹介したり、これからの行動予定を説明する中で、理由として職員の動きをあげたりすることもあった。

一部を紹介する

事例26： 手がかり「他の高齢者」 想起内容「家族」

同じ部屋の高齢者が車椅子に乗ったまま寝ているのを見て、「ちょっと見てやって」と面接者に言った。面接者が大丈夫であることを話すと、「小さい子がかわいそうに」と言い、あの子は近所の子供なのだが、祭りで親とはぐれたらしいと言った。また、自分には子供がいないので、よく近所の子供を面倒見ていると話した。

その後、子供が好きだという話へ移っていった。

事例7： 手がかり「他の高齢者」 想起内容「職員や他の高齢者」

「腰が痛い」と言い、湿布をもらっているが自分では貼れず、スタッフに頼むがなかなか来てくれない話をしていった。隣のベッドで物音がしたため、声をひそめて、「隣の人は何でもかんでも（スタッフに）頼んでしてもらっているが、自分ではできることは自分でしている」と言った。話は、夜に隣の高齢者がスタッフを呼んで大騒ぎをしたことへと続き、「自分ではできることはしているのに、（スタッフに）頼ってばかりいると言われる」と繰り返した。

事例9： 手がかり「他の高齢者」 想起内容「習慣や好み」

面接者が入った時に、隣の高齢者が面接者に挨拶をして居室から出ていった。話を始めると、すぐに「あの人は…」と隣の高齢者との間であったトラブルの話になった。「ああいうのは、どうも…」と性格的に好きか嫌いかの問題に発展した。その後、話は「私は子供にも、キツイと言われるけど…」と、家族の話へ移った。

事例27： 手がかり「他の高齢者」 想起内容「家族」「昔の職業」

家で西陣織を作っていて、兄が社長をしているという話をしていった（昔、そうであつたらしい）。同じ居室の高齢者を指さし、「あの人がおばさんで、手伝いに来てくれている」と話した（そのような事実はない）。その後、話は西陣織を覚えた当初の苦労話へ移っていった。

事例34： 手がかり「他の高齢者」 想起内容「家族」

面接者が話してくれるように頼むと、「これから家に帰るところだ」と言う（そのような予定はない）。隣のベッドに寝ている高齢者を指さして、「あれは私の子供で、一緒に帰る」と話す。病気なので、病院につれてきたが、看てもらえないので連れて帰るところだと言う。

その後、家に帰る話は、バス停の位置を尋ねるところまで発展していた。

事例12： 手がかり「職員」 想起内容「昔の職業」

売店に買い物へ行った話をしているところで、スタッフが居室に入ってきた。高齢者はスタッフを紹介し、「この人は良くわかってくれるけど…」とスタッフによって対応に差があることを話した。その後、スタッフが、以前一緒に働いていた人に似ている話になり、その人の名前や家族構成などを詳しく話した。

(7)手がかり「音・匂い」「その他」

廊下から聞こえる物音、施設の放送、湿布の匂いなどを手がかりにして、「生い立ち」「家族」「昔の職業」「病気」「施設入所の経緯」「施設のプログラム」「最近の天候」「職員や他の高齢者」「習慣や好み」に関する事柄が話された。

音・匂いから推測される生活用品などについて話したり、音・匂いを通じて現在高齢者が感じているような感情を持った以前の出来事が話された。

その他、高齢者が何かに取り組んでいる状況などを手がかりにして、「生い立ち」「家族」「病気」「施設入所の経緯」「施設のプログラム」に関する事柄が話された。

一部を紹介する。

事例22： 手がかり「匂い」 想起内容「好み」

面接者と一緒に居室へ入ると、おかきの匂いがした。高齢者も気づいたらしく、お菓子の話を始め、好きな物と嫌いな物をあげ、「やっぱり、〇〇の△△が一番」（和菓子の名前）だと言った。その後、話は和菓子を食べに遠方まで出かけたことへ移り、店の近所の様子やそこまでの道のりが詳しく話された。

事例36： 手がかり「音」 想起内容「家族」
 面接者が中心になって、何気ない話をしていたところ、廊下で大きな音がした。高齢者はおどろき、「私はここに居てもいいのか」と面接者に尋ねた。「ここに居てもいい」と答えたところ、子供の頃、よく親に怒られた話をした。

事例29： 手がかり「音」 想起内容「病気」
 居室にちょうど西陽が差し込んでおり、暖かくて気持ちが良いと話をしていた。その時、施設でスタッフを呼び出す放送が入った。高齢者は聞き取れなかったようで「頭が悪くて、何にもわからんから…」と言った。そこから「頭がボーッとしてて」と事故で頭をぶつけた話を始めた。

事例33： 手がかり「その他」 想起内容「生い立ち」「家族」
 ベッドの上で、ふとんを広げたり、枕を落としたり、床頭台のタオルを取ったり、せわしなく動き回っていた。面接者が声をかけると、「〇〇さん、呼んで」（以前のかかりつけ医の名前）と言う。「今はいない」と言うと、「あの人も忙しいから」と家族がみんな世話になった話や、ずっと以前から知っているという話をした。その後、何度も「〇〇さん、呼んで」と繰り返していた。

手がかりと想起内容の関係をまとめると表 2.4 のとおりである。
 手がかりの中で、「景色・天候・季節」「音・匂い」は多様な事柄を思い出させていた。逆に「写真」「家具」は特定の事柄を思い出させていた。想起内容の中で、家族に関する事柄は、様々な手がかりによって話されていた。逆に、最近の天候、生い立ち、昔の職業に関する事柄は、特定の手がかりによって話されていた。

表 2.4 手がかりと想起内容の関係

手がかり	想起内容						
	生い立ち	家族	昔の職業	病気	施設入所の経緯	施設のプログラム	職員や他の高齢者
写真		●					
装飾品		●					
生活用品	●	●	●	●	●		●
家具		●					●
景色・天候・季節	●	●	●	●	●	●	●
高齢者自身	●	●	●	●	●	●	●
面接者		●	●	●	●		●
職員や他の高齢者		●	●	●	●		●
音・匂い	●	●	●	●	●	●	●
その他	●	●	●	●	●	●	●

●は手がかりによって想起された内容を示す

2.4. 出来事相互の関連性と現在とのつながり

想起内容の正確性について、介護者から確認できた結果をまとめると表 2.5 のとおりである。

表 2.5 想起内容の間違い

	事例番号									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
①欠損										
②修正										
③短縮										
④合成										

xは該当する項目を示す

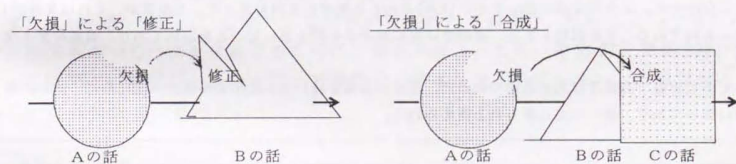
このような間違いの起こり方を、欠損・合成・短縮・修正の順にまとめる。

(1) 欠損：一部が思い出せない

「欠損」は出来事の中で印象が薄かったり（事例 21）、高齢者にとって印象の悪い（事例 30, 事例 17）部分に起こっていると考えられる。また、家族の話のように、高齢者がこれまでに繰り返し話す機会があった話題に比べて、あまり話してこなかったと推測される内容に起こっていた（事例 16）。

また、「欠損」「修正」「合成」には関係が見られた（図 2.2）。ある出来事の一部が思い出せないことによって、その後生じた別の出来事の文脈が変わってしまい、出来事のつじつまを合わせるために、修正が起こっていた（事例 30）。ある出来事の一部が思い出せないことによって、それぞれ別の形でその出来事につながっていた 2 つの出来事を区別できなくなり、合成が起こっていた（事例 17, 事例 20）。

図 2.2 欠損、修正、合成の関係



Aの欠損部分が、Bの特定部分を説明する鍵になっていた。欠損によって、Bの話が現在や他の出来事とうまくつながらなくなり、特定部分の修正が起こった。

Aの欠損部分が、類似するBとCの関係を説明する鍵になっていた。欠損によって、Bの話とCの話が区別できなくなり、混じってしまった。

事例21：欠損

昔、姉妹でススキを取りに行ったと言い、一面にススキがあった情景が豊かに話された。しかし、面接者が尋ねても、ススキを何に使ったかは思い出せなかった。

事例16：欠損

家族からももらった色紙を見ながら話をしていた。色紙の名前や写真を確認しながら、家族構成を説明していたが、色紙を「いつ誰にもらったか」という話になると、思い出せなかった。

事例30：欠損・修正

押し車を長男が買ってくれたと言い、新しい押し車を見せながら、長男の事を繰り返して話していた。実際には、長男は数年前に亡くなっている。押し車は孫が購入して施設に持ってきたものであった。長男が亡くなった当時、高齢者は長男が亡くなったことを理解していたが、施設入所後、家族を目の前にする機会がなくなり、徐々に事実が薄れていったものと考えられる。

事例17：欠損・合成・修正

ダンスの上に飾ってあった草花の話をしていて、高齢者は、この草花は職員と一緒につみに行ったものだと話していた。実際には、高齢者が職員と花をつみには行ったが、その花は食堂に飾られていた。花はすぐに枯れてしまい、高齢者が残念がったため、職員が同じ花をつんできて、高齢者の居室に飾ったものであった。高齢者の中で、花が枯れた事実がなくなり、「花をつみに行った→現在目の前にある花」になっていたと考えられる。

事例20：欠損・合成・修正

「腰が痛い」と言い、腰痛で整形外科にかかった話をしていて、その時の医者の名前がなかなか思い出せなかったが、ようやく「〇〇先生」であることがわかった。話は腰痛治療に通っているリハビリのことへ続き、その後、リハビリで出会う高齢者の話へ移った。仲良く話をしている様子や、高齢者の言った言葉などを詳しく話していたが、その高齢者の名前がなかなか出てこなかった。ようやく思い出したが、「〇〇さん」と医者の名前を言った。面接者が、それは先程話した医者の名前であることを説明したが、高齢者は既に医者の名前を言ったことを忘れており、名前を変えなかった。リハビリで出会う高齢者は別の名前であった。医者の名前を思い出した印象が強かったために、その名前が頭に残っており、混じってしまったと考えられる。

(2) 合成：違う出来事を混ぜて話す

「合成」は、複数の出来事に共通する部分に起こっていた（事例24、事例4、事例13）。毎年の旅行など、同じ種類の出来事が繰り返して起こっていると、前後関係があいまいになり、「合成」が起こりやすいと考えられる（事例4、事例13）。

事例24：合成・修正

外泊時、家族が皆、集まって一緒に食事をした話をしていて、すると、ダンスの上に立ててあったカードを指さして、「孫がくれた」と言い、孫は3人で、みんなまだ小さいという話を始めた。孫は実際は6人いる。また、孫は成人しており、カードは施設の行事時に、遊びに来た幼稚園児が全員に一枚ずつくれたものである。外泊時に家族が集まって食事をした事と、施設の行事時に幼稚園児も含めて皆が集まった事が一緒になり、「孫＝幼稚園児」になったと考えられる。

事例4：合成・修正

毎年、友達と旅行していたと話していた。高山や長崎へ行った話をし、ある年は、金沢で友達の一人とはぐれてしまい、探して苦労したと話していた。その後、話は岡山や和歌山へ行ったことへ移っていた。よく面会に来る高齢者の友人に尋ねたところ、一緒に旅行に行っており、宮城や鹿児島へも出かけていた。しかし、友達の一とはぐれたのは、高山だったと話していた。毎年の旅行のことであり、高齢者の中で細かい部分の区別がつかなくなり、内容が一部混じってしまったと考えられる。

事例13：合成・修正

転倒して、額に青あざを作っていた。額を見て、家族に笑われた話をしていて、しかし、実際には、今回、施設で転倒して青あざができてから、高齢者はまだ家族に会っていない。高齢者はこれまでも転倒を繰り返しており、以前、青あざをつくって家族に笑われた時のことと混じっていると考えられる。

(3) 短縮：昔の出来事を、最近のように話す

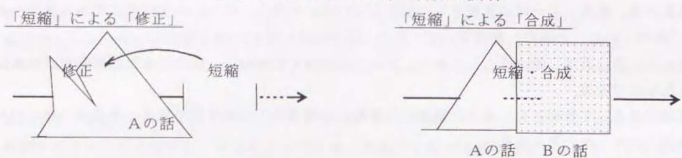
昔の職業の話をしていて、高齢者の中で退職後の出来事がなくなってしまうように、「短縮」は、話の対象としている種類の出来事が起こらなかった期間がなくなってしまう形で起こっていた（事例19、事例27、事例18、事例39）。

また、「短縮」「修正」「合成」には関係が見られた（図2.3）。短縮によって現在に近づいた出来事のつじつまを合わせるために、修正が起こったり（事例27、事例39）、短縮によって時間的に区別がつかなくなった複数の出来事が混じってしまい、合成が起こったりしていた（事例18、事例39）。

事例19：短縮

「天気が悪いと、どこへも行けない」「仕事にならない」と言った。言葉の端々をつなげると、行商の商売をしており、雨が降ると山道を歩くのが大変であるという話であった。高齢者自身は、現在も行商の仕事をしているかのように話していたが、実際に花を売り歩いていたのは、数十年前のことである。当時、山道が多かったのは話の通りであった。

図 2.3 短縮、修正、合成の関係



短縮された期間の間に、Aの話と現在との関係を説明する出来事があった。短縮された結果、Aの話が現在にうまくつながらなくなり、修正が起こった。

Aの話が現在に近づいた結果、最近のBの話と混じってしまった。

事例 27：短縮・修正

家で西陣織を作っていて、(自分の)兄が社長をしていると話していた。同じ居室の高齢者を指さし、「あの人がおばさんで、手伝いに来てくれている」と話した。

高齢者が十数年前まで、家で西陣織を作っていたのは本当である。高齢者は自分の兄が社長をしていると話したが、高齢者に兄はおらず、社長は長男である。また、同じ居室の高齢者は叔母さんではなく、手伝いに行っていたことはなかった。

高齢者は現在も西陣織を作っているように話しており、年輩になった長男や、同じ居室の高齢者を説明するために、「兄が社長」をしており、同じ居室の高齢者が「おばさんで手伝いに来てくれている」ことになったと考えられる。

事例 39：短縮・合成

面接者が何をしているのか尋ねたところ、「商売」をしていると話した。長年、夫と一緒に商売をしており、お金の苦労がたえないと話した。面接者が商売の内容を尋ねたが、「商売だ」と答えるだけで、何の商売かはわからなかった。

実際には、夫は学校教員であり、夫と一緒に商売をしたことはない。しかし、夫と離婚した後、長男家族と同居し、長男が惣菜屋や肉屋など、商売を始めては次々と変える中で、商売を手伝っていた経緯がある。

高齢者は今、「商売」をしているように話したが、手伝っていたのは十年近く前のことである。年輩になった長男を説明するために、「夫の商売」を手伝っていたことになったと考えられる。

事例 18：短縮・合成・修正

施設のサークルで先週、折り紙をしたと話していた。〇〇さんは上手にできていたが同じようにできなかったとか、先生に仕上げをもらったとか、細かい所が難しいとか、いろいろな話になった。

施設のサークルで折り紙をしたのは3ヶ月前だが、高齢者は「先週」と話していた。また、話に出てくる「〇〇さん」は3ヶ月前にはまだ入所していなかった。

「〇〇さん」は手芸が得意で、小さなキーホルダーなどを作っては周囲の高齢者にあげていた。食堂の机で作っていることが多く、高齢者もよく目にしてきた。

高齢者の中で、施設のサークルが「先週」になった結果、サークルの後に入所した「〇〇さん」が食堂で上手にキーホルダーなどを作っていることが混じり、施設のサークルに参加したことになったと考えられる。

(4)修正：話が事実と異なる

「修正」の最も顕著な例は、現在のわずかな手がかりから、過去の出来事の多くを説明しようとするものであった(事例 38、事例 32、事例 37、事例 26、事例 34、事例 29、事例 33)。手がかりが変わる度に過去が全て変わってしまうため、高齢者はいくつもの人生を生きているかのようであった。

事例 38：修正

面接者が何をしているのか尋ねたところ、居室内にベッドが並んでいるのを見て、「自分は管理人だ」と言った。自分は一人暮らしで、ここを管理するために、1年前に移り住んだと話した。その後、居室にスタッフが来てきたが、高齢者はスタッフを「自分の娘だ」と紹介し、ここに家族で長年住んでいると言った。

実際には、3ヶ月前に施設に入所して来ている。管理人をしていた経歴はなく、娘はいるがあまり交流はない。施設入所前は、三男家族と同居していた。

事例 32：修正

「泥棒に入られた」と言い、同室の高齢者を「泥棒だ」と言っていた。

周りにあまり物が無いという状況から出た言葉であり、実際に泥棒に入られた事実はない。同室の高齢者も「泥棒」の話をしていた時に偶然通りがかったため、泥棒扱いされただけであり、その後、高齢者自身は「泥棒」と言ったことを忘れてしまい、にこやかに話していた。

事例 37：修正

いきなり「みんな殺されてしまった」と言いだし、「お父さんもお母さんも」殺されてしまったと話した。自分自身は病気で入院していたから助かったと言い、「お父さんもお母さんも」殺されてしまったと繰り返した。

戦時中も含めて、そのような事実はない。父親も母親も他界しているが、殺されたわけではない。また、高齢者が入院したのは、施設に入所する直前の数ヶ月だけであり、父親や母親が存命中に、高齢者が入院していたことはなかった。

以前、病院に入院していたことがあり、さらに今、ベッドに一人で座っていて父親・母親が見えたら無いという状況から出た言葉であると推測される。

事例 26：修正

同じ部屋の高齢者が車椅子に乗ったまま寝ているのを見て、「小さい子がかわいそうに」と言った。あの子は近所の子供なのだが、祭りで親とはぐれたらしいと話した。また、自分には子供がいないので、よく近所の子供の面倒を見ていると話した。

車椅子に乗ったまま寝ている高齢者を、子供と勘違いしていた。さらに、祭りや行事はなく、高齢者自身には三人の息子がいる。過去に似た情景があり、子供の面倒を見たのかもわからないが不明である。

事例34：修正

面接者が話をしてくれるように頼むと、「これから家に帰るところだ」と言う。隣のベッドに寝ている高齢者を指さして、「あれは私の子供で、一緒に帰る」と話す。病気なので、病院につれてきたが、見てもらえないので連れて帰るところだと話した。

当日、高齢者が家に帰る予定はなかった。昔、子供を病院へ連れていったことはあっただろうが、同室の高齢者を「子供だ」と話したのは明らかな勘違いである。

事例29：修正

「頭が悪くて、何もわからんから…」と言い、「頭がボーッとして」と事故で頭をぶつけた話を始めた。面接者が尋ねたところをまとめると、道を歩いている車にはねられ、頭をぶつけたという話であった。実際には、交通事故にあったことはなく、これまでに頭をぶつけた事故はなかった。

事例33：修正

「〇〇さん呼んで」と以前のかかりつけ医の名前を言った。面接者が「今はいない」と言うと、「あの人も忙しいから」と家族がみんな世話になった話や、ずっと以前から知っているという話をした。「〇〇さん」は産婦人科医であり、高齢者が数十年前に看てもらい、その後しばらく相談に乗ってもらっていたことは確かである。しかし、家族が看てもらったことはなく、数十年前から交流もとだえている。

2.5.記憶障害の重症度別の傾向 - 出来事を想起させる環境

記憶障害の全ての段階（軽度から最重度）で、手がかりが使われ、様々な過去の出来事が想起されていた。記憶障害の全ての段階で、想起の手がかりとしての居住環境を検討し、環境づくりを援助する可能性があると考えられる。

記憶障害の重症別の傾向をまとめ、出来事を想起させる環境について考察する。

(1)記憶障害の重症度別の傾向

記憶障害の重症度によって、使用される手がかりの傾向は異なり、軽度から重度にかけて「写真」「装飾品」が減り、軽度から中等度にかけて「音・匂い」が若干増えていた(図2.4)。「生活用品」「職員や他の高齢者」は軽度から使われており、重度まであまり変わらなかった。最重度では使用される手がかりの種類が減り、残っていたのは「高齢者自身」「職員や他の高齢者」「音・匂い」等であった。

「生活用品」「職員や他の高齢者」は、高齢者が何度も接して多様な経験を持っている日常的な手がかりであり、記憶障害が重度になっても比較的利用しやすかったものと考えられる。一方、「写真」「装飾品」は、手がかりと高齢者の関係が特定の経験に限られており、記憶障害が重度になり個々の出来事に関する記憶が薄れてくると、特別に印象深い出来事でない限り、利用が難しくなると考えられる。

記憶障害が最重度になっても、「高齢者自身」は最も身近で利用しやすい手がかりであったと考えられる。「音・匂い」は視覚以外の五感に働きかける手がかりであり、「職員や他の高齢者」は、動きを持って積極的に高齢者へ働きかけてくる手がかりである。記憶障害が最重度な場合、利用できる手がかりの種類が限られる中で、これらの条件を検討する必要があると考えられる。

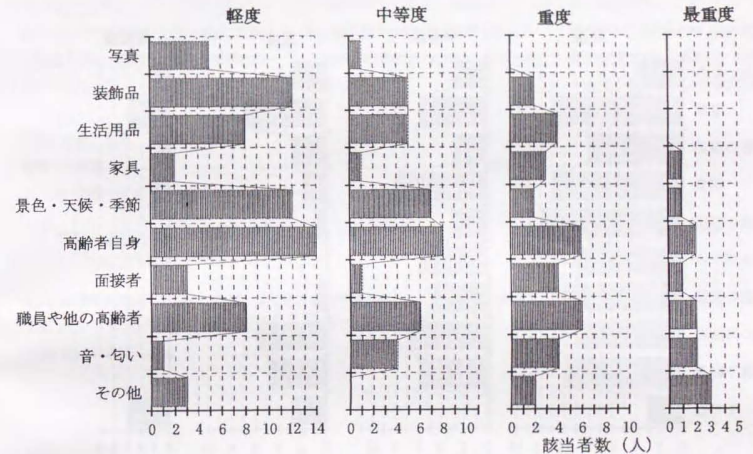


図2.4 重症度別、手がかり

想起内容は、軽度から重度になるに従って、「施設入所の経緯」「施設プログラム」「最近の天候」が減り、「生い立ち」「家族」「昔の職業」「病気」等が最後まで残っていた(図2.5)。痴呆性高齢者では、比較的最近の出来事の記憶が障害されやすく、逆に昔の記憶は保たれやすいとされている。「施設入所の経緯」等は、比較的最近の出来事であるために、記憶障害が重度になるに従って思い出すことが難しくなり、逆に「生い立ち」「家族」等は、昔の記憶を含んでおり、最後まで残っていたと考えられる。

確認できた想起内容の間違ひは、軽度で少なく、中等度で「欠損」、高度で「修正」が最も多かった(図2.6)。「修正」「短縮」は全ての段階(軽度から最重度)で見られるが、記憶障害の重症度によって、その起こり方に差が見られた(図2.7)。

「修正」は、軽度では、毎年の旅行など、同じ種類の出来事が繰り返し起こっている場合、前後関係が区別できなくなり、2つの出来事が混じってしまった(合成+修正)。中等度では、以前の出来事を思い出せないために、最近の出来事の分脈が変わってしまい、違う解釈になってしまっていた(欠損による修正)。重度・最重度では、現在のわずかな手がかりから、過去の出来事の多くを説明しようとするため、情報に乏しい部分が想像的に作り出されていた(修正のみ)。

「短縮」は、軽度・中等度では、数ヶ月前の出来事を先週のように話す程度であったり（短期間の短縮）、数十年前の出来事を現在のように話しても、出来事の内容自体は変わらなかった（短縮のみ）。重度・最重度では、数十年前の出来事を現在のように話すことで、長男を兄と間違えるなど、出来事の内容自体が変化していた（短縮による修正）。

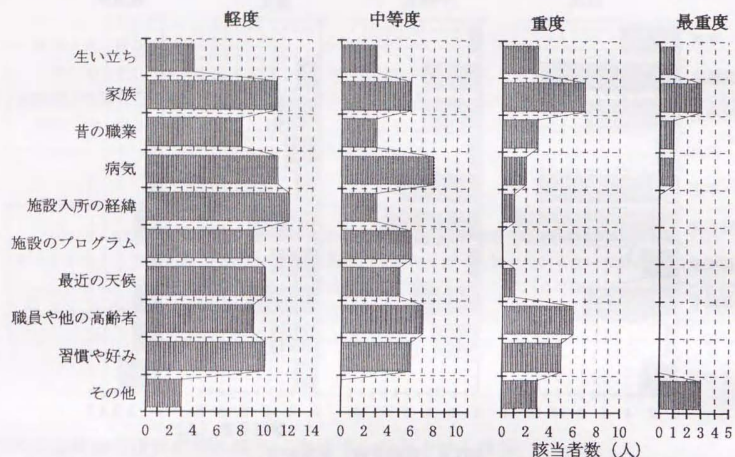


図2.5 重症度別、想起内容

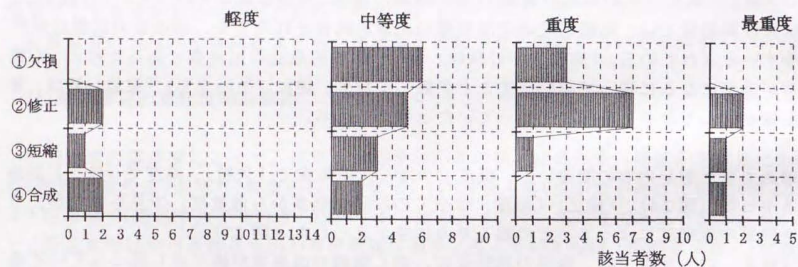
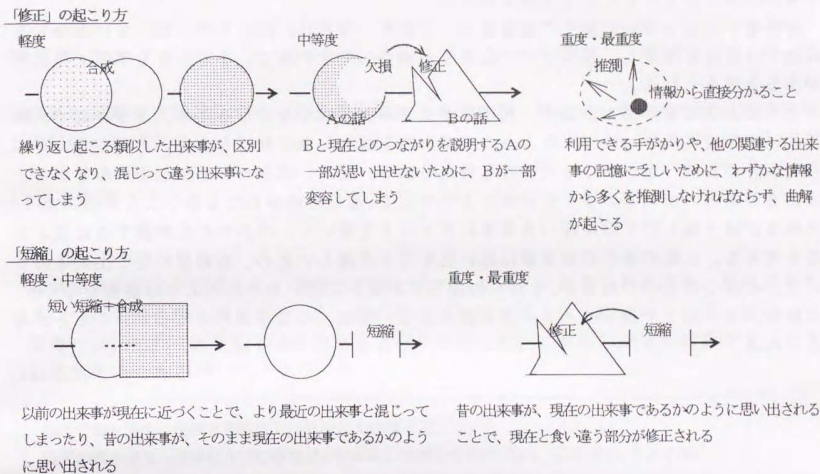


図2.6 重症度別、想起内容の関連性

図 2.7 重症度別、修正・短縮の起こり方



(2) 出来事を想起させる環境

以上から、記憶障害の重症度別に特徴をまとめ、出来事を想起させる環境を考察する。記憶障害が軽度であれば、多様な手がかりを使うことができ、手がかりから最近の出来事を含め、現在につながる多くの出来事を想起することができる。多くの出来事の相互の関連性から、個々の出来事について内容を細やかに捉えることができると考えられる。

繰り返起こる類似した出来事については、前後関係がわからなくなり混乱してしまうこともあるが、出来事を区別させるような手がかりを準備することで対応できると考えられる。「景色・天候・季節」「音・匂い」のような多様な事柄を思い出させる手がかりではなく、「写真」「家具」のような特定の事柄を思い出させる手がかりが活用できると考える。

以前の出来事を現在の出来事のように話してしまうことについても、短期間のずれであったり、時間的なずれがあっても出来事の内容は正確に思い出すことができる。このため、日付を書く等、手がかりの時間的な位置づけをわかりやすくすることで、失われた期間を取り戻す可能性が考えられる。

記憶障害が進むと、高齢者との関係が特定の経験に限られる、非日常的な手がかりについては利用することが難しくなり、さらに、手がかりを利用しても、比較的最近の出来事を思い出すことが難しくなる。利用できる手がかりや、特に現在につながる部分で思い出

せる出来事が少なくなるために、総体的に情報が乏しく、出来事相互の関連性や個々の出来事の内容が捉えにくくなると考えられる。

高齢者が何度も接して多くの経験を持っており、できれば現在も使い続けているなじみの物や日用品を活用し、現在とのつながりが納得しやすい形で、手がかりを準備する必要があると考えられる。

さらに記憶障害が進んだ場合、利用できる手がかりは少なくなるため、より身近で、動的に高齢者に働きかけてくるような手がかりを検討しなければならない。音や匂い等、視覚以外の五感へ働きかける可能性も考えられる。また、現在のわずかな手がかりから、高齢者が過去の出来事の多くを説明しようとして、過去をゆがめてしまうことのないよう、高齢者が繰り返し話す印象深い出来事にポイントを置いて、手がかりを準備する必要があると考える。比較的最近の出来事は思い出すことが難しいため、高齢者が話す出来事は昔にさかのぼったものであるが、それらの出来事が豊かに思い出されるような場面をつくり、高齢者が思い起こす過去のイメージを膨らませ、現在へつながるものにしていくことが考えられる。

文献

文1) 佐竹隆三：健忘症候群の臨床病理学的研究、精神誌 53、pp 242-298、1951

文2) 前田進、大川匡子：作話の臨床的研究 - 脳動脈瘤に合併した33例について、精神神経学雑誌 80、pp.43-63、1978

文3) 濱中淑彦：臨床神経精神医学 - 意識・知能・記憶の病理、医学書院、1986

第3章 過去の習慣による乗っ取り型エラーにおける状況の類似性

3.1.目的

痴呆性高齢者で起こりやすい過去の習慣による乗っ取り型エラーを取り上げ、居住環境との関係を検討する。

3.2.調査概要

(1)調査方法

痴呆性高齢者と介護者から、場所・時間・人の取り違え、道具の取り違え、目的のすりかえについて聞き取り調査を行った。高齢者からの聞き取りは可能な場合に限った。

間違いは、それぞれ下記のように例をあげて説明した。これらは痴呆性高齢者でよく見られる間違いである^(文1, 2)。

場所の取り違え：便所と間違えて浴室などで排泄する。

時間の取り違え：夜中に片づけ事などを始める。仕事をやめたのに、仕事へ行こうとする。

人の取り違え：続柄を間違える。亡くなっている人を生きていると言う。

道具の取り違え：ガスコンロの上にポットや炊飯器をのせる。

目的のすりかえ：「家に帰る」と言って外に出て行くが、一回りすると帰ってくる。

調査項目は①間違いの内容、②状況、③取り違えたものとの類似性、④取り違えた行為が過去に間違いでなかった時期があった場合は、④-1.その期間、④-2.生活内容を変更した経緯、④-3.変更後の経過などであった。

合わせて、居住歴を調査し、小物・家具や近隣を含む住環境の記録を行った。これらは分析の基礎資料とした。

(2)対象者

対象者は「第1章」と同様である(表1.1参照)。

(3)分析方法

聞き取りから得られた間違いは、場所・時間・人の取り違えを、①場所の間違い・②時間の間違い・③人の間違いとした。道具の取り違えを④行為の対象の間違いとした。目的のすりかえを⑤行為の目的の間違いとした。分類項目は下記のとおりである。

- | | |
|---------|------------|
| ①場所の間違い | ④行為の対象の間違い |
| ②時間の間違い | ⑤行為の目的の間違い |
| ③人の間違い | |

分類①～⑤から、それぞれ過去の習慣によると推測される間違いを取り上げた。間違いは、高齢者もしくは介護者から過去の生活内容が確認できたものに限った。

分類①～⑤で、間違いの種類をまとめ、起序を分析した。起序は、間違いの時間的経過から、(I)生活内容の変更時、(II)変更後の経験、(III)現在へのつながりで検討した。詳細は下記のとおりである。

- (I) 変更気づく手がかりが充分だったか
 (II) 変更後に、変更後の状況で経験を蓄積しており、参照できる情報が充分だったか
 (III) 最近の出来事に関する記憶が保たれており、以前の情報が、正しい文脈で現在につながっていたか
 (III)-1 変更後の経験が充分活用できたか
 (III)-2 変更前の出来事と現在を充分区別できたか

さらに、状況の類似性・習慣変更との関係を分析した。本研究において、状況は「各時点における様々な事象のありさま」を言い、習慣は「(変更前まで)繰り返し経験したことにより、高齢者が想定していた様々な事象の枠組み」を言う。前者は客観的なものであり、後者は主観的なものである。これらは共に、様々な事象に関する事柄が、階層的に関係を持って機能していると考えられる^(2,3,4)。このため状況の類似性は、各種の間違いを含めて、それぞれの間違いが生じている状況の類似度を把握した(表3.1)。習慣変更は、居住歴・住環境の記録から経年的な生活内容の変化及び高齢者の対応・間違いの変化を記述した。状況の類似性・習慣変更との関係から、間違い事例を下記の4群に分け、間違いの起序を分析した。

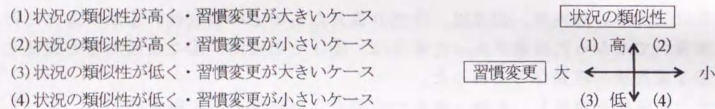


表 3.1 状況の類似性の捉え方

(例)	高 ←	間違いが生じている状況の類似度	→ 低
①場所の間違い	食堂の席を間違える	便所と浴室を間違える	自分の家を家だと思わない
②時間の間違い	曜日を間違える	季節を間違える	昼夜を間違える
③人の間違い	人の名前を間違える	親族の続柄を間違える	同居家族の続柄を間違える
④行為の対象の間違い	ボタンをかけ違える	ラジオと時計を間違える	食べ物以外の物を口にする
⑤行為の目的の間違い	売店へ寄るつもりだったのに、そのまま居室へ帰ってしまう	便所へ行くつもりだったのに、逆方向の食堂へ行ってしまう	昼食を食べに食堂へ行くつもりだったのに、「家へ帰る」と言い外へ出る

最後に、記憶障害の重症度別の傾向をまとめ、エラーを制御する環境について考察した。

3.3.間違いの種類と起序

多くの過去の習慣によると推測される間違いが起こっていた。間違いの内容は表3.2のとおりである。

(1)場所の間違い

場所の間違いには、移動に関する間違いと、場所の区別に関する間違いが見られた。

移動に関しては、自分の現位置を(他の場所との関係の上で)間違えるもの(②)、自分の現位置と目的地との位置関係を間違えるもの(⑤)、目的地の位置を(他の場所との関係の上で)間違えるものがあり(⑥～⑨、⑬)、移動に付随して障害物の位置を間違えるもの(④)が見られた。

場所の区別に関しては、物を置いた場所を間違えるもの(①)、食堂の席を間違えるもの(③)、現在住んでいる家を自分の家だと思わないもの(⑩～⑫)が見られた。

いずれも、位置関係や場所が変わったことを思い出せず、起こったエラーであった。物の置き場所を変えたことが見た目にわからなかったり(①)、違う場所であるのに似たつくりであったりして(②)、位置関係や場所が変わったことを思い出す手がかりが少なかった。食堂の席が変わっても、同じ椅子が並んでいる中で、席が変わったことを示すものはなく(③)、家具の配置が変わっても、狭い家の中で、部屋に入った所に置いてある家具は、家具にぶつかる直前まで確認することができなかった(④)。居室や便所の場所が変わっても、前の場所へ行って間違ったことに気づくまでは、変更を思い出す手がかりはほとんどなく(⑥～⑨、⑬)、位置関係が変わって目的地へ行く近道ができたことは、位置関係を覚えてしまうまでに、それを知る手がかりがなかった(⑤)。

さらに、位置関係や場所を変えたばかりであったり(①～⑦、⑫)、時間が経っていたとしても、高齢者が最近の出来事を思い出せなかったりして(⑧～⑩、⑬)、新しい位置や場所に関して、高齢者が想起し参照できる出来事が少なく、位置関係や場所の変更を知る情報が乏しいことが考えられた。新しい位置や場所に関して、想起し参照できる出来事が少ないことは、高齢者が家を自分の家だと思わない(⑩～⑫)ことにまで発展していた。

場所①「置き場所を変えたのに、以前と同じ場所を探した」の起序

置き場所を変えたことを、その対象とする物を探す時に思い出さず、起こったエラーである。置き場所を変えたことは、その周囲を含めて大幅に見た目が変わっていなければ容易に気づくことができない。置き場所を変えたことを想起させてくれる手がかりが少なかったと考えられる。

また、置き場所を変えてから、その物を使う機会があまりないと、新しい置き場所での経験が少ない。手がかりがあったとしても、想起できる出来事が限られ、置き場所の変化を教えるものにならなかったと考えられる。

表 3.2 過去の習慣によると推測される間違いの内容 (全データ)

記憶偏差の重症度	場所の問題	時間の問題	人の問題	行為の対象の問題	行為の目的の問題
軽度	①物の置き場所を変えたのに、以前と同じ場所を探した[在9,在12,施1,施9,施23] ②2F(食堂)のサークルに出かけ、そのまま1Fの食堂から帰るように居室へ帰ろうとした[施15]	①日曜日に、平日と同じように老人クラブへ出かけた[在6] ②入浴日が変わったのに、以前と同じ曜日に準備をしていた[施23] ③サークルの時間が変わったのに、以前と同じ時間に出かけた[施11]	①主治医を、以前のかかり付け医の名前で呼んだ[施9]	①新しい靴を使おうと、持ち物を入れ替えて準備していたのに、古い靴を持って出た[在6]	①食堂からリハビリ室へ行くつもりが、そのまま居室へ帰ってしまった[施11]
中等度	③食堂の席が変わったのに、以前と同じ場所に座った[施4] ④家具の配置が変わって、家具にぶつかった[在17] ⑤居室を変ったのに、前と同じ道を通り、遠回りして便所へ行った[在13] ⑥居室を変ったのに、前の居室へ行った[在13]	④デイサービスがない日でも行く用意をしている[在17]		②手芸サークルで新しい作品を始めたのに、以前の(すでに完成した)作品を探していた[施12]	②必要な物を取りに、居室へ戻ったのに、そのまま寝てしまった[施22] ③美容院へ行くつもりだったのに、ハン屋でパンを買って帰ってきた[在3]
重度	⑦居室を変ったのに、以前と同じ居室へ行った[施14] ⑧改築後、数十年たっているが、以前便所があった場所にある浴室へ行ってしまふ[在16] ⑨改築後、数十年たっているが、以前食庫があった場所にある家族の部屋へ入り、物を持って行ってしまふ[在16] ⑩「家に帰る」と言い、結婚前(数十年前に住んでいた家へ行く)とした[在4,在16]	⑤老人クラブをきめてしばらくたつたが、その期間に出かけようとする[在10] ⑥退職してから数年たつたが、以前の仕事を先に出かけた[在2] ⑦数十年前、学校の用務員をしていた。デイケアのことを「学校へ行った」と話している[在18] ⑧自営業を手伝わなくなつて数十年たつたが、机の上の伝票を居室へ持って行ってしまふ[在4]	②長女宅から三女宅へ行った時、三女と長女と間違えた[在10] ③以前、知り合いにお金を持ち逃げされたことがあり、家に来る人を皆、泥棒呼ばわりする[在16] ④介護者(長男の嫁)を「看護婦さん」と呼んでいる[在4]	③鍵が壊れ、鍵をかける方向が間違ってしまった。鍵をかきようとして鍵を開けてしまった[在10] ④洗濯する衣類を出しておいたのに、洗濯済みの衣類と一緒にタンスへ入れてしまった[在4,在10] ⑤デジタル時計のボタンを押して、「ラジオがならぬ」と言った[在4] ⑥食事の支度をしなくなつて数十年たつたが、鍋の容器を入れておくと、他の容器に移してしまう(食事の支度をしていた頃は、一度にたくさん作って容器に移していた)[在4]	④食堂から便所へ行くつもりだったのに、そのまま居室へ帰ってしまった[施27,施28]
最重度	①「家に帰る」と言い、数十年前に住んでいた住所を言う[在14] ②単に「家に帰る」と言うようになった[在2] ③改築後、数年たつたのに、便所を探して外に出た(以前は便所が外にあった)[在1]	③夜中でも、目が覚めると食事をする(朝食のつもり)[在11] ④数十年前、家政婦の仕事をしていた。現在の自宅を仕事に来ている家だと話している[在5]	⑤孫を、自分の子供と間違えている[在5] ⑥施設職員を、家族の名前で呼んでいる[施16] ⑦数十年前に旅館を経営していた。施設で、他の高齢者を従業員だと話している[施17] ⑧数十年前に亡くなつていく家族を探した[在11]	⑦便所を改装後、洋式便器の隣にある男性用便器に懸掛けた(改築前は、男性用便器がなかった)[在11] ⑧台所を改装した後、ふきんをコンロに乗せて、火つけた[在11] ⑨保温できる炊飯器に換えから数十年たつたが、炊飯が終わるとご飯を他の容器へ移してしまう[在11] ⑩電気のコードを隠さなくなった[在1]	④食堂に行くつもりだったのに、途中で「仕事へ行く」と言い出し、食堂を通りすぎた[施35] ⑤「家へ帰る」と言うて外に出るが、庭で花を見て帰ってきていた[在11]

※ []内は事例番号、在:在宅、施:施設

場所②「2Fのサークルに出かけ、そのまま1Fの食堂から帰るように居室へ帰ろうとした」の起序
なじみのない場所へ出かけ、自分の居場所が日頃と違うことを、居室へ帰る時に思い出すことができず、起こったエラーである。自分の居場所が日頃と違うことは、周囲の状況から判断できそうだが、老人保健施設で2F食堂と1F食堂が似通ったつくりであったため、手がかりに乏しかった。また、2F食堂から2F居室へ帰る方法と、1F食堂から1F居室へ帰る方法は全く同じであり、1Fと2Fが違うだけという構造がさらに混乱を引き起こしたと考えられる。
また、高齢者は、これまでに2F食堂ですごした事が少なく、2F食堂から居室へ帰るにあたって、想起し参照できる出来事が限られていた。多くの出来事の蓄積があり、容易に想起できた1F食堂から居室へ帰る方法に乗っ取られてしまったと考えられる。

場所③「食堂の席が変わったのに、以前と同じ場所に座った」の起序
食堂の席を探す時に、席が変わったことを思い出せず、起こったエラーである。場所①と同様の起序であるが、物の置き場所の場合は、以前の場所を探しても物が見つからないという手がかりがあるのに比べ、食堂の席の場合は、以前の場所にも同じ椅子があるため、さらに手がかりに乏しいことが考えられる。食堂の席は、同じ椅子が並んでいる中で、一つに自分の席という意味を付けただけのものであり、そこに名前が書いてあったり、自分の所有物が置かれていない限り、手がかりはほとんどない。周囲の人に間違っていることを注意されるまで、つまり新しく手がかりが与えられるまで、気づかないことは容易に推測できる。
さらに、食堂の席を変ったばかりであれば、新しい場所での経験が少なく、新しい場所での出来事が高齢者の中に蓄積されていない。このため、手がかりがあったとしても、手がかりから想起し参照できる出来事が少なく、席の変更を覚えてくれるものにならなかつたと考えられる。

場所④「家具の配置が変わって、家具にぶつかった」の起序
移動している時に、家具(障害物)の配置が変わったことを思い出せず、起こったエラーである。家具の配置が変わったことは、遠くから家具を確認できればわかるが、家の中ではふすまを開けたら家具があったというように、直前までわからないことが少なくない。あらかじめ思い出させてくれる手がかりに乏しかったため、家具にぶつかってしまったと考えられる。
また、家具の配置は、目的が移動であり、そこに付随する問題にすぎない。注意は目的地向けられており家具の配置を思い出す余地が少なかつたと考えられる。さらに、家具の配置が変わったばかりであれば、新しい配置での経験が少なく、このため、手がかりがあったとしても、手がかりから、新しい配置に関して想起できる出来事が少なく、配置の変化を覚えてくれるものにならなかつたと考えられる。

場所⑤「居室を変ったのに、前と同じ道を通り、遠回りして便所へ行った」の起序
便所へ行く時に、居室を変わり便所へ行く近道ができたことを思い出せず、起こったエラーである。
居室を変ったことはわかっていても、新しい居室から便所へ行く近道があることを思い出すためには、便所との位置関係や周囲の構造などを示す、別の手がかりが必要である。しかし、便所が見える位置にない限り、手がかりの利用は容易でない。さらに、遠回りして便所に行ったとしても、最終的に便所にとどりつづため、間違いを知らせる手がかりは何もない。
また、居室を変ったばかりであれば、新しい居室から便所へ行った経験が少ない。このため、便所へ行く近道に関して想起できる出来事が少なく、道を知る情報に乏しかったと考えられる。

場所⑥・⑦「居室を変ったのに、前の居室へ行った」の起序

居室へ帰る時に、居室を変ったことを思い出せず、起こったエラーである。

居室は、居室が見える位置にない限り、位置の変更を容易に確認することができない。間違っただけで前の居室へ行き、自分の荷物がなく気づくまでは、何の手がかりもなかったことが考えられる。

さらに居室を変ったばかりで、新しい居室での経験が少なく、手がかりがあったとしても、新しい居室に関して想起できる出来事が少なく、居室の変更を知る情報に乏しかったと考えられる。

場所⑧「改築後、数十年たっているが、以前便所があった場所にある浴室へ行ってしまう」の起序

便所へ行く時に、改築して便所の場所が変わったことを思い出せず、起こったエラーである。

場所⑥・⑦と同様に、便所も、便所が見える位置にない限り、位置の変更を容易に確認することができない。間違っただけで浴室へ行き、便所がないことに気づくまでは、手がかりがほとんどなかったと考えられる。

場所⑥・⑦と異なるのは、改築してから数十年たっている点である。高齢者は数十年間に、新しい便所に何度も通い、経験を積み重ねている。手がかりが少なかったとはいえ、新しい便所に関して想起できる出来事は多く、便所の場所の変更を知る情報があったはずである。しかし、痴呆性高齢者では最近の出来事を思い出しにくくなるとされている。最近の記憶は、以前の出来事を正しい分脈で現在へつなげる役割を果たしており、最近の出来事を思い出しにくくなることで、以前の出来事が現在と分離してしまうことが考えられる。この高齢者も、痴呆発症によって、最近の出来事を思い出しにくくなり、数十年にわたって作られてきたイメージと、今、目の前にある情景とが別のものになってしまい、情報が役に立たないものになってしまったことが考えられる。

場所⑨「…以前倉庫があった場所にある家族の部屋へ入り、物を持って行ってしまう」の起序

改築後、倉庫が家族の部屋になったことを思い出せず、起こったエラーである。場所の変更に伴うエラーであるが、場所⑥、場所⑧と異なるのは、高齢者が間違っただけで家族の部屋へ行っても、間違っただけで気づいていない点である。

高齢者は家族の部屋へ入って、以前、倉庫であった時のように、そこにある家族の物を持って行っている。考えられるのは、現在の家族の部屋と、以前の倉庫に共通点が多く、間違いに気づく手がかりに乏しいことである。少なくとも、現在の家族の部屋は、以前、倉庫があった場所であり、位置関係は共通している。それ以外にも、現在の家族の部屋は、以前の倉庫と同一視される程、高齢者にとって似た場所であったと考えられる。

また、改築から数十年がたっている。高齢者は改築後、数十年間、この家ですごしており、経験を積み重ねている。しかし、高齢者は痴呆発症によって、比較的最近の出来事を思い出すことが難しくなっていた。以前の記憶と現在のつながりあいになって、エラーが起こったと考えられる。

場所⑩「転居して『家に帰る』と言うようになった」の起序

転居して、自宅の雰囲気や状況が変わったことを思い出せず、起こったエラーである。場所の変更に伴うエラーであるが、場所⑥、場所⑧、場所⑨と異なるのは、現在の家を、自分の家だと思っていない点である。

高齢者は、多くの建物の中から自分の家を区別するために、過去の多くの出来事を参照していると考えられる。家に関する多くの出来事から、家の雰囲気や状況を知り、そこに自分自身が関与していたという事実から、自分の家を判断していると考えられる。過去の出来事によって、現在を判断しているのである。この

(前頁からの続き)

ため、参照する過去の出来事と、現状が異なる場合、現在につながる最近の出来事を思い出すことが難しいと、判断に支障をきたすことが考えられる。この高齢者の場合は、転居を含む最近の出来事を思い出すことが難しくなり、参照している出来事が、以前の家のものであるため、現在の家を自分の家だと思わないことが考えられる。

転居まもなくで、現在の家での経験が少なく、現在の家に関する出来事が蓄積されていないことも関与していると考えられる。高齢者が家を自分の家だと思えるためには、高齢者が自分の家を判断する上で、参照する出来事の中に、現在の家に関するものが増え、そこに自分自身が関与していたという事実が重ねられることが必要である。その際、高齢者が以前の家から持ってきた荷物等は、過去の出来事と現在をつなぎ、これまでの経験の上に新たな経験を積み重ねていくことを助けてくれると考える。

場所⑩『『家に帰る』』と言ひ、結婚前(数十年前)に住んでいた家へ行こうとした」

場所⑩『『家に帰る』』と言ひ、数十年前に住んでいた住所を言う」の起序

高齢者は、現在の家を、自分の家だと思っていない。

場所⑩との違いは、転居後、数十年がたっている点である。高齢者は数十年にわたって、現在の家で生活し、現在の家に関する出来事を蓄積してきた。高齢者が自分の家を判断する上で、参照する出来事の中に、現在の家に関するものはあり、そこに自分自身が関与していたという事実が重ねられているはずである。考えられるのは、高齢者が痴呆発症によって、最近の出来事を思い出しにくくなり、以前の記憶と現在のつながりあいになった結果、高齢者が数十年にわたってつくってきた(現在の)家のイメージと、今、目の前にある家が、別のものになってしまっていることである。高齢者は、結婚前の家に行こうとしているが、高齢者の中にある家のイメージは、その後の数十年間にわたる現在の家での出来事によって修正されており、高齢者が探す家はどこにもないことが推測される。

必要なのは、過去の出来事と現在をつなぎ、これまでの経験の上に新たな経験を積み重ねていくことである。以前から使い続けている家具やなじみの人間関係などは、これらを助けてくれると考える。

場所⑪「転居後、数年たつのに便所を探して外に出た(以前は便所が外にあった)」の起序

便所へ行く時に、転居して便所の場所が変わったことを思い出せず、起こったエラーである。場所の変更に伴うエラーであり、場所⑧と同様である。場所⑧は、以前、便所があったところに浴室があり、間違っただけで浴室へ行ってしまうが、この場合は、以前、便所が外にあり、間違っただけで外へ出てしまっていた。

また、場所⑧は改築であるが、この場合は転居である。転居の方が改築に比べて、現在と以前の状況の相違点が多く、高齢者が間違いに気づく手がかりが多いようにも考えられるが、転居で家が変わっていても、外に出てしまうために、手がかりがあまり活用できなかったとも考えられる。

場所⑦と同様に、この場合も、便所の場所が変わってから、数年が経過している。数年の間に、高齢者は新しい便所へ何度も通い、経験を蓄積している。しかし、痴呆発症によって、比較的最近の出来事を思い出すことが難しくなったために、以前の記憶と現在のつながりあいになり、エラーが起こったと考えられる。

(2) 時間の間違い

時間の間違いには、現時点の曜日・時間帯（昼夜）の間違い、特定の行為を行う曜日・時間の間違い、日課の変更に伴う間違いがあった。間違いは、いずれも状況が似ており、間違いに気づくいずれも手がかりが少ないために起こっていた。

現時点の曜日・時間帯の間違いは、現時点を知る有効な手がかりが少ないために起こっていた。現時点の曜日を示す手がかりには、新聞の日付やカレンダーなどがあるが、どれも高齢者が使わなければ役に立たないものである。高齢者へ積極的に働きかけて曜日を知らせる手がかりに乏しいことが考えられた(①)。現時点の時間帯（昼夜）は、周囲の明るさなど、曜日に比べて比較的に利用できる手がかりが多いが、高齢者にとって十分でなかったと考えられる(⑨)。

特定の行為を行う曜日・時間は、「デイサービス＝水曜日」のように、行為と曜日の対応が記号的で意味がなく、思い出す手がかりに乏しいことが考えられた(④)。日課の変更を伴うものは、次の「日課の変更」でまとめて述べる(②、③)。

日課の変更には、曜日・時間帯を変更して継続しているもの、やめてしまったものがあった。やめてしまったものの中には、やめてから数十年が経過しているものも見られた。曜日・時間帯を変更して継続しているものは、周囲の状況が変わっていないため、変更を思い出す手がかりがほとんどなかった(②、③)。やめてしまったものは、道具を片づけたりして周囲の状況が変化していたが、高齢者が最近の出来事を思い出せなかったりして、総体的に手がかりに乏しかったと考えられる(⑤、⑥、⑧)。やめてから数十年が経っているものは、現在の周囲の状況が、数十年前と偶然似ていたために、区別できなくなり、混乱が生じていた(⑦、⑩)。

時間①「日曜日に、平日と同じように老人クラブへ出かけた」の起序

日曜日に、日曜日であることを思い出せず、起こったエラーである。曜日を思い出す手がかりには、新聞の日付、カレンダーの印、周囲の人の平日とは異なる動き方などがある。また、前日が土曜日であったことを思い出せば、今日が日曜日であることがわかる。

しかし、これらの手がかりは、そちらに注意を向けなければ活用することができない。高齢者は老人クラブへ行くとしており、曜日を確認する余地がなかったと考えられる。

時間②「入浴日が変わったのに、以前と同じ曜日に準備をしていた」の起序

入浴日が変わったことを思い出せず、起こったエラーである。入浴日が変わったことは、メモなどを残していない限り、見た目にわからず、変更を思い出す手がかりはほとんどない。

また、入浴日が変わったばかりであれば、その曜日に入浴をした経験が少ない。高齢者が、入浴するために過去の出来事を想起し参照した場合、入浴日の変更を知る情報に乏しかったと考えられる。

時間③「サークルの時間が変わったのに、以前と同じ時間にでかけた」の起序

サークルの時間が変わったことを思い出せず、起こったエラーである。サークルの時間が変わったことは、メモなどを残していない限り、見た目にわからず、変更を思い出す手がかりはほとんどない。

また、サークルの時間が変わったばかりであれば、その時間にサークルへ行った経験が少ない。高齢者が、サークルへ行くために、過去の出来事を想起し参照した場合、時間帯の変更を知ることができる情報が少なかったと考えられる。

時間④「デイサービスがない曜日でも行く用意をしている」の起序

高齢者はデイサービスへ行っていることは覚えているが、デイサービスが何曜日なのかを覚えていない。

デイサービスへ行っていることは、過去の出来事を思い出す中で知ることができるが、それが何曜日ののかを、過去の出来事を並べて、不定期に変動する他の日課との関係から推測することは容易でない。また、曜日は、日曜日から土曜日まで7日に分けて振られている記号にすぎず、「デイサービス＝○曜日」と覚えることは、ただの丸暗記に近い。デイサービスと曜日との対応が、記号的で意味がないため、高齢者は過去の出来事から、デイサービスの曜日を知ることができず、混乱を生じていたと考えられる。

時間⑤「老人クラブをやめてしばらくたつが、その時間に出かけようとする」の起序

老人クラブをやめたことを思い出せず、起こったエラーである。老人クラブをやめた後、関連する道具を片づけたりして周囲の状況は変化しているが、高齢者が老人クラブをやめたことを思い出すには十分でなかったようである。

また、日課を変更したばかりであった時間②・時間③と異なり、老人クラブをやめてからしばらくたっている。老人クラブをやめた後、高齢者は新しい日課で日々をすごすようになり、現在までの間に、新しい日課での経験を蓄積している。しかし、痴呆性高齢者は、比較的最近の出来事を思い出すことが難しくなるとされている。この高齢者も、痴呆発症により、ここしばらくの出来事があいまいになり、日課の変更を知る情報に乏しくなったことが考えられる。

時間⑥「退職してから数年たつが、以前の仕事先に出かけた」の起序

退職したことを思い出せず、起こったエラーである。退職後、関連する道具類を片づけており、周囲の状況は変化しているが、高齢者が退職したことを思い出すには十分でなかったようである。

また、退職後、数年がたっている。時間⑤と同様に、退職後、高齢者は新しい日課で日々をすごすようになり、数年間にわたって新しい日課での経験を蓄積している。しかし、高齢者は痴呆発症により、最近の出来事を思い出しにくくなり、以前の記憶と現在のつながりがあいまいになった結果、日課の変更を知る情報に乏しくなったと考えられる。

時間⑦「…学校の用務員をしていた。デイケアのことを『学校へ行った』と話している」の起序

学校の用務員をやめたこと、その後、デイケアへ通っていることを詳しく思い出せず、両者が混じってしまったエラーである。

用務員の制服などは既になく、周囲の状況は大きく変化している。しかし、それ以上に、現在通っているデイケアとの共通点が大きかったものと考えられる。高齢者にとって、デイケアの建物やプログラムなどは、

(前頁からの続き)

学校に近かったのかもしれない。昔と現在の状況が偶然似ていて、区別する手がかりが少なくなったことに、高齢者が痴呆を発症し、以前の記憶と現在のつながりがあいまいになったことが重なって、エラーが起こったと考えられる。

時間⑧「自営業を手伝わなくなって十数年たつが、机の上の伝票を居室へ持って行ってしまう」の起序
自営業を手伝わなくなって、伝票を持っていく必要がなくなったことを思い出せず、起こったエラーである。高齢者は自営業を手伝わなくなっているものの、家で自営業は続けられており、周囲の状況は手伝っていた時とあまり変わらない。高齢者が、自営業を手伝わなくなったことを思い出す手がかりは、あまりなかったと考えられる。

また、自営業を手伝わなくなって十数年がたっているが、痴呆発症により最近の出来事を思い出しにくくなり、以前の記憶と現在のつながりがあいまいになった結果、自営業を手伝わなくなったことを知る情報に乏しかったと考えられる。

時間⑨「夜中でも、目が覚めると食事をする(朝食のつもり)」の起序

夜中に、夜中であることを思い出せず、起こったエラーである。夜中に、夜中であることを思い出したための手がかりとして、時計、明るさ、周囲の人の日中とは異なった動きなどが考えられる。また、自分自身が夜中によく目を覚ますことを思い出せば、夜中であることを知る一つの情報になってくれる。しかし、このような手がかり等は、時間を確認することに注意を向けなければ活用できない。高齢者は、食事をしようとしており、時間を確認する余地がなかったと考えられる。

さらに、夜中に目をさますようになったのが比較的最近のことであったなら、高齢者はそれまで、長年、目がさめたら朝で、朝食を食べるという行為を繰り返してきたと考えられる。このため、痴呆発症によって、最近の出来事があいまいになる中で、容易に想起し参照できた行為に乗っ取られてしまったと考えられる。

時間⑩「…家政婦の仕事をしていた。現在の自宅を仕事に来ている家だと話している」の起序

家政婦をやめたこと、家を変えたことを詳しく思い出せず、両者が混ってしまったエラーである。数十年の間に周囲の状況は大きく変化していると考えられるが、高齢者が家政婦をやめたことを思い出すには、十分でなかったようである。それ以上に、家政婦をしていた時の状況と、現在の家での状況が似ており区別できなくなったと考えられる。高齢者にとって、現在の家での過ごし方は、自分の家よりも家政婦として出先で仕事をしているイメージに近いのかもしれない。

高齢者が痴呆を発症し、以前の記憶と現在のつながりがあいまいになったことが重なって、エラーが起こったと考えられる。

(3) 人の間違い

人の間違いには、名前間違い、続柄間違い、雇用関係などの自分との関係づけの間違いがあった。

名前間違いは、人と名前の対応が記号的で意味づけがなく、思い出す手がかりに乏しいために起こっていた。医者を変わるというように、同じ場面で対応する相手が変わったことも影響していたと考えられる(①)。

続柄間違いは、家族と一緒にすごした過去の多くの出来事(正しい分脈で)現在につなげる手がかりに乏しいために起こっていた。痴呆発症後、高齢者と家族の関係が変化したり(②、④～⑥)、施設に入所して周囲の状況が大きく変わったことも影響していたと考えられる(⑥)。

雇用関係などの、自分との関係づけの間違いは、今と以前の特定の状況が似ているために起こっていた(③、⑦、⑧)。関係づけの間違いには、亡くなった人を探すというような、混乱も見られた(⑧)。施設に入所して周囲の状況が大きく変わったことも影響していたと考えられる(⑦)。

人①「主治医を、以前のかかり付け医の名前で呼んだ」の起序

医者と呼ぶ時に名前を思い出せず、以前の状況と混ってしまったエラーである。

高齢者は医者が変わったことは覚えている。しかし、名前がとっさに出てこず、無意識のうちに以前のかかり付け医の名前で呼んでしまったと考えられる。名前は、人についている記号にすぎない。医者が山田であっても斎藤であっても、他のどんな名前でも良く、そこに何の意味づけもない。このため、高齢者は名前を思い出す手がかりが少なく、エラーが起こったと考えられる。

また、医者と呼ぶ時に、高齢者は無意識のうちに以前のかかり付け医の名前で呼んでいる。他の名前でも良かったわけだが、同じ医者の名前が出てきている。名前を思い出すために、過去の出来事を想起し参照する時、高齢者は「診察室で、机に向かって白衣の人を呼んでいる」状況を思い浮かべていたと考えられる。名前は人についているものだが、単に容貌や体格ではなく、その人が繰り返し出てくる状況などを含めて、過去の出来事が参照されている。名前の検索は、状況に依存しており、状況が似ていると名前を間違えてしまいやすいのである。

高齢者は周囲の状況から医者の名前を思い出すところまではできたが、同じ状況で対応する相手が変わっているため、以前の医者と現在の医者の名前を区別する手がかりがなく、エラーが起こったと考えられる。

人②「長女宅から三女宅へ行った時、三女を長女と間違えた」の起序

三女に対応する時に、以前、長女に対応した状況と混ってしまったエラーである。

三女に対応する時に、高齢者は過去の出来事を参照する中で、「介護をしている子供に対応している」状況を思い浮かべていたと考えられる。ここから「介護をしている子供」の中で、長女ではなく三女に対応するためには、思い浮かべる状況を長女と三女に分けて、整理しなければならなかった。しかし、状況を分ける手がかりが十分でなかったために、混ってしまったと考えられる。この時、高齢者は長女宅から三女宅へ行っている。長女宅へ三女が来たのであれば、家主である長女と、客である三女を間違えることはなかったかもしれない。しかし、高齢者が三女宅へ行ったために、共に家主である長女と三女を区別できなくなった。

さらに、高齢者は三女宅へあまり行ったことがなく、三女宅で介護を受けた経験が少なかった。このため、三女宅について「介護をしている子供に対応している」時にいた建物や使っていた小物など、他の付属条件を詳しく思い出すことができず、長女宅の状況と三女宅の状況を分けることができなかったと考えられる。そして、三女宅に関して参照できる出来事が少なく、相対的に長女宅に関する出来事を参照する比重が重くなったために、長女宅での対応に乗っ取られてしまったと考えられる。

(前頁からの続き)

また、高齢者が長女・三女から、介護を受けるようになったのは比較的最近のことである。高齢者はこれまでに長女・三女と一緒にすごし、多くの経験を蓄積している。高齢者が長女・三女に対応するのに、想起し参照する出来事は少なくなかった。三女に対応するのに、「介護をしている子供に対応している」状況を思い浮かべなくても、「三女と一緒にすごしている」状況で良かったはずである。しかし、介護を受けるようになって、高齢者と長女・三女との関係が変化の中で、高齢者は過去の出来事を参照しづらくなっていったと考えられる。そのため、比較的最近の記憶に頼らざるを得ず、情報が少なくなったと考えられる。

一人③「以前、知り合いにお金を持ち逃げされたことがあり、家に来る人を皆、泥棒呼ばわりする」の起序
家に来る人に対応する時、以前、知り合いにお金を持ち逃げされた状況と混じってしまい、起こったエラーである。家に来る人に対応する時、高齢者は過去の出来事を想起し参照する中で、「家にあがって、話しこんでいる人へ対応している」状況を思い浮かべていると考えられる。そして、それが、知り合いにお金を持ち逃げされた時の状況と似ているために、両者を区別できなくなり、混じってしまったと考えられる。

また、痴呆性高齢者は最近の出来事を思い出しにくくなり、以前の記憶と現在のつながりがあいまいになってしまった結果、両者を区別できなくなったと考えられる。

一人④「介護者(長男の嫁)を『看護婦さん』と呼んでいる」の起序

介護者に対応する時、病院で介護を受けた時の状況と混じってしまい、起こったエラーである。

「看護婦さん」は、高齢者にとって、病院で白衣を着ている人ではなく、介護をしてくれる人の役割名称であったと考えられる。このため、看護婦と目の前にいる長男の嫁を区別できなくなったと考えられる。

長男の嫁は、結婚以来、ずっと高齢者と一緒に暮らしている。一緒に数多くの出来事を経験しており、高齢者が長男の嫁に対応する時に、想起し参照できる出来事は少なくなかった。しかし、痴呆発症後、高齢者と長男の嫁との関係は変化していた。高齢者と長男の嫁との関係が、介護を受ける人、介護をする人の関係になるにつれ、高齢者は、これまでの出来事を参照しづらくなっていったと考えられる。そして、痴呆発症により、高齢者が最近の出来事を思い出しにくくなり、以前の記憶と現在のつながりがあいまいになったことが重なって、エラーが起こったと考えられる。

一人⑤「孫を、自分の子供と間違えている」の起序

孫に対応する時、昔、自分の子供に対応していた時の状況と混じってしまい、起こったエラーである。

孫へ対応する時、高齢者は「家族である小さな子に対応している」状況を思い浮かべていると考えられる。「家族である小さな子」は現在は孫であるが、昔は自分の子供であった。

家族の続柄も、名前と同様に、目の前の状況から、過去の多くの出来事を想起し参照する中で区別されている。成人した自分の子供は、生まれた時から幼稚園・小学校を経て、何十年という時の中で、社会に出て、結婚し、それぞれに子供をもうけ、40代半ばになったという過去の記憶が、現在に正確な分脈でつながるからこそ、自分の子供であることがわかる。それがなければ、単に同居している40代半ばのおばさんである。孫も同様であり、成人した自分の子供が、結婚し子供をもうけ、その子供が小学生になっているという比較的最近の記憶が、現在に正確な文脈でつながるからこそ、孫であることがわかる。

(前頁からの続き)

高齢者は、痴呆発症により、最近の出来事を思い出しにくくなり、以前の記憶と現在が正確な文脈でつながらなくなった結果、エラーが起こったと考えられる。

また、痴呆発症後、高齢者と子供の関係は変化していた。親と子供、どちらかと言えば、面倒をみる人と面倒をみられる人という関係から、立場が逆転し、介護を受ける人、介護をする人という関係になったのである。この変化は、最近のものであるため、まだ経験が浅く、高齢者が過去の出来事を想起し参照する中で、思い出すのは容易でない。一方、高齢者と孫との関係は変化していない。祖母と孫、面倒をみる人と面倒をみられる人のままである。最近の出来事を思い出しにくくなり、以前の記憶が現在と正確な分脈でつながらなくなっている高齢者が、孫にとの関係性を強め、以前の子供との関係を重ねたとしても不思議はない。痴呆発症による関係の変化が、続柄を間違えるエラーへ影響していたと考えられるのである。

一人⑥「施設の職員を、家族の名前で呼んでいる」の起序

施設の職員を呼ぶ時に、家族を呼んでいた状況と混ざってしまったエラーである。

高齢者は施設の職員を呼ぶ時に、「一緒にいて介護をしている人に対応している」状況を思い浮かべていたと考えられる。「介護をしている人」は現在は施設の職員であるが、以前は家族であった。

本来なら、介護をしている人の容貌・服装、介護を受けている建物、周りにいる人などを手がかりに、家と施設を区別し、施設の職員と家族を分けることができるはずである。しかし、施設入所は人や関係を大きく変える出来事であり、混乱をきたしたものと考えられる。施設に入所することで、家族の役割や位置づけは変化している。家族と一緒にすごしてきた多くの出来事が、高齢者にとって参照しづらいものになったことが考えられる。さらに、高齢者が対応しきれない周囲の人や関係の大きな変化によって、以前の記憶が現在に正しい分脈でつながらなくなり、エラーが起こったと考えられる。

一人⑦「数十年前に旅館を経営していた。施設で、他の高齢者を従業員だと話している」の起序

施設で他の高齢者に対応する時に、数十年前に旅館を経営していた状況と混ざってしまったエラーである。

高齢者にとって、施設は旅館に近かったのかもしれない。旅館を経営していた時から数十年がたっているが、現在の状況と、昔の状況の一部が似たものであったために、区別できなくなりエラーが起こったと考えられる。高齢者与其他の高齢者との関係は、「同じ建物の中で一緒に行動しているが、客でもなく、家族でもない人」であった。それは、昔は旅館の従業員だったのである。また、施設入所は比較的最近の出来事であり、周囲の人や関係が大きく変わる中で、混乱をきたしたものと考えられる。

一人⑧「数十年前に亡くなっている家族を探した」の起序

家族が亡くなっていることを思い出せず、起こったエラーである。何らかの状況が、亡くなった家族と以前すごした状況と似たものであったために、乗っ取られてしまったと考えられる。

目の前の状況と、亡くなった家族と以前すごした時の状況を区別するには、周囲にいる人が以前よりも年老いていることや、居室の配置や家具・小物の変化などを利用することができる。また、家族が亡くなってから数十年間に、その家族がいない状況で蓄積してきた経験がある。しかし、高齢者が痴呆発症により、最近の出来事を思い出しにくくなり、以前の記憶と現在のつながりがあいまいになる中で、これらを有効に活用できなくなったと考えられる。

(4) 行為の対象の間違い

行為の対象の間違いには、変更を伴うものと、変更を伴わないものがあった。

変更を伴う間違いは、変更したばかりであったり(①～④、⑦、⑧)、変更してからしばらくたっても、高齢者が最近の出来事を思い出しにくくなっていたりして(⑥、⑨)、変更内容を思い出せないために起こっていた。変更内容には、対象の変更、配置の変更、取り扱い方法の変更があった。

対象の変更を伴う取り違えでは、新しい物が目立つ位置になかったりして、物を新しくしたことを思い出す手がかりが少なかった(①、②)。古い物を使ったり、古い物を探したりしていた。配置の変更、取り扱い方法の変更を伴うものは後述する(③、⑦、⑨)。

配置の変更を伴う間違いでは、台所用品の取り違えなど、行為に集中していると新しくなった物の配置を容易に確認できなかった(⑦、⑧)。

取り扱い方法の変更を伴う間違いでは、取り扱い方法がどう変わったのかが、見た目を確認しにくかった(③、④、⑥、⑨)。取り扱い方法がその時々によって変わるものは、今回がどちらの方法であったのかがわからなくなり、取り扱い方法が新しくなったものは、取り扱い方法を間違えるほど、どちらが正しい方法であったのかがわからなくなり、混乱が強くなっていた。

変更を伴わない対象の取り違えは、形が似ている物で起こっており、区別しにくかったことが考えられた(⑤、⑩)。

行為の対象①「新しい靴をしようとして、持ち物を入れて準備して置いたのに、古い靴を持って出た」の起序
靴を持って出た時に、靴を変えたことを思い出せず、起こったエラーである。持ち物を入れ替えて準備していたため、靴の重さなどが、これまでと違ったと思われるが、高齢者が間違いに気づくには十分でなかったようである。

また、新しい靴は買ったばかりで使ったことはなく、高齢者が新しい靴のことを思い出す情報が限られていたと考えられる。

行為の対象②「手芸サークルで新しい作品を始めたのに、以前の作品を探していた」の起序

手芸サークルで作品を探す時に、新しい作品を始めたことを思い出せず、起こったエラーである。手芸サークルで以前の作品を完成させ、新しい作品を始めたことは、作品を探してみるまで見ただけでわからず、何の手がかりもない。また、新しい作品を作り始めたばかりであり、高齢者が過去の出来事を想起し参照する中で、新しい作品に気づく情報が限られていたと考えられる。

行為の対象③「鍵をかける方向が縦横逆になった。鍵をかけようとして鍵を開けてしまった」の起序

鍵をかける時に、新しい鍵をかける方法を思い出せず、起こったエラーである。

高齢者は鍵を変え、鍵をかける方向が縦横逆になったことは覚えていた。ただ、鍵をかける方向が、以前の鍵が縦横どちらであり、新しい鍵が縦横どちらであるか思い出せなかった。鍵をかける方向を間違えれば間違えるほど、前と後のどちらがどちらであったのかが区別できなくなっていくと考えられる。

(前頁からの続き)

鍵をかける方向は見た目にわからず、実際に動かしてみるまで、手がかりは全くなかった。また、以前の鍵と新しい鍵は外観が全く同じであり、鍵がかかる方向が逆になっているだけの違いであった。高齢者は、鍵をかけるために、過去の鍵をかけた状況を思い浮かべるが、以前の鍵と新しい鍵の外観が同じであるため、思い浮かべた状況がどちらのものであったかが区別できず、役に立たなかったと考えられる。同様に、高齢者はこれまでに間違いを繰り返しており、思い浮かべた状況が、正しかった時のものか、間違った時のものか区別できず、混乱を強めていったと考えられる。

行為の対象④「洗濯する衣類を出しておいたのに、…衣類と一緒にタンスへ入れてしまった」の起序

衣類をタンスに入れる時に、洗濯する衣類を出しておいたことを思い出せず、起こったエラーである。洗濯するために出しておいた衣類は、衣類であることに変わりはなく、着替えた時に洗濯しようと思っただけのものである。見た目は洗濯済みの衣類とほとんど変わらない。着替えた時の意図を思い出させてくれる手がかりは、ほとんどなかったと考えられる。

また、高齢者は長年、家事をしており、衣類を分けて一方は洗濯をし、一方はタンスに入れることを繰り返し行っている。この類似した状況が繰り返し起こる中で、目の前にある衣類が洗濯前のものなのか、洗濯済みのものなのかわからなくなっても不思議はない。高齢者は目の前にある衣類を取り扱うために、その衣類を分けた状況を思い浮かべるが、目の前の衣類と、その前日にタンスに入れた衣類は、見た目がほとんど変わらない。思い浮かべた状況がどちらのものであったかを区別するのは容易でなかったと考えられる。

行為の対象⑤「デジタル時計のボタンを押して、『ラジオがならない』と言った」の起序

ラジオとデジタル時計を間違えたエラーである。高齢者にとって、ラジオとデジタル時計が似たものであったために、区別できなくなり、起こったエラーであると考えられる。

行為の対象⑥「…鍋に物を入れておくと、他の容器へ移してしまう」の起序

以前のように、一度にたくさん作って容器に移して保存しておくような食事の支度をしなくなったことを思い出せず、起こったエラーである。高齢者が食事の支度をしなくなって数十年が立ち、物の配置など、周囲の状況も変わっていたと考えられるが、高齢者が食事の支度をしなくなったことに気づくには、十分でなかったようである。さらに、鍋に物が入っているという状況が、高齢者が以前、食事の支度をしていた時に、一度にたくさん作って容器に移して保存していた状況に似ていたために、区別できなくなり、乗っ取られてしまったと考えられる。

行為の対象⑦「便所を改装後、洋式便器の隣にある男性用の便器に腰かけた」の起序

洋式便器と、隣にある男性用の便器を間違えたエラーである。便所を改装後、便器の配置が変わっており、高齢者の混乱を引き起こしたと考えられる。便所の配置が変わっていることは見ただけで確認できるが、排泄に注意が向いている高齢者にとって、十分な手がかりでなかったことが考えられる。

また、改装したばかりであり、新しい便所を使った経験が少ない。このため、高齢者が想起し参照できる新しい便所に関する出来事が少なく、配置の変更を知らせるものにならなかったと考えられる。

行為の対象⑧「台所を改装した後、ふきんをコンロに乗せて、火をつけた」の起序

ふきんと、鍋などの加熱容器を取り違えたエラーである。台所を改装した後、台所用品は配置が変わっている。配置の変更は見た目に確認できるが、食事の支度に注意が向いている高齢者に、台所用品の配置を確認している余裕はなかったと考えられる。

また、改装したばかりであり、新しい台所を使った経験が少ない。このため、高齢者が想起し参照できる出来事の中に、新しい台所に関するものが少なく、配置の変更を知らせるものにならなかったと考えられる。

行為の対象⑨「保温できる炊飯器…炊飯が終わるとごはんを他の容器へ移してしまう」の起序

炊飯器が保温できるものになり、炊飯が終わってもごはんを他の容器へ移す必要がなくなったことを思い出せず、起こったエラーである。炊飯器が変わったことは、色や形態などが異なるために確認できる。しかし、炊飯器の機能が変ったことは、見た目ではわかりづらい。よく見れば、古い炊飯器にはなかった保温スイッチが付いており、保温できる炊飯器に変わったことがわかるが、高齢者にとって十分な手がかりでなかったと考えられる。

また、保温できる炊飯器に換えてから十数年がたっている。高齢者は新しい炊飯器を、十数年にわたって使用しており、経験を蓄積している。高齢者が炊飯器を使うために、過去の出来事を想起し参照する中で、新しい炊飯器に関する情報も少なくなかったと考えられる。しかし、痴呆性高齢者は最近の出来事を思い出しにくくなるとされている。この高齢者も、痴呆発症により、最近の出来事を思い出しにくくなり、以前の記憶と現在のつながりがいまいちになる中で、有効に活用できる情報が少なくなってしまうと考えられる。

行為の対象⑩「電気のコードを腰に締めた」の起序

電気のコードを、着物の腰ひもと間違えたエラーである。高齢者にとって、電気のコードと着物の腰ひもが似たものであったために、区別できなくなり、エラーが起こったと考えられる。

(5) 行為の目的の違い

行為の目的の違いは、いずれも当初の目的を忘れてしまい、途中から別の行為に変わってしまうものであった。目的は高齢者の頭の中だけにあり、忘れてしまった時に、思い出す手がかりはほとんどなかった。

違いは、いずれも場所を移動することによって起こっていた。目的を思い立った場所に帰ってきた時に、当初の目的を思い出すことがあることから(③)、目的を思い立ったところから場所を移動し、周囲の状況が変わってしまうことが、目的を忘れる原因の一つになっていることが考えられた。また、移動中に目的地を見ても、それだけでは目的を思い出せなかった(④、⑤)。

当初目指していた行為と、取って代わった行為は、共通部分が予想以上に少なく、数十年前の行為が現れることもあった(⑤、⑥)。

行為の目的①「食堂からリハビリへ行くつもりが、そのまま居室へ帰ってしまった」の起序

「リハビリへ行く」ことが、食堂から移動するうちに「居室へ帰る」ことに乗っ取られていた。共通するのは、食堂から出て、リハビリへ行く道と、居室へ帰る道が分かれるまでの数十mである。その数十mのうちに、リハビリへ行くことを忘れてしまい、いつものように無意識に居室へ帰ってしまったと考えられる。

「リハビリへ行く」ことは、高齢者が頭の中で考えているだけであり、それを忘れた時に思い出す手がかりは何もない。リハビリ室に向かって歩いているという、現在、進行中の行為内容が、目的を思い出す手がかりになることもあるが、それが、「居室へ帰る」等の別の行為と同じものであった場合、区別ができなくなり明らかな手がかりにならなかったと考えられる。

行為の目的②「必要な物を取りに、居室へ戻ったのに、そのまま寝てしまった」の起序

「必要な物を取りに行く」ことが、移動するうちに「居室へ帰って寝る」ことに乗っ取られていた。共通するのは、現在地から居室へ帰ることである。現在地から居室へ帰っているうちに、必要な物を取りに戻ったことを忘れてしまい、そのまま寝てしまったと考えられる。

目的①と同様に、「必要な物を取りに行く」ことは高齢者が頭の中で考えているだけであり、それを忘れた時に思い出す手がかりは何もない。食堂で作業を続けるために、机の上に道具を広げたままであるというような、進行中の行為内容が、目的を思い出す手がかりになることもあるが、この場合、高齢者は食堂を見て確認できる位置におらず、手がかりにならなかったと考えられる。

行為の目的③「美容院へ行くつもりだったのに、パン屋でパンを買って帰ってきた」の起序

「美容院へ行く」ことが、家を出て歩くうちに「パン屋へ行く」ことに乗っ取られていた。共通するのは、家を出てパン屋までの道である(美容院はパン屋を通り越して、まだ先にある)。家を出てパン屋まで歩くうちに、美容院へ行くことを忘れてしまい、高齢者は家に帰ってくるまで、美容院へ行くはずであったことを思い出せなかった。

目的①・②と同様に、「美容院へ行く」ことは高齢者が頭の中で考えているだけであり、それを忘れた時に思い出す手がかりは何もない。現在進行中の行為内容が、目的を思い出す手がかりになることもあるが、それが、別の行為と同じものであった場合は、区別できなくなり、手がかりにならなかったと考えられる。

しかし、高齢者は家に帰って、美容院へ行くはずであったことを思い出している。家は、高齢者が美容院へ行くことを思い立った場所であり、同じ場所に帰ったことで、再び目的を思いだしたものと考えられる。

行為の目的④「食堂から便所へ行くつもりだったのに、そのまま居室に帰って寝てしまった」の起序

「便所へ行く」ことが、食堂から移動するうちに「居室へ帰る」ことに乗っ取られていた。共通するのは、食堂から便所までの道である(居室は便所を通り越して、まだ先にある)。食堂を出て便所まで移動するうちに便所へ行くことを忘れてしまい、居室へ帰って寝てしまったと考えられる。居室へ帰るまでに、途中に便所があったにもかかわらず、高齢者は便所へ行くことを思い出せなかった。

目的①～③と同様に、「便所へ行く」目的は高齢者の頭の中だけにあり、忘れた時に思い出す手がかりがなかった。さらに、食堂、便所、居室間の移動は、日常生活の中で頻繁にあり、食堂から便所へ行って食堂に戻ることもあれば、食堂から便所へ行って居室へ帰ることもあり、便所へ行かず、食堂から直接、居室へ帰ることもあった。つまり、食堂から便所・居室方向へ向かったとしても、その経路はその時によって様々であり、一定のものではなかったのである。このため、高齢者が目的を忘れた場合、便所・居室方向へ向

(前頁からの続き)

かって歩いているという現在進行中の行為内容からは、何も得ることができなかったと考えられる。さらに、高齢者が過去の出来事を想起し参照したとしても、多様な状況が区別できず、有効な情報にならなかったと考えられる。

また、高齢者は、途中で便所があったにもかかわらず、便所へ行くはずであったことを思い出していない。目的③が目的を思い立った場所である家に帰って、目的を思い出しているのと対照的である。移動中に目的地を見ても、それだけでは目的を思い出す手がかりにならないことが考えられる。

行為の目的⑤「食堂に行くつもりだったのに、『仕事に行く』と言いだし、食堂を通りすぎた」の起序

「食事に行く」ことが「仕事に行く」ことに乗っ取られていた。高齢者が働いていたのは十数年前のことである。2つの行為はその時点で異なっており、共通するのは、自分の居室から出て歩くという点だけである。さらに、数十年前と周囲の状況は大きく変わっており、共通点が極めて少ない行為に乗っ取られていることがわかる。

痴呆性高齢者では最近の出来事を思い出しにくくなるとされている。この高齢者も、仕事をやめてから十数年が立っているが、最近の出来事を思い出しにくくなり、以前の記憶と現在とのつながりがあいまいになる中で、両者を明確に区別できなくなり、混じってしまったと考えられる。

行為の目的⑥「『家へ帰る』と言って外に出るが、庭で花を見て帰ってきていた」の起序

「家へ帰る」ことが「庭で花を見る」ことに乗っ取られていた。高齢者は、現在住んでいる家を自分の家だと思っていない。高齢者が「帰る」という家は、転居前の家であると考えられる。2つの行為はその時点で異なっており、共通するのは、現在の家から外に出るという点だけである。目的⑤と同様に、共通点が極めて少ない行為に乗っ取られていることがわかる。

目的⑤と同様に、この高齢者も、最近の出来事を思い出しにくくなり、以前の記憶と現在とのつながりがあいまいになる中で、両者を明確に区別できなくなり、混じってしまったと考えられる。

3.4. 状況の類似性・習慣変更との関係

(1) 状況の類似性が高く、習慣変更が大きいケースが3例、(2) 状況の類似性が高く、習慣変更が小さいケースが7例、(3) 状況の類似性が低く、習慣変更が大きいケースが14例、(4) 状況の類似性が低く、習慣変更が大きいケースが6例であった。(3) 状況の類似性が低く、習慣変更が大きいケースには、(3)-1 入院・入所などの生活内容の変更に伴うもの、(3)-2 痴呆進行後に対応できない種類の生活内容変更が加わったものが見られた。

過去の習慣によると推測される間違いについて、それぞれの起序を分析する。

(1) 状況の類似性が高く、習慣変更が大きいケース

事例(施23)は、2ヶ月前に入院、その後老人保健施設へ入所した。自宅から生活内容は大きく変化したと考えられるが、老人保健施設では売店へ行ったり、サークル活動へ参加したり、自分なりのすごし方で日々をすごし、物をしまいでなくしたりするものの、あまり大きな混乱もなく日常をおくっていた。入院・入所に伴う習慣変更が順調に進みつつあったと考えられる。

この中で、最近、さらに居室を変わり、このため物の置き場所が変わって「物の置き場所を変えたのに、以前と同じ場所を探す」間違いが起こり、同時に入浴の曜日が変わって「入浴の曜日が変わったのに、以前と同じ曜日に準備をしていた」間違いが起こった。間違いは、新たな生活内容の変更に伴っており、生活内容の変更が間違いを引き起こしたと考えられる。しかし、混乱が広がることはなく、間違いは生活内容の変更に直結する部分だけにとどまっていた。

間違い自体は、類似性の高い状況での乗っ取り型エラーであり、痴呆性高齢者に限らず、誰にでも起こりうる内容である。しかし、入院・入所から2ヶ月、老人保健施設での生活構築は未だ柔軟性に欠けるものであり、さらなる生活内容の変更に伴う脆弱性を有していたと考えられる。ここに居室が変わる事態が加わったため、間違いが起こった可能性が考えられる。

施23: 場所①「物の置き場所を変えたのに、以前と同じ場所を探した」
時間②「入浴日が変わったのに、以前と同じ曜日に準備をしていた」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
昭和50年頃 から	慢性関節リウマチで入院を繰り返す	
昭和64年頃 から	ホームヘルパーに家事を手伝ってもらう	何をしようとしたのか忘れることがある 水を止め忘れる
平成7年夏	慢性関節リウマチで入院、その後老人保健施設へ入所	身の回りのこと、ベッド周囲の片づけ等は自分でしていた ・売店やサークルに行く等、自分なりのすごし方で一日をすごす
平成7年秋	居室を変わる (入浴日が変わる)	物の置き場所を変えたのに、以前と同じ場所を探した 入浴日が変わったのに、以前と同じ曜日に準備していた

このような例は他に、見慣れない2Fへ行った時に「2Fのサークルへ出かけ、そのまま1Fの食堂から帰るように居室へ帰ろうとした」間違いが起こった事例(施15)、居室を変わり「居室を変えたのに、前と同じ道を通り、遠回りして便所へ行った」居室を変わ

ったのに、前の居室へ行ったら」間違いが起こった事例（在 13）が見られる。いずれも、新しい生活構築の途上において、さらに生活内容の変更が加わり、間違いを起こしている。しかし、混乱が広がることはなく、間違いが生活内容の変更に直結する部分だけにとどまっているのが特徴的である。

施 15：場所②「2Fのサークルに出かけ、1Fの食堂から帰るように居室へ帰ろうとした」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
平成6年春	老人保健施設デイケアに通うようになる	
平成7年夏	老人保健施設に入所。	<ul style="list-style-type: none"> 身の回りのこと、ベッド周囲の片づけ等は自分でしていた 当初、居室の場所が覚えられなかった 1日のスケジュールは、職員が声をかけ誘導していた 毎日、1F食堂で洗濯物たたくをし、一緒にしている他の高齢者と知り合いになる
平成7年秋		サークルに出かけ、1Fの食堂から帰るように居室へ帰ろうとした

在 13：場所⑤「居室を変ったのに、前と同じ道を通り、速回りで便所へ行ったら」
場所⑥「居室を変ったのに、前の居室へ行ったら」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
昭和30年	結婚。現在の家へ住むようになる	
平成4年頃	肺炎腫で入院を繰り返す	<ul style="list-style-type: none"> 一人で外出しなくなった 家の中で掃除、洗濯、簡単な食事の支度等をしていた 入浴が一部介助になった
平成7年夏	肺炎で入院	<ul style="list-style-type: none"> 介護者が毎日、病院へ通っており、介護者の姿が見えないと、探し回っていた 夜中に片づけ等を始めた 季節を間違えた 「お茶碗を盗られた」と言っていたが、探すと見つかった 便所へ行くと、道に迷い病室に帰って来られなかった
平成7年秋	退院（居室を便所に近くした）	<ul style="list-style-type: none"> 家事はしなくなった。身の回りや簡単な片づけ等はしている ベッドに横になっていることが多い （入院して始まった間違いは退院後、なくなった）
		居室を変ったのに、前と同じ道を通り、速回りをして便所へ行ったら
		居室を変ったのに、前の居室へ行ったら

(2) 状況の類似性が高く、習慣変更が小さいケース

事例（施 1）は施設入所から1年が経ち、入所前にいた併設の病院へ通ったり、趣味の手芸を続けたりして、大きな混乱もなく日々をおくっていた。この中で荷物が増え「物の置き場所を変えたのに、以前と同じ場所を探した」間違いが起こった。特に大きなきっかけはなく間違いが起こっており、これまでから繰り返し行ってきた日常的な行為が無意識のうちに、過去の習慣に乗っ取られていた。しかし、混乱が広がることはなく、一定の間違いの範囲にとどまっている。

間違いの内容は、類似性が高い状況での乗っ取り型エラーであり、痴呆性高齢者に限らず、誰にでも起こりうるものである。痴呆性高齢者では、最近の出来事に関する記憶が障害されやすく、以前の出来事と現在とのつながりがあいまいになることで、さらにエラーが起こりやすい状態にあると考えられる。

施 1：場所①「物の置き場所を変えたのに、以前と同じ場所を探した」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
平成4年春	脳梗塞で病院へ入院	<ul style="list-style-type: none"> 夜に騒ぐ 「物を盗られた」と言う 虫が置っているなど、ない物が見える
平成4年秋	転院	<ul style="list-style-type: none"> 身の回りのこと、ベッド周囲の片づけは自分でしている 物をしまい込んでなくす 電話がかけられない 同じ話を繰り返す （前院で始まった間違いはなくなった）
平成6年秋	併設の老人保健施設へ入所	併設病院へ通いながら、手芸・友人関係などを継続する老人保健施設の他の高齢者・スタッフが以前から知っている者が多く、生活範囲・交友関係を広げていく
平成7年秋	（荷物が増えていく）	物の置き場所を変えたのに、以前と同じ場所を探した

このような例は他に、「物の置き場所を変えたのに、以前と同じ場所を探した」事例（在 12、施 9）、「主治医を、以前のかかり付け医の名前で呼んだ」事例（施 9）、「日曜日に平日と同じように老人クラブへ出かけた」事例（在 6）、「食堂からリハビリ室へ行くつもりが、そのまま居室へ帰ってしまった」事例（施 11）、「食堂から便所へ行くつもりだったのに、そのまま居室に帰って寝ってしまった」事例（施 28）、「デイサービスがない曜日にも行く用意をしている」事例（在 17）が見られる。

いずれも特に大きなきっかけなく間違いが起こっているが、混乱が広がることはなく、一定の間違いの範囲にとどまっているのが特徴的である。

施設 9: 場所①「物の置き場所を変えたのに、以前と同じ場所を探した」

人①「主治医を、以前のかかり付け医の名前で呼んだ」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
昭和40年頃	変形性股関節症で医者にかかるようになる (かかり付け医ができる)	杖をつくようになる
昭和60年	歩行困難になり病院へ入院 (主治医が変わる)	車いすを使うようになる
平成元年秋	転院 (主治医が変わる)	身の回りのこと、ベッド周囲の片づけは自分でしている
平成6年春	併設の老人保健施設へ入所 (主治医が変わる)	併設病院へ通いながらリハビリ、友人関係などを継続する 老人保健施設の他の高齢者・スタッフも以前から知っている者が多く、生活範囲・交友関係を広げていく 車いすと杖を併用する
平成7年秋		杖を忘れることがある
		物の置き場所を変えたのに、以前と同じ場所を探した
		主治医を、以前のかかり付け医の名前で呼んだ

施設 11: 行為の目的①「食堂からリハビリへ行くつもりが、そのまま居室へ帰ってしまった」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
平成4年夏	独居。脱水症状で倒れているところを発見されて入院	
平成4年秋	転院	
平成6年春	併設の老人保健施設入所。	
平成6年秋	他の老人保健施設入所へ移る。	身の回りのことはしている。 普段使う物は全てベッドの上に掛けて、寝たまま手が届く位置に置いていた 喫煙所へタバコを吸いに行ったり、サークルに出たり出なかりして、自分のすごし方ですごしている。腰痛のためリハビリへ通っていた
平成7年秋		当初、併設病院へ来て、道に迷ったことがある 持って来なかった物を、帰って帰ろうとして探す 日にちを間違える 同じ話を繰り返すことがある 水を止め忘れる 同じ服を着続ける
		サークルの時間が変わったのに、以前と同じ時間に出かけた
		食堂からリハビリへ行くつもりが、そのまま居室へ帰ってしまった

施設 28: 行為の目的④「食堂から便所へ行くつもりだったのに、…居室へ帰って寝ってしまった」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
平成2年夏	老人保健施設へ3ヶ月入所退所後、老人保健施設デイケアへ通う	退院後、ベッド横にポータブルトイレを置き、日中は老人室で過ごす。デイケアがない日は、ホームヘルパーが来ていた着替え、入浴は介助であった
平成3年春	糖尿病で一時期入院 病院から老人保健施設へ入所するが、糖尿病などのために何度も再入院する	同じ話を繰り返す 季節を間違える 孫の顔がわからない ポータブルトイレを使ったことを忘れ、何度もポータブルトイレを使うことを繰り返す
平成6年春	自宅退院するも、1ヶ月後病院へ預かり入院。病院から、老人保健施設へ入所	日常生活に必要な範囲は、車椅子で自由に移動し、話所へ来たたり、外をながめたりして、一日をすごしていた 1日のスケジュールは職員が声をかけていた トイレ利用に介助が必要であったため、職員がトイレへ誘導していた
平成7年		(便所へ誘導している時、職員が他のことをしている間に)食堂から便所へ行くつもりだったのに、…居室へ帰って寝ってしまった

在 6: 時間①「日曜日に、平日と同じように老人クラブへ出かけた」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
昭和5年頃	現在の家に移り住む	
平成4年	手を骨折して、自宅療養。	ギブス固定中は着替え・入浴等を介助されていた。除去後も、入浴は一部介助になった。 介護者と一緒に通院しており、この後、一人では徒歩圏内しか外出しなくなった。 掃除、洗濯を介護者が行うようになった 治療後、身の回りのことはしており、老人クラブへ一人でやっている
平成7年		新しい靴を使おうと、持ち物を入れて準備して置いたのに、古い靴を持って来た
		日曜日に平日と同じように、老人クラブへ出かけた

在 12：場所①「物の置き場所を変えたのに、以前と同じ場所を探した」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
平成 3 年	独居。近所の介護者宅へ食事に通っていた	
平成 4 年	近所から不用心と話が出て、介護者宅の隣へ移り住む	掃除や片づけ等はしていた (食事の支度・買い物は介護者)
平成 6 年		外へ行くと迷子になる
平成 7 年		物の置き場所を変えたのに、以前と同じ場所を探した

在 17：時間④「デイサービスがない曜日にも行く用意をしている」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
昭和 25 年頃	生まれ故郷で結婚	
昭和 46 年	有料老人ホームへ入居。	・調理、掃除は施設の職員がしていた ・地域の教養講座に参加したり、買い物へ行ったりして自由にすごしていた ・他の入居者や職員とは衝突することが多かった
昭和 50 年	入院し、その後介護者宅で一時的療養する。	
平成 4 年夏	有料老人ホームの職員と衝突、退居。老人病院へ預り入院。	・病室（個室）に閉じこもったままで、ドアを開けて、外を通る人を眺めてすごしていた ・病院職員に批判的で、うまくいかなかった。友人もなかった ・失禁し、常時おむつになった
平成 4 年冬	介護者宅へ引き取られる	・当初はトイレへ誘導していた ・徐々に行けるようになった ・当初は介護者について回っていた。徐々に老人室で一人ですごせるようになった。 ・当初は一人で外出できなかった ・徐々に、自宅前の公園へ一人で散歩に出るようになった。公園で隣に住む高齢者と知り合いになり、行き来するようになった
平成 6 年	デイサービスへ週 1 回行くようになる	・季節を間違える ・同じ話を繰り返す ・当初は「物を盗られた」と度々言っていた ・当初は「ここは熱海の家（有料老人ホーム）だ」と言っていた
平成 7 年		・当初は、デイサービスから帰ってくるとデイサービスに行ったことを忘れていた ・家具の配置が変わって、家具にぶつかった
		デイサービスがない曜日にも、行く用意をしている

(3) 状況の類似性が低く、習慣変更が大きいケース

(3)-1. 入院・転居などに伴う生活内容の変更

事例（在 4）は、入院・入所・再び自宅へとめまぐるしく生活内容が変わる中で、家の中を歩き回り、昼夜問わず寝たり起きたりするようになっていく。家族の統柄を間違え、服を着る順序を間違えるなど、様々な種類の間違いが頻発する中で、多くの過去の習慣によると推測される間違いが起こっている。

生活内容の変化に充分対応できていないことは明らかであり、混乱が続く中で、過去に構築されていた習慣に依拠せざるを得なくなり、過去の習慣による乗っ取り型のエラーが生じていると考えられる。ただし、参照されている過去の習慣は、混乱の原因となった生活内容の変化（入院・入所）直前のものではない。入院・入所前の在宅生活よりもずっと以前の、十数年から数十年前のものである。高齢者が想定する様々な事柄に関する枠組みが、ずっと以前のものへ後退していることがわかる。

このような例は他に、入院・自宅の改築の中で痴呆症状（間違い）が見られるようになる事例（在 11）、転居後に痴呆症状（間違い）が見られるようになった事例（在 1）、入院・転院・施設入所の中で痴呆症状（間違い）が見られるようになった事例（施 22）がある。痴呆進行に伴って混乱は広がり、現在起こっている間違いの内容は、いずれも十数年から数十年さかのぼったものである。

一方、痴呆発症・進行は、そのために介護者宅への同居（転居）・施設利用などを必要とし、痴呆性高齢者の混乱をまねいている。痴呆が進み入院を繰り返した後、介護者宅へ同居し、「家に帰る」と言うようになった事例（在 2）がある。痴呆進行後、介護者宅へ同居、施設入所し、施設の高齢者を職場の同僚だと言っている事例（施 17）、痴呆発症後、介護者宅へ同居しデイケアへ通うようになり、デイケアを「学校に行った」と言っている事例（在 18）がある。

「家に帰る」と言う家は、1年前のものであるが、「職場の同僚だ」と言う職場は、十数年前のものであり、「学校に行った」と言う学校は数十年前のものである。現在の施設入所、デイケア利用での経験が、最近までの生活の延長線上に位置付けられていないのは明らかである。さらに、これらの間違いは、施設入所、デイケア利用前に起こっていた各種の間違いに比べて、状況の類似性がかなり低いものである。「職場」「学校」というやや無理のある設定は、高齢者が混乱の中で精神的安定を得るため行ったものである可能性が推測される。痴呆発症・進行によって、生活内容の変更への柔軟な対応が難しくなっているところへ、取り扱いきれない生活内容の変更が加わったために、過去と現在が異なった文脈でつながり、歪んだ形で新しい生活構築が始められてしまったのである。現在の日常生活に支障をきたさず、過去への認識を変えないように、新しい生活像を修正していくためには、周囲の配慮された働きかけと、安定した時間を要することが推測される。

在 4：場所⑩『家に帰る』と言い、結婚前（数十年前）に住んでいた家へ行こうとした
 時間⑧「自営業を手伝わなくなって…、机の上の伝票を居室へ持って行ってしまおう」
 人④「介護者（長男の嫁）を『看護婦さん』と呼んでいる」
 行為の対象④「洗濯する衣類を出しておいたのに、…衣類と一緒にダンスへ入れてしまった」
 行為の対象⑤「デジタル時計のボタンを押して、『ラジオがならない』と言った」
 行為の対象⑥「…鍋に物を入れておくと、他の容器へ移してしまう」

の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
昭和 16 年頃	結婚。現在の自宅へ住む	
昭和 37 年頃	家内工業を始める	
昭和 52 年	家内工業から引退する	
平成元年頃		<ul style="list-style-type: none"> 出歩くのが好きであったが、老人会や買い物などに行かなくなる。老人室でぼんやりしていた 同じ話を繰り返す 傘を杖代わりにしていたがよく忘れてきていた
平成 3 年頃		<ul style="list-style-type: none"> 化粧をしなくなる。銭湯は介護者が促せば、一人で行っていた 銭湯で、洗面器を間違えて持って帰ってくる 電気のコードを抜いて回る
平成 5 年頃		<ul style="list-style-type: none"> 便所を汚す 汚れ物をしまひ込む ポータブルトイレをゴミ箱にしてしまう
平成 7 年春	老人病院へ預かり入院	<ul style="list-style-type: none"> 家族が 1 日おきに通っていた 1 日のスケジュールは職員が声をかけ、誘導していた 家族の続柄を間違える 当初、廊下で寝ていることが多かった
平成 7 年夏	病院から老人保健施設へ入所。2 ヶ月で自宅へ退所	<ul style="list-style-type: none"> 居室で過ごすことはなく、ずっと食堂で他の高齢者と一緒にすごしていた。 季節を間違える 年齢を尋ねると 40 歳位だと言う
平成 7 年秋	老人保健施設デイケアへ通っている	<ul style="list-style-type: none"> 家の中を歩き回り、昼夜問わず寝たり起きたりしている 敷きふとんをかぶったり、毛布だけで寝ていたりする 服を着る順序を間違える

「家へ帰る」と言い、結婚前に住んでいた家へ行こうとした

自営業を手伝わなくなって…机の上の伝票を居室へ持って行ってしまおう

介護者（長男の嫁）を「看護婦さん」と呼んでいる

洗濯する衣類を出して置いたのに、…ダンスへ入れてしまった

デジタル時計のボタンを押して、「ラジオがならない」と言った

…鍋に物を入れておくと、他の容器に移してしまう

在 11：時間⑨「夜中でも、目が覚めると食事をする（朝食のつもり）」
 人⑧「数十年前になくなっていく家族を探した」
 行為の対象⑦「便所を改装後、洋式便器の隣りにある男性用便器に腰かけた」
 行為の対象⑧「台所を改装した後、ふきんをコンロに乗せて火をつけた」
 行為の目的⑥『家に帰る』と言って外に出るが、庭で花を見て帰ってきていた』の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
昭和 25 年	旅館を始める	
昭和 44 年	旅館に住んでいたが、住まいを別にする	家事は、住み込みの家婦がしていた
平成元年	変形性膝関節症の手術のため入院	<ul style="list-style-type: none"> 入院までは店の仕事を全て管理していたが、入院中に店の内装などが変わってしまい、退院後はあまり口を出さなくなった 自宅の改装に反対していたが、入院中から意見がころころと変わるようになった 「帰りたい」と無理に早く退院してきた
平成 3 年	再手術のため入院。退職。自宅を全面改装する	<ul style="list-style-type: none"> 退院後、これまで介護者（長男の嫁）に厳しかったが「すいません」と言うようになった。しかし、気に入らないことがあると家を出て、地続きにある次女や次男宅へ行っていた。3 件の家を転々とする生活であった 孫の名前を間違える 洗剤をつけずに皿を洗う リモコンの操作ができない
平成 5 年	週 5 日老人保健施設デイケアへ行くようになる	<ul style="list-style-type: none"> 化粧をしなくなった 買い物へ行かなくなった 誰かが入ってくると、サッパリと棒をさしていることがあった 電話がかけられない 服を着る順番を間違える 家族の続柄を間違える
平成 7 年		<ul style="list-style-type: none"> 「自分の物ではない」と老人室のダンスに入っている物を全て出してしまったことがあった 水洗便所を流し忘れる

夜中でも目が覚めると食事をする（朝食のつもり）

数十年前に亡くなっている家族を探した

便所を改装後、洋式便器の隣りにある男性用便器に腰かけた

台所を改装後、ふきんをコンロに乗せて火をつけた

「家に帰る」と外に出るが、庭で花を見て帰ってきていた

在1：場所⑩「転居後、数年たつのに、便所を探して外に出た」
 行為の対象⑨「保温できる炊飯器・炊飯が終わるとごはんを他の容器へ移してしまう」
 行為の対象⑩「電気のコードを腰に絡めた」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
平成元年	老夫婦が介護者宅へ同居する	<ul style="list-style-type: none"> それまでは介護者が老夫婦宅へ通って買い物等をしていた。 同居後、家事は介護者がするようになった。身の回りのことや片づけ等は自分でしていた 日中はテレビを見ていることが多かった
平成3年	夫死亡 週3回デイサービスに通うようになる	<ul style="list-style-type: none"> デイサービスは楽しみにしている。デイサービスがない日は、居間で介護者とすごしている
平成5年	月に1度、ショートステイを利用するようになる	<ul style="list-style-type: none"> 初回利用時は、「帰る」と言い荷物をまとめたこともあったがその後は、特に問題なく、逆に元気がなって家に帰ってくる
平成6年		<ul style="list-style-type: none"> 「物を盗られた」と言うようになった 温風ヒーターの操作が覚えられなかった 汚れ物をしまいだむ 季節や天候に応じた服が着られない
平成7年		<ul style="list-style-type: none"> 熱くなっている温風ヒーターに腰かける 服の順序や表裏を間違える トイレットペーパーが使えなくなる 洗面所ではなく、流しで顔を洗うようになる 開き戸を引き戸のように、開けようとする 水を止め忘れる
平成7年		<ul style="list-style-type: none"> テレビに話しかける 皿をかじったり、フォークやスプーンを捨てたりする ふとんをたたんで、マットレスをかぶって寝ていたことがあった ズボンの片方に両足を入れていた 下着を下ろさずに、便器に腰かける 水洗便所で水を流し忘れる 便所の鍵をかけて、開けられなくなる 掃き出しから転落する

転居後数年たつのに、便所を探して外に出た

保温できる炊飯器・炊飯が終わるとごはんを他の容器へ移してしまう

電気のコードを腰に絡めた

施22：行為の目的⑫「必要な物を取りに、居室へ戻ったのに、そのまま寝てしまった」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
平成6年	脳性小児マヒで足部の変形が強くなり、入院、手術	<ul style="list-style-type: none"> 自宅では、入浴一部介助、それ以外の身の回り、簡単な片づけ等はしていた 歩いていたが、手術後、車椅子・オムツ使用になる
平成7年春	転院	<ul style="list-style-type: none"> 全身状態が悪くなり、寝たきりに近い生活であった
平成7年夏	老人保健施設入所	<ul style="list-style-type: none"> 人前に出ることを嫌がり、居室に閉じこもりがちで、よく職員と一緒に外へ散歩に出ている 同室者が親切で、話をしたり必要に応じて食堂や居室へ車椅子を押してくれていた 居室や食堂、便所の場所はわがっていたが、便所介助が必要のため、職員が誘導していた
平成7年秋		<p>必要な物を取りに、居室へ戻ったのに、そのまま寝てしまった</p>

在2：場所⑩「転居して『家に帰る』と言うようになった」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
昭和15年頃	結婚。	
平成3年頃から	多発性脳梗塞で入退院を繰り返す	<ul style="list-style-type: none"> 杖をついて家の中を歩き回りよく転倒していた。疲れると家の中のどこでも座り込み、介護者が付いてまわって対応していた 「列車が出るから」と食事を食べないことがあった 「あちこちで失禁し徐々にオムツになった。入浴、着替えなど、身の回りの多くを介助していた
平成6年	多発性脳梗塞で入院	<ul style="list-style-type: none"> 夜中に起き出して、家の中を歩き回った
平成7年	介護者宅へ退院	<ul style="list-style-type: none"> 家の中を歩き回ることが続いている 食事を食べなくなり、介助するようになった

転居して「家に帰る」と言うようになった

施 17：人の「十数年前に旅館を経営していた。施設で、他の高齢者を従業員だと話している」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
昭和 38 年	旅館を始める	
昭和 58 年	旅館の仕事をやめる	
平成 5 年		<ul style="list-style-type: none"> 物をしまい込んでなくす ガスを消し忘れる タンスの出し入れができなくなる
平成 7 年春	次女が入院。長女宅へ同居	<ul style="list-style-type: none"> 長女について回り、姿が見えないと外へ探しに出た 「一人では寝られない」と言い、廊下で寝ていた
平成 7 年夏	老人保健施設へ入所	<ul style="list-style-type: none"> 日中は食堂で過ごし、するところのつじつまは合っていないがリーダー的な存在で、場を仕切っている 1日のスケジュールは、職員が声をかけていた
		<p>…旅館を経営していた。施設で、他の高齢者を従業員だと話している</p>

在 18：時間⑦「…学校の用務員をしていた。デイケアのことを『学校へ行った』と話している」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
戦後	夫が戦死。家族で学校に住み込み、用務員をする	
昭和 63 年		<ul style="list-style-type: none"> 同居。買い物等は介護者が定期的に通ってしていた。近所の人が見てくれていた 同じ話を繰り返す 同じ物を買ってくる 物をしまい込んでなくす
平成 2 年		<ul style="list-style-type: none"> よく外を歩き回っていた 季節や天候に応じた服が着られない 同じ服を着続ける 汚れ物をしまい込む
平成 6 年	同居が難しいと民生委員から連絡があり、介護者宅へ引き取られる	<ul style="list-style-type: none"> 毎日、介護者と散歩をしている 家にいる時は洗濯物を広げたりたたんだり、家の中を歩き回ったりを繰り返している 入浴、着替えが一部介助 近所で、知り合いとそうでない人の区別がつかない 水洗便所を流さない 一度、一人で外へ出て帰ってこられなかった
平成 7 年	老人保健施設デイケアへ行くようになった	<ul style="list-style-type: none"> 家族の続柄を間違える 年齢を尋ねると、40歳頃だと言う 夜中に起き出して、水風呂に入っていたことがあった
		<p>…学校の用務員をしていた。デイケアを「学校へ行った」と話している</p>

(3)-2.痴呆進行後の生活内容の変更

事例（施 4）は、1年前に老人保健施設へ入所し、当初、食堂の席を間違えていたが、徐々に覚えたばかりであった。その時に食堂の席を変ったために、以前と同じ場所へ座ってしまった。このような例は他に、半年前に老人保健施設へ入所し、当初、居室を間違えていたが、徐々に覚えたばかりの時に、居室を変わり、以前と同じ居室へ行った事例（施 14）がある。

両者共に、食堂の席や居室に関する新しい想定の手組みができたばかりであり、変更に対応できる柔軟性を持ち合わせていなかった。ここへ変更が加わったために、いわば当然の結果として間違いが起こったと考えられるのである。

また、鏡を見て話をしたり、食べ物以外の物を口にするなど、類似性の低い状況で間違いが起こっている中で、施設入所し、施設職員を家族の名前で呼んでいる事例（施 16）がある。このような例は他に、便所以外で排泄したり、食べ物以外の物を口にするなど、類似性の低い状況で間違いが起こっている中で、施設入所し便所へ誘導されることになり、便所へ行くつもりが（職員が他のことに手を取られている間に）居室へ帰って寝ってしまった事例（施 27）がある。

両者共に、痴呆進行によって、様々な事柄に対応する手組みが粗雑になっており、初めて会う施設職員や、経験のない施設のプログラムに柔軟に対応できるだけの受け皿を持ち合わせていなかった。ここへより高い精度を必要とする生活内容の変更が加わったために、いわば当然の結果として間違いが起こったと考えられるのである。

施 4：場③「食堂の席が変わったのに、以前と同じ場所に座った」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
平成 2 年	脳梗塞で入院。3ヶ月で退院	<ul style="list-style-type: none"> 入浴、着替えが一部介助になる 片づけ等は介護者がしていた 同じ話を繰り返す 物をしまい込んでなくす 水を止め忘れる
平成 4 年	歩行困難になり、老人保健施設へ入所。半年で退所し、その後老人保健施設デイケアへ通う	<ul style="list-style-type: none"> 老人保健施設内では手を引いて杖歩行。自宅ではつたい歩き トイレへ介護者が誘導していた 家族の続柄を間違える 季節を間違える 食事食べた事を忘れる
平成 6 年	介護者が入院し、老人保健施設へ入所。	<ul style="list-style-type: none"> 1日のスケジュールは、職員が声をかけていた 居室の場所や食堂の席は、徐々に覚えた 居室で寝ていることが多く、サークル等に誘われると参加する 食堂で隣の席になった高齢者と、気さくに話をするが、その場限りのことが多い ベッド周囲の片づけはしていた 当初、居室を間違えた 食堂の席を度々、間違えた 便所以外で排泄することがあった 汚れ物をしまい込む
平成 7 年	(食堂の席を変わる)	<p>食堂の席が変わったのに、以前と同じ場所に座った</p>

施 14 場所⑦「居室を変ったのに、以前と同じ居室へ行った」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
平成6年夏	老人保健施設へ入所	・当初、居室を間違えた ・当初、食堂の席を間違えた
平成6年秋	心不全で、老人保健施設から入院	・夜中に騒ぐ
平成6年冬	老人保健施設へ再入所	・服を着る順序、左右を間違える ・居室を間違える ・食堂の席を間違える ・ダンスの中の物を、全て出してしまふ ・他人の物を、持って行ってしまふ ・夜中に騒ぐことはなくなつた
平成7年春	他の老人保健施設へ転所	・食堂や廊下で、老人車を腰かけて、周囲をながめていることが多い。サークル等には誘われても内容には参加せず、周りにいて、会話にだけ参加していた ・当初、居室を間違えていたが、徐々に覚えて一人で居室へ帰れるようになった。
平成7年秋	同居者のダンスを開けてしまったため、衝突し、居室を変わる	居室を変ったのに、以前と同じ居室へ行った

施 16：人⑥「施設の職員を家族の名前で呼んでいる」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
平成3年		・電話がかけられない ・同じ物を買ってくる
平成5年	友達付き合いをしなくなり、介護者が毎週日曜に温泉に連れて行っていた	・服を何枚も重ねて着る ・水洗便所の水を流し忘れる
平成6年	・昼夜問わず、家の中を歩き回っていたが、徐々に歩行が不安定になり、あまり歩かなくなった ・歩きにくくなってからは、食堂で介護者とすごしていた。日常生活はほぼ全介助、オムツ使用、箸やスプーンが使えない	・一人で外へ出ると帰ってこられなくなる ・ダンスの中の物を全部出してしまふ ・鏡を見て話をする
平成7年	老人保健施設へ入所	・食べ物以外の物を、口に入れる
		施設の職員を家族の名前で呼んでいる

施 27：行為の目的④「食堂から便所へ行くつもりだったのに、…居室へ帰って寝てしまった」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
昭和62年頃		・洗濯機が使えない ・物をしまい込んでなくす ・同じ物を買ってくる ・電話がかけられない ・お米をといで、水を捨て、中身だけを炊飯器に入れる ・ガスを消し忘れる ・ダンスの出し入れができなくなる ・石油ストーブを消し忘れる ・ほうきで同じところばかりをばく ・入浴中、同じところばかり洗う ・遠出すると帰って来られない
昭和63年	鎖骨骨折、自宅療養	着替え、入浴を介助するようになった
平成2年		・テレビに話しかける ・テレビを消し忘れる ・ふとんを斜めにひいたり、ひく順序を間違える ・便器を見て「ここで正しいのか」と聞いたことがあった
平成3年	老人保健施設デイケアへ通うようになる	
平成6年		・浴室の折れ戸が開けられない ・昼夜を問わず、外へ出ていく
平成7年	家の改築のため、老人保健施設へ入所	・当初「帰ります」と言い、歩き回ることが続いていたが、食堂の席が近くであった高齢者と親しくなり、一緒にすごすようになった ・1日のスケジュールは職員が声をかけている。便所の場所がわからないため、職員が誘導している (職員が他の高齢者と一緒に便所へ誘導していると) 食堂から便所へ行くつもりだったのに、…居室へ帰って寝てしまった

このような例は他に、同じ物を何度も買ってきたり、服を何枚も重ねて着るなどの間違いが起こっている中で、「置き場所を変えたのに、以前と同じ場所を探した」事例(在9)、

持ってきた物を忘れて帰ったり、自分の服と他人の服を間違えるなどの間違いが起こっている中で「手芸サークルで新しい作品を始めたのに、以前の作品を探していた」事例（施 12）がある。食べ物以外の物を口にするなどの間違いが起こっている中で、「食堂へ行くつもり…『仕事へ行く』と言いだし、食堂を通り過ぎた」事例（施 35）がある。

在 9：場所①「物の置き場所を変えたのに、以前と同じ場所を探した」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
昭和 30 年頃	現在の自宅へ移り住んだ	
平成 2 年	家を一部改築したが、老人室は変わっていない	電話番号を間違える
平成 5 年		<ul style="list-style-type: none"> ・ガスを消し忘れる ・食べられない物を作る ・食事の支度は介護者がするようになる ・友達と外出しなくなる ・ミシンかけや和裁をしなくなる ・ダンスの出し入れをしなくなる
平成 7 年		<ul style="list-style-type: none"> ・同じ物を何度も買ってくる ・靴下が左右違う ・服を何枚も重ねて着る
物の置き場所を変えたのに、以前と同じ場所を探した		

施 12：行為の対象②「手芸サークルで新しい作品を始めたのに、以前の作品を探していた」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
平成 4 年	脳梗塞で入院。8ヶ月で退院	<ul style="list-style-type: none"> ・入浴が一部介助になる ・家事、片づけ等は介護者がしていた
平成 5 年秋	老人保健施設デイケアへ通うようになる	<ul style="list-style-type: none"> ・デイケアでは車椅子。自宅ではつたい歩き ・隣りに座った高齢者と気さくに話をするが、その場限りのことが多い ・日にちを間違える ・物をしまい込んでなくす ・同居していない親族の続柄を間違える ・同じ話を繰り返す
平成 5 年冬から	1ヶ月に1度ずつ、老人保健施設のショートステイを利用する	<ul style="list-style-type: none"> ・汚れ物をしまい込む ・ボータブルトイレをゴミ箱にしよう ・手提げ鞆を、持ち帰るのを忘れる ・他の高齢者の服と自分の服を間違える
平成 7 年		手芸サークルで新しい作品を始めたのに、以前の作品を探していた

施 35：行為の目的⑤「食堂に行くつもり…、『仕事に行く』と言いだし、食堂を通り過ぎた」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
平成 5 年夏	心不全で一時入院	<ul style="list-style-type: none"> ・入院までずっと畑仕事をしてい ・退院後、日常生活のほぼ全てに介助が必要になり、外へ出ることもなくなった。 ・急に怒り出して手をあげるこ ・家の中を歩き、物にぶつかつたり、転倒を繰り返していた ・食べ物以外の物を口にする ・便器に手を入れる
平成 5 年秋	週 5 日老人保健施設デイケアを利用するようになる	デイケアでは施設の中を歩いたり、ぼんやりと立って周囲をながめていることが多い。急に怒り出すため、他の高齢者と衝突することもあった
平成 6 年春	心不全で再入院	
平成 6 年秋	病院から老人保健施設へ入所	
平成 7 年		食堂へ行くつもり…『仕事に行く』と言いだし、食堂を通り過ぎた

(4) 状況の類似性が低く、習慣変更が小さいケース

入院・入所のような大きな生活内容の変更がなくても、痴呆発症・進行と、それに伴う様々な生活（行為）内容の変更によって、間違いが生じているケースがある。

事例（在 16）は、結婚後数十年にわたり現在の家に住んでおり、改築してから二十年近くが経っている。3年前に同じ物を何度も買ってくるようになり、ガスを消し忘れるようになった。このため買いた物・食事の支度は介護者がするようになり、高齢者はこれまで続けてきた家事をしなくなった。つまり、痴呆発症によって、高齢者の生活内容が変わってしまったのである。さらに、高齢者はこれまで行ったこともなかったデイケアへ行くことになり、デイケアで介護者の名前を呼び続けた。調査時点で、高齢者は家族の続柄を間違えるようになり、荷物をまとめて「家に帰ります」と言うようになっていた。

「帰ります」と言う家は、結婚前（数十年前）に住んでいた家であり、さらに、家を改築する前（二十年前）に戻ったような行動が見られ、改築前に便所があった場所にある浴室で排泄し、改築前に倉庫があった場所にある家族の部屋から荷物を持ち出していた。この間に、入院・入所のような大きなきっかけがあったわけではない。痴呆発症・進行と、それに伴う様々な生活内容の変更があり、それらの相乗作用によって、間違いが起こったと考えられるのである。

在 16：場所⑧「改築後、数十年たっているが、以前便所があった場所にある浴室へ行ってしまふ」
 場所⑨「…以前倉庫があった場所にある家族の部屋へ入り、物を持って行ってしまふ」
 場所⑩「『家に帰る』と言い、結婚前（数十年前）に住んでいた家へ行こうとした」
 人③「…お金を持ち逃げされたことがあり、家に来る人を皆、泥棒よばわりする」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
昭和40年頃	夫死亡。介護者宅へ同居	家事は高齢者がしていた
昭和51年	自宅を改修	
平成4年		買い物、食事の支度などは、介護者がするようになる ・同じ物を何度も買ってくる ・鍋をこがす ・ガスを消し忘れる
平成5年	老人保健施設デイケアへ行くようになる	デイケアはあまり好きではなく当初は、介護者の名前を呼び続ていた ・同じ服を着続ける
平成7年		家では老人室で過ごし、小さな家具の位置を変えたり、ダンスの中の物を出したり、壁の壊れしているところを気にしたりしている。他の部屋に入ったり、荷物をまとめて「帰ります」と言うこともある ・家族の続柄を間違える ・季節を間違える ・ダンスの中の物を、全部出してしまふ ・水洗便所の水を流し忘れる

改築後、数十年たっているが、以前便所があった場所にある浴室へ行く
 ↓
 …以前倉庫があった場所にある家族の部屋へ入り、物を持っていく
 ↓
 「家に帰る」と言い、結婚前に住んでいた家へ行こうとする
 ↓
 …お金を持ち逃げされたことがあり、家に来る人を皆、泥棒よばわりする

また、自転車で出歩いていたが、徐々に遠くへ行けなくなり、自転車に乗れなくなってからは、今度はバスに乗って、以前にバスで出かけていた先へ行くようになった事例（在 2）がある。行き先は、自転車に乗っていた間は近所のパチンコ屋であったが、バスに乗ってからは3年前までしていた職業の得意先になった。この間に、一時入院しているが、すぐに「帰りたい」と言って帰ってきている。他に大きなきっかけがあったわけではない。痴呆進行とそれに伴う生活内容の変更によって、間違いが起こったと考えられる。

以上のような例は他に、痴呆進行などによって「『家に帰る』と言い、数十年前に住んでいた住所を言う」事例（在 14）、「長女宅から三女宅へ行った時、三女と長女を間違えた」などの事例（在 10）、「孫を自分の子供と間違えている」などの事例（在 5）、「美容院へ行くつもりだったのに、パン屋でパンを買って帰ってきた」事例（在 3）がある。

在 2：時間⑥「退職してから数年たつが、以前の仕事を先に出かけた」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
昭和20年	結婚。現在の家へ移り住む大工をしていた	
平成4年	脳梗塞で一時入院。退職	
平成5年		自転車で出歩いて、粗大ゴミを拾って来ていた。家の中をこまごまと片づけて回っていた ・自転車で出かけて、帰って来られなくなる ・ストーブを消し忘れる
平成6年		・タバコをやめる ・自転車で5分のところにあるパチンコ屋に毎日通っていた ・孫の顔がわからなくなる ・服を着る順序を間違える ・テレビのON/OFFができなくなった
平成7年春	病院に一時預かり入院	病院を歩き回り、外で見つかったこともあった。家族が面会に行ったところ、「帰る」と言い、そのまま一緒に帰ってきた
平成7年秋		・バスに乗って、昔の得意先に行くようになった。得意先の人とうまく相手をしてきている ・あちこちで失禁するため、オムツ使用になった 退職してから数年たつが、以前の仕事を先に出かけた

在 14：場所⑩「『家へ帰る』と言い、数十年前に住んでいた住所を言う」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
昭和45年頃	転居	
昭和52年頃から	脊椎すべり症、腎臓病などで入院を繰り返す。車椅子生活のために、家を改築する	車椅子、オムツ使用（腎臓病の為）となる。家の中を車椅子で自由に移動し、食事の支度や掃除などをしていく ・炊きあがったご飯を他の容器へ移し、何度もご飯を炊くようになった
昭和58年	家政婦が来るようになる	日中は食堂で、家政婦と一緒にすごしていた。食事の支度や掃除は家政婦がするようになった
平成2年	家政婦が都合で辞める。その後、ホームヘルパーが合わずに、次々と変わる	家の中を、車椅子で絶えず動き回り、目につく物を集めて、車椅子に乗せていた ・ポットで火傷をする ・夜中に、家の中を動き回る
平成6年	介護者が退職。家にいるようになる	車椅子で動き回りは続いているが、通りがかりに食堂で介護者と話をしている ・掃き出しから落ちる ・家具にぶつかる
平成7年		「家へ帰る」と言い、数十年前に住んでいた住所を言う

在 10：時間⑤「老人クラブをやめてしばらくたつが、その時間に出かけようとする」
 人②「長女宅から三女宅へ行った時、三女と長女を間違えた」
 行為の対象③「鍵が…かける方向が縦横逆になった。鍵をかけようとして開けてしまった」
 行為の対象④「洗濯する衣類を出しておいたのに、…衣類と一緒にダンスへ入れてしまった」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
戦後	結婚。その後何度か転居	
平成2年春	夫死亡。独居になる	夫が入院中に病院へ通っていた ・病院へたどりつけず、他の病院へ行ったことがあった ・病院の中で道に迷った
平成2年夏	介護者宅へ同居	・家事は介護者がしている。老人会などもやめ、外に出ることがなくなり、老人室でぼんやりしてすごしていた ・日中は一人であり、介護者（長女）が泊まりで留守にする時は三女宅へ行っていた ・家に誰か来ることを嫌がり、誰か入ってくると言って、鍵を閉めて回る。老人室から出ないこともあった。逆に三女宅では、一人で外に出て、帰って来られなくなったこともあった
平成7年		老人クラブをやめてしばらくたつが時間になると、出かけようとする 長女宅から三女宅へ行った時、三女を長女と間違えた 鍵が…縦横逆になった。鍵をかけようとして開けてしまった 洗濯する衣類を出しておいたのに、…一緒にダンスへ入れてしまった

在 3：行為の目的③「美容院へ行くつもりだったのに、パン屋でパンを買って帰ってきた」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
昭和18年	結婚。現在の家へ移り住む。	
平成3年		徐々に介護者が家事をするようになる ・同じ物を何度も買ってくる ・風呂の空だきがあった ・服を着る順序を間違える
平成5年	老人保健施設デイケアへ通うようになる	・同居していない親族の顔がわからない ・近く美容院や商店などには、一人で行っていた（お金は後で介護者が払いに行っていた）
平成7年		美容院へ行くつもりだったのに、パン屋でパンを買って帰ってきた

在 5：時間⑩「…家政婦の仕事をしていた。現在の自宅を仕事に来ている家だと話している」
 人⑤「孫を、自分の子供と間違えている」の背景

	経年的な生活内容の変化	高齢者の対応・間違い
昭和50年頃	夫が定年退職後、離婚。独居となる	
平成3年頃		介護者が毎日、食事をつくって届けていた ・同じ話を繰り返す ・同じ物を買ってくる
平成5年	家で倒れているところを民生委員が見つける。介護者宅へ同居する	「家へ帰る」と言い、繰り返し外へ出て行こうとした。日中は居間で介護者、3歳の孫と一緒にすごしていた ・一度外へ出て、帰って来られなかった ・便所の場所を尋ねる ・荷物を入れておくと「なぜ私の物がこんな所に入っているのか」と全部出してしまった
平成6年	介護者家族と一緒に転居 病院で4ヶ月預かり入院	・退院後、週半分を長男宅で、後の半分を介護者（長女）宅で過ごすようになる。草むしりや掃除などをするようになり、外へ出て行こうとすることはなくなった ・便所の場所を覚え、場所を尋ねることもなくなった
平成7年		…家政婦の仕事をしていた。家を仕事に来ている家だと話している 孫を自分の子供と間違えている

3.5.記憶障害の重症度別の傾向 - エラーを制御する環境

記憶障害の全ての段階（軽度から最重度）で、過去の習慣によると推測される間違いが起こっており、周囲の状況との関係が推測された。記憶障害の全ての段階について、エラーを制御する環境を検討する可能性があると考えられる。

記憶障害の重症度別の傾向をまとめ、エラーを制御する環境について考察する。

(1) 記憶障害の重症度別の傾向

間違いの起序を、記憶障害の重症度別にまとめると図 3.1 のとおりである。

記憶障害の重症度によって差が見られるのは、(Ⅱ) 変更後の経験、(Ⅲ) -1 変更後の出来事の現在へのつながり、両者の関係である。

軽度・中等度では(Ⅱ)と(Ⅲ)-1は一致している、つまり、変更後の経験が乏しいことがそのまま、現在において参照できる情報が少ないことにつながり、間違いが生じて

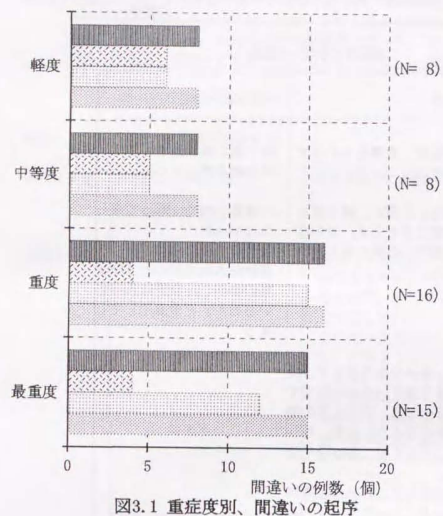


図3.1 重症度別、間違いの起序

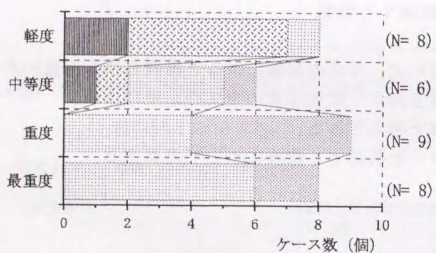
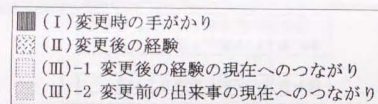
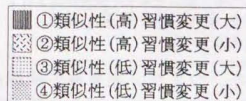


図3.2 重症度別、状況の類似性と習慣変更



いると考えられるのである。一方、軽度・最重度では(II)に比べて、(III)-1が大きくなっている。つまり、変更後の経験の影響は小さい(変更後の経験が充分蓄積されている)にもかかわらず、変更後に蓄積された情報が現在に正しい文脈でつながっていないために役に立たず、間違いが生じていると考えられるのである。これは、最近の出来事に関する記憶が障害され、以前の出来事と現在の関係が不正確になったことによる。軽度・中等度では、生活内容の変更直後であったり、変更後の状況における出来事が少なかったりすることが間違いを左右しており、軽度・最重度では、最近の出来事に関する記憶の問題が間違いを左右していることがわかる。

状況の類似性と習慣変更との関係を見ると、図3.2のとおりである。

軽度では生活内容の変更直後に、変更前のように行動してしまったり、特にきっかけはなく無意識のうちに過去の習慣がふと現れたりしていた。乗っ取り型のエラーによって間違いが広がることはなく、一定の範囲にとどまっていた。

一方、中等度以降は、類似性が低い各種の間違いが頻発する中で、乗っ取り型のエラーが起こっている。入院・入所などにより混乱が続く中で、過去に構築した習慣に依拠せざるを得なくなり、時間的に大ききさかのぼった習慣が現れたり、痴呆進行により、様々な事柄に対応する想定の様相が粗雑になりつつあるところへ、高い精度を要求する生活内容の変更が加わり、混乱を引き起こしていた。乗っ取り型のエラーは、現在と過去が異なった文脈でつながり、新しい生活構築が始められた事を示しており間違いを広げる脆弱性を有している。

間違いの種類を見ると、軽度・中等度では、人の名前のように対応が記号的で意味づけがなく、思い出す手がかりが少なかったり、今日の曜日のように意図的に手がかりを利用しなければ確認できないものに間違いが起こっていた。また、生活内容を変更していても、変更してからあまり日が経っていなかったり、曜日・時間帯を変更して継続しているように、変更前後で周囲の状況があまり変わっていないものに間違いが起こっていた。

一方、軽度・最重度では、家族の続柄のように、対応に意味があるものにも間違いが起こっており、昼夜のように、比較的利用しやすい手がかりが多いものにも間違いが起こっていた。さらに、ある生活内容をやめてしまったものや、生活内容を変更してから長期間たっており、周囲の状況が変化している中で間違いが起こっていた。

軽度・中等度では、現在の状況を確認したり、過去の出来事を想起し参照するための有効な手がかりに乏しいことが、間違いに影響していると考えられる。軽度・最重度では、痴呆進行などによって手がかりを充分活用できなくなり、過去の出来事と現在の状況がうまくつながらないことが、間違いに影響していると考えられる。

(2) エラーを制御する環境

以上から、記憶障害の重症度別に、エラーを制御する環境を考察する。

記憶障害が比較的軽い場合は、主に高齢者に積極的に働きかけ、現在の状況を詳しく知らせる手がかりが必要である。さらに、生活内容を変更した場合は、これまでの習慣との相違点を示して間違いを防ぐと共に、新しい状況での経験の積み重ねを助ける工夫が必要であると考えられる。

記憶障害が進むと、主に過去の出来事と現在を正しい分脈でつなげるための手がかりが必要である。痴呆発症・進行によって介護者宅への同居・施設利用が必要になるなど、生活内容の変化が著しい中で、新しい状況での経験を、これまでの出来事の延長線上に積み重ね、生活像の修正を助ける工夫が必要であると考えられる。

加えて、いずれの場合も、特に大きなきっかけがなく間違いが生じているケースがあり、間違いは防ぎきれないものではない。間違いが起こっても大きな事故につながらないように安全対策と、混乱を広げないための準備が必要である。

具体的には、第1章における物忘れを補う工夫、第2章における過去の出来事を想起する手がかりが活用できると考えられるが、これらについては結論で詳しく述べる。

文献

- 文1) 鎌田ケイ子、巻田フキ、大浜律子：家族支援のための痴呆性老人介護マニュアル、保健司人社、1990
- 文2) 杉山孝博：はげ受け止め方・支え方、家の光協会、1997
- 文3) Wapner S：山本多喜司訳：人生移行の発達心理学、北大路書房、1992
- 文4) 日本建築学会編：人間・環境系のデザイン、朝国社、1997

結論

1.各章の要約

本論、第1～3章の要約を述べる。

第1章 高齢者及び介護者による記憶補助の手法と有効性

本章においては、痴呆性高齢者や介護者が行っている物忘れを補う工夫を整理することで、居住環境の記憶補助機能を高める手法と有効性を明らかにした。

(1)記憶補助機能を高める可能性

記憶障害の全ての段階で居住環境の記憶補助機能を高める可能性があり、環境づくりに対する援助が必要である。

(2)記憶補助機能の埋め込み

移動性が小さい固定補助具は、潜在的な工夫として、あらかじめ設備や居室配置などに埋め込んでおくことが可能である。さらに、携帯の補助具よりも、移動性が小さい固定補助具の方が、痴呆性高齢者が利用しやすい。これは、補助機能を利用する空間的・時間的文脈を、補助具が固定された場所に依存でき、利用するために痴呆性高齢者の労力を必要としないためである。さらに、補助具の移動性を小さくすることで、周囲の手助けが受けやすくなる。これは、補助具が一定の場所に固定されていることで、痴呆性高齢者の利用状況を周囲の人が把握しやすいためである。

(3)記憶補助機能を高める手法

記憶補助機能を高める手法は図1のとおりである。

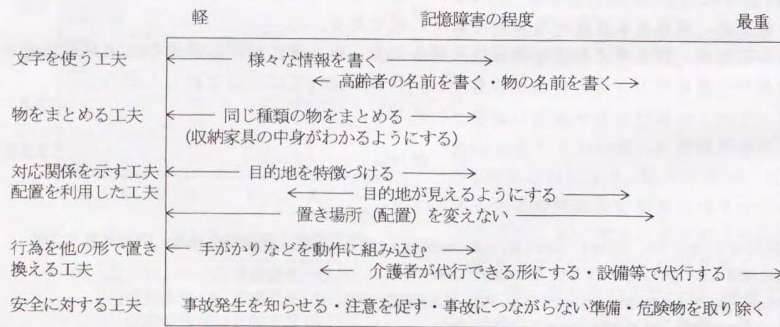


図1 記憶補助機能を高める手法

第2章 想起された出来事の分脈を手がかり使用の傾向

本章においては、痴呆性高齢者で問題となりやすい最近の出来事に関するエピソード記憶を取り上げ、想起の手がかりとしての居住環境を検討した。

(1)想起の手がかりとしての居住環境を検討する可能性

記憶障害の全ての段階で、想起の手がかりとしての居住環境を検討し、環境づくりを援助する可能性がある。想起内容の間違いは、最近の出来事が抜け落ちるだけでなく、残された出来事の分脈を変え、過去への認識を変えてしまっていた。適切な手がかりによって、失われた時を取り戻し、現在へつなげていく可能性が考えられる。

(2)手がかりと想起内容

手がかりの中で「景色・天候・季節」「音・匂い」は多様な事柄を思い出させていた。逆に「写真」「家具」は特定の事柄を思い出させていた。記憶障害が重度になるに従って「写真」など、高齢者との関係が特定の経験に限られる手がかりは利用されにくくなり、「生活用品」「職員や他の高齢者」など、日常的な手がかりへ移っていた。最重度で利用されていたのは「高齢者自身」「音・匂い」など、より身近で五感に働きかける手がかりであった。

想起内容の中で、家族に関する事柄は、様々な手がかりによって話されていた。逆に、最近の天候、生い立ち、昔の職業に関する事柄は、特定の手がかりによって話されていた。記憶障害が重度になるに従って、最近の出来事に関する話題が減り、最重度では、生い立ち・家族・昔の職業などが話されていた。

(3)過去の出来事を想起させる環境

想起内容の間違いは、記憶障害の重症度によって異なり、軽度では、毎年の旅行など、同じ種類の出来事が繰り返し起こっている場合、前後関係が区別できなくなり、2つの出来事が混じってしまっていた。「写真」「家具」のような特定の事柄を思い出させる手がかりを活用し、さらに日付を書く等、手がかりの時間的な位置づけをわかりやすくすることで、対応できると考えられる。

中等度では、以前の出来事を思い出せないために、最近の出来事の分脈が変わり、違う解釈になってしまっていた。特に、現在につながる部分で思い出せる出来事が少なくなるため、なじみの物や日用品を活用し、現在とのつながりが納得しやすい形で手がかりを準備する必要があると考える。

重度・最重度では、現在のわずかな手がかりから、過去の出来事の多くを説明しようとするため、過去の認識が大きく異なったものになってしまっていた。さらに、数十年前の出来事を現在のように話すことで、長男を兄と間違えるなど、出来事の内容自体が変化していた。高齢者が繰り返し話す印象深い出来事にポイントを置いて手がかりを準備し、高齢者が思い起こす過去のイメージを膨らませ、現状を高齢者に合わせる形で現在へつなげていくことが考えられる。

第3章 過去の習慣による乗っ取り型エラーにおける状況の類似性

本章においては、痴呆性高齢者で起こりやすい過去の習慣による乗っ取り型エラーを取り上げ、エラーを制御する環境を検討した。

(1) エラーを制御する環境を検討する可能性

記憶障害の全ての段階で、エラーを制御する環境を検討し、環境づくりを援助していく可能性がある。

(2) エラーを制御する環境

記憶障害が比較的軽い場合は、主に高齢者に積極的に働きかけ、現在の状況を詳しく知らせる手がかりが必要である。さらに、生活内容を変更した場合は、これまでの習慣との相違点を示して間違いを防ぐと共に、新しい状況での経験の積み重ねを助ける工夫が必要である。

記憶障害が進むと、主に過去の出来事と現在を正しい分脈でつなげるための手がかりが必要である。痴呆発症・進行によって介護者宅への同居・施設利用が必要になるなど、生活内容の変化が著しい中で、新しい状況での経験を、これまでの出来事の延長線上に積み重ね、生活像の修正を助ける工夫が必要である。

加えて、間違いが起こっても大きな事故につながらないような安全対策と、混乱を広げない準備が重要である。

2. 居住環境の記憶補助機能

記憶障害の全ての段階で居住環境の記憶補助機能を高める可能性があり、環境づくりに対する援助が必要である。環境づくりは家具・小物などの配慮を含み、日課・ケアの体制などと関連するが、本項では主に設備や居室配置などに埋め込まれた記憶補助機能を取り上げる。次の2点から補助策を検討する。

補助策1：記憶内容の一部を視覚化・聴覚化して、手がかりを提供する
補助策2：記憶が必要な行為の一部を自動化してエラーを防ぐ
忘却や記憶違いによるエラーが広がらない対策を準備する

補助策1：記憶内容の一部を視覚化・聴覚化して、手がかりを提供する

記憶は、頭の中に、検索しやすいように整理して保存されている。この一部を目に見えたり、聞こえたりして確認できる形にすることで、思い出すための手がかりを提供できる。具体的には次の補助策が利用できる。

(1) 文字での表示

文字を使う工夫は、記憶内容の一部を文字にして確認できる形にしたものである。居室表示や道標、設備の説明書きなどがこれにあたる。後からでも導入しやすい工夫であるが、記憶障害が重度になると、多くの情報は使いこなすことが難しくなってしまう。文字は、他の工夫を補う程度にとどめ、安易な多用はさけるべきであるとする。

(2) 分類

多くの物をいくつかにまとめて、記憶への負担を少なくする工夫は、頭の中で行われている整理を、頭の外に目に見える形で置き換えたものである。同種の部屋をまとめる施設計画、収納家具などがこれにあたる。しかし、これらは整理して配置した場所を覚えておかなければならないため、記憶障害が重度になると使いこなすことが難しくなる。

これらを補うのが、(3)対応関係を示す配置である。

(3) 対応関係を示す配置

配置を利用して対応関係を示す工夫には、①特徴づけ・可視化、②配置の再編があり、これらはより重度に対応している。

①特徴づけ、可視化

目的地を特徴づけることは検索を助け、見える形にすることは思い出す作業を確認する作業に変えている。さらに、見える形にすることは、高齢者の注意を引き、その対象物への使用を促していると考えられる。後者の方がより重度に対応した工夫である。

施設における居室出入口の飾り付け、必要に応じてカーテンを開けたままにしておく居室内便所、対面式キッチンで流し台が見える食堂などがこれにあたる。在宅における小さな食堂机や、なじみの家具や小物が壁を埋めて独自の風景を作っている居室は、それだけで高齢者の記憶を補っている。これらは宅老所・グループホーム、施設において生活単位を小さくするグループケアユニットなどを通じて、施設利用へ活かされつつあり、今後が期待される場所である。

②配置の再編

配置を変えないことは、痴呆性高齢者が残された記憶を活用し、日常生活を継続することを助けている。長年の配置は、高齢者の行為順序や過程に対応しており、日常生活上の様々な動作内容を思い起こさせるものであるとする。

高齢者の環境移行が少ないことが望ましいが、介護者宅への同居・施設利用など、痴呆発症・進行は様々な環境移行を必要とする。その際、新しい場所で高齢者自身が配置を作っていく過程が重要であり、高齢者がこれまでの経験を活かしつつ配置を再編していく中で、移行前後の生活がつながり、新しい生活展開に応じた習慣が形づくられていくと考えられる。なじみの家具や小物、家庭的規模の空間などは、配置の再編を助けるものである。

(4)過去の出来事の文脈を示す手がかり

記憶は、時間的・空間的な分脈などによって整理され保存されている。このため、手がかりを選び、時間的・空間的な分脈をわかりやすくすることで、出来事を互いに関係付け、現在へつなげることができる。

①特定の出来事につながる手がかり

痴呆性高齢者が過去の出来事を想起し参照する中で、毎年の旅行など、同じ種類の出来事が繰り返して起こっていると、前後関係が区別できなくなり、異なった時点の出来事が混じってしまう。写真や家具など、特定の事柄を思い出される手がかりを活用し、日付などで時間的な分脈を補うことで、それぞれの出来事を個別に浮かび上がらせることができる。

②生活内容の変更を示す手がかり

生活内容を変更した直後や、変更前後で周囲の状況があまり変わっていない場合に、変更前のように行動してしまう間違いが起こりやすい。居室が変わったのに以前の居室へ行ってしまったり、日曜日に平日と同じように行動してしまうことがこれにあたる。変更や現状を詳しく知らせる手がかりに乏しく、異なった場面の同じ種類の出来事が区別できなくなり、混じってしまうためである。これまでの習慣との相違点を示し、間違いを防ぐと共に、新しい状況での経験の積み重ねを促し、習慣変更を助ける工夫が必要である。

③なじみの物や日用品の活用

記憶障害が進むと、以前の出来事を思い出せないために、最近の出来事の文脈が変わり、違う解釈になってしまう。痴呆発症・進行によって介護者宅への同居・施設利用が必要になるなど、生活内容の変更が著しい中で、高齢者が想起し参照する出来事が大きく過去にさかのぼり、現在と異なった分脈でむすびついてしまうことが起こる。高齢者が現在住んでいる所から「家に帰る」と外に出ることなどがこれにあたる。

なじみの物や日用品を活用し、現在とのつながりが納得しやすい形で手がかりを準備することが必要である。さらに、新しい生活場面での出来事を、これまでと分離せずに、これまでの出来事の延長線上に積み重ね、生活像の修正を助けていく工夫が必要である。

④高齢者の想定に合わせた場面設定

さらに記憶障害が進むと、高齢者が想起し参照できる出来事が少なくなり、現在のわずかな手がかりから過去の出来事の多くを説明しようとするため、過去の認識が異なったものになってしまう。想起の間違いは、思い出せない出来事が抜け落ちていくだけでなく、残された出来事の分脈を変え、それらの出来事内容をも変化させてしまう。例えば、数十年前の出来事を現在のように話すことで、長男を兄と間違えるなど、出来事の内容自体が変わってしまうのである。

高齢者が繰り返し話す印象深い出来事にポイントを置いて、より身近で五感に働きかける手がかりを準備し、高齢者が思い起こす過去のイメージを膨らませ、現状を高齢者に合わせる形で現在へつなげていくことが考えられる。

補助策2：記憶が必要な行為の一部を自動化してエラーを防ぐ

忘却や記憶違いによるエラーが広がらない対策を準備する

忘却や記憶違いによるエラーは常に起こりうるものであるが、エラーを想定して準備を行うことで、エラーを防いだり、エラーが起こっても大きな事故につながらないようにすることができる。具体的には次の補助策が利用できる。

(1)自動設備などの利用

痴呆性高齢者では、一連の動作のうち一部は行うが、全てをやりとげることが難しく、日常生活に支障をきたしている例が少なくない。これに対して、記憶が必要な行為を自動化して、設備などで置き換えることができる。暖房器具のお休みタイマー、ドアクローザー、浴室の自動湯沸、便所の自動洗浄、電話の番号登録、自動照明などがこれにあたる。また、各室を同じ床材にしてスリッパの履き替えをやめるなど、動作の一部を省略することもできる。これらは、記憶障害が重度になっても利用できる工夫であり、操作の手動・自動切り替え、各種設備の後付けなど、機能を変更できる部分を残しておくことで、進行へ対応できると考える。

(2)安全対策

記憶障害の重症度に関係なく、間違いが起こっても大きな事故につながらない安全対策は重要である。ガスコンロ・暖房器具の自動消火装置、転落防止用のテラス、外側からも開けられる鍵などがこれにあたる。これらは普遍性の高いものであり、当初から備えておくべきである。

間違いを周囲に知らせて、早期の対応を促したり、周囲が間違いを容易に復元できるように、あらかじめ準備しておくことも必要である。記憶障害が進んだ際の間違いは特定性が強いものであるが、生活内容の変更、同時期に起こっている各種の間違いから、推測できる部分もあり、医療・福祉関係者を含めた多職種による支援活動によって、対応が可能であると考える。

3.補助環境構築の方向性

補助環境を構築する前提条件をまとめる。本研究の総括である「2.居住環境の記憶補助機能」は、本項を背景として展開するものである。

(1)基本構造と可変部分

本研究は、居住環境の記憶補助機能を捉えることで、記憶障害によって引き起こされている日常生活の様々な支障を軽減し、痴呆性高齢者が過去の経験を活かしつつ、新たに生活を展開していくための環境づくりに役立てることを目的としている。

過去の経験は個々によって異なるため、「痴呆性高齢者が過去の経験を活かす」ために

は、個々に対応した環境づくりが必要である。さらに、「痴呆性高齢者が新たに生活を展開していく」ためには、生活展開に応じて動的に変更できる環境づくりが必要である。補助環境構築にあたっては、共通して継続的に必要な部分を当初から基本構造として作っておき、後から個別に対応して変更できるように可変的なつくりしておくべきであると考えられる。当初からの基本構造が、設備や居室配置などに記憶補助機能を埋め込んだ”潜在的な工夫”にあたり、可変部分が高齢者及び家族・施設職員が行う”工夫”にあたる。

忘却や記憶違いは、痴呆性高齢者に限らず、誰にでも起こりうるものである。特に記憶障害が軽度な間のエラーは、火の消し忘れ、物をしまいこんでなくすなど、共通部分が多く、これらに対応した”潜在的な工夫”は痴呆性高齢者に限らず役立つものであると考えられる。さらに、自動消火装置をつける、転落防止テラスをつけるなど、痴呆性高齢者に対して行われている安全対策は普遍的なものであり、一般的にも必要性が高いと考えられる。

ただし、記憶障害が進んだ際の対応は特定性が強いので、可変部分で個別に対応が必要である。収納方法を変えられる家具、操作を手動・自動に切り替えられる器具、取り外せる居室・便所間の仕切り壁、感知センサーを後付けできる差し込み口などが考えられる。可変部分は、高齢者及び家族・施設職員などが容易に取り扱える形態にしておくと共に、継続的なフォローを行い、必要に応じて改修援助を行える体制をとっておくべきである。このためには、次に述べる(2)支援システムが必要になる。

(2) 支援システム

在宅や施設では、痴呆性高齢者に対して様々な工夫が行われている。現在、建築関係者の参加はあまり見られないが、医療・福祉関係者と共に多職種によるチームでの支援活動が求められるところである^(x1)。

身障・虚弱高齢者に対しては、多職種によるチームでの住居改善支援活動が行われ、高齢者の生活の質の向上、介護者の負担軽減に役立っている。さらに、専門職の参加により、早い段階(困る前)における予防的な住居改善が可能となり、家庭内事故の予防と残存機能の維持につながる事が推測される。痴呆性高齢者に対しても同様の効果が期待できる。

在宅における住居改善だけでなく、施設においても、居室内便所の間仕切り壁を取り除く、家具配置に応じて照明を移動する、食堂を仕切ったり設備を変更するなど、継続的な環境調整が必要である。さらに、宅老所・グループホームやグループケアユニットなど、選択肢が広がる中で、個々の痴呆性高齢者、また、生活展開に応じた環境づくりの条件は整いつつある^(x2)。在宅、施設、宅老所・グループホーム、グループケアユニットなどを問わず、一定地域内における痴呆性高齢者に関する環境づくりを、チームで継続的に支援していくことが考えられる。

(3) 環境移行時の支援

継続的な支援活動は、痴呆発症・進行により介護者宅への同居・施設利用などが必要になる痴呆性高齢者にとって、環境移行のギャップをゆるやかにすることにつながる。現状では在宅と施設の差が大きく、痴呆性高齢者の混乱をまねいているが、これらについても

宅老所・グループホーム、グループケアユニットなどの展開が期待される場所である^(x2)。家具や小物の持ち込み、地域性に配慮された家屋構造、家庭的しつらえ、見覚えのある風景などは、痴呆性高齢者が現在を過去の延長線上に位置付ける手がかりとなり、過去の習慣を有効に活用することを助けると考える。

在宅、施設、宅老所・グループホーム、グループケアユニットなど、いずれにおいても、居住環境の記憶補助機能を高める手法と有効性は共通するものであり、個々の痴呆性高齢者の生活歴を大切にしながら継続的な環境づくりへの援助は、記憶障害による日常生活の様々な支障を軽減し、痴呆性高齢者が過去の経験を活かしつつ、新たな生活を展開していくことを、継続的に助けるものであると考える。

(4) まちづくり

痴呆性高齢者の生活は、家や施設内だけで完結するものではない。環境づくりは、住居改善・施設改修に終わらず、まちづくりにつながるものである。痴呆性高齢者は、記憶障害などのために、一人で外へ出ると帰ってこられないことがあり、交通事故や疲労困憊状態に陥ってしまう危険性がある^(x3)。この中で、痴呆性高齢者を建物の中に閉じこめてしまうのではなく、自由な外出を支え、なじみの人間関係を継続する場をいかにつくっていかねば、痴呆性高齢者の生活の質を左右するといえる。

徘徊老人 SOS ネットワークなどソフト面の対応が先行しているが^(x3)、家の前が車通りの激しい大通りではなく近所の人の目が届く路地であること、近くに人が集まる公園や商店街があること、人里離れた山奥ではなく住宅地に施設があること、地元で働く場があり日中も地元にいる人が多いことなど、ハード面でも対応できる部分も少なくない^(x4)。そして、これらは痴呆性高齢者に限らず、多くの人々に有意義なことである(住宅地の施設は、迷惑施設と呼ばれ嫌われる向きもあるが、施設が地域に開放され、住民を含めて地域福祉に関わる諸問題を取り扱う拠点となれば、施設に対する意識も変わっていくと考える)。

まちづくりに向けて、身体障害者や視覚・聴覚障害者などの意見は、最近、比較的反映されるようになってきているが、痴呆性高齢者や知的障害者など、記憶障害などを持つ者に対する配慮は不十分なままである。火の不始末や近隣の迷惑騒動などの原因を、痴呆性高齢者や介護者だけに帰していないか、もう一度考えるべきである。痴呆性高齢者にやさしいまちづくりは、安全で居心地が良く、人がつながる場を生み、多くの人々が住み続けられるまちをつくりだすはずである。

本研究では、居住環境の記憶補助機能が痴呆性高齢者以外の多くの人々に果たす役割や、まちづくりに関して十分な分析ができておらず今後の課題としたい。詳しくは、4.今後の課題で述べる。

4. 今後の課題 - ユニバーサルデザインに向けて

ユニバーサルデザインは「できる限り最大限すべての人に利用可能であるように、製品、建物、空間をデザインすること」を言う^(x5)。ユニバーサルデザインは、人を生涯を通して

支えることのできる環境づくりを目指しており、障害の有無・種類や年齢を超えて、人やコミュニティ、人の関わり合いを大切に、特殊でなく目立たない配慮を行うものである^(x6)。ユニバーサルデザインの七原則^(x5)を見ると、痴呆性高齢者の記憶障害を補う手法と共通点が多いことに驚く。居住環境の記憶補助機能を高めることが、痴呆性高齢者に限らず、多くの人々に役立つものであることが推測される。

- ①誰にでも公平に使用できること
- ②使う上での自由度が高いこと
- ③簡単に直感的にわかる使用方法となっていること
- ④必要な情報がすぐ理解できること
- ⑤うっかりエラーや危険につながらないデザインであること
- ⑥無理な姿勢や強い力なしで楽に使用できること
- ⑦接近して使えるような寸法・空間となっていること

さらに、ユニバーサルデザインは、基本デザインだけでなくオプションを多くすることで個々に対応しようとしている^(x5)。痴呆性高齢者では、基本デザインが、安全対策などの共通事項に対して、あらかじめ設備や居室配置などに埋め込んだ記憶補助機能に相当し、オプションが記憶障害の中等度以降における特定性の高い行為・エラーに対応する可変部分に相当する。これらを組み替えていくことで、痴呆性高齢者を含めた多くの人々へ、それぞれの人々の生涯にわたる生活展開へ役立てていく可能性が考えられる。

そして、ユニバーサルデザインでは、市民参加でユニバーサルなまちづくりを行うことで、継続的に総合的な問題解決を図ることを目指している^(x5)。地域の構成員の生活展開に応じて、地域が抱える様々な生活問題に応じて、「まち」が構成員の手で動的に構築・運用されていく中で、はじめて、居住環境の補助機能を高める手法の社会化がなされ、痴呆性高齢者などが地域生活を継続でき、多くの人々が住み続けられるまちづくりが可能になるのだと考える。

このような点から、居住環境の記憶補助機能が痴呆性高齢者以外の多くの人々へ果たす役割、まちづくりなどを含め、今後、さらに調査を進めたいと考える。

文献

- 文1)大橋美幸、水野弘之、小滝一正：痴呆性老人の家族による「住まいと住み方に関する工夫」の手法 - 痴呆性老人に対する住居改善に関する研究、日本建築学会計画系論文集 527号、pp.93-98、2000
- 文2)宮城県小規模多機能施設等福祉サービス調査研究委員会編：宅老所・グループホームの社会的役割と公的支援策、1999
- 文3)大橋美幸、水野弘之：痴呆性老人の一人外出と近隣の協力、月刊総合ケア 7巻、pp.66-69、1997
- 文4)大橋美幸：痴呆性老人と住環境 - バリアフリーに向けて、住宅総合研究財団、1997
- 文5)古瀬敏：ユニバーサルデザインとはなにか - バリアフリーを超えて、都市文化社、1998
- 文6)Grayson P J Universal design - environments for everyone(ユニバーサルデザイン - すべての人によりよい環境を)、建築と社会 7、pp.34-39、1995

関連発表

痴呆性老人の記憶障害に対する外的補助の有効性、理学療法科学 13(2)、pp.61-65、1998年5月

痴呆性老人に対する Memory aids の使用、リハ工学カンファレンス、pp.311-314、1997年5月

痴呆境界域・軽度痴呆の記憶障害に対する外的補助、OT ジャーナル 31、pp.223-225、1997年3月

痴呆性老人の記憶・認知・発動性の障害に対する Prosthetic (補助) 環境、平成8年度ジェロントロジー研究報告 No.3、pp.46-55、1988年10月

痴呆性老人の家族による「住まいと住み方に関する工夫」の手法 - 痴呆性老人に対する住居改善に関する研究、日本建築学会計画系論文集 527号、pp.93-98、2000年1月

高齢者と住環境 - 在宅痴呆性老人に対するアプローチの可能性、神奈川県士会会報 26、pp.17-30、1999年3月

謝辞

本研究は、老人保健施設博寿苑に理学療法士として勤務し、痴呆性高齢者に対する対応を試行錯誤する中で行ったものです。博寿苑の利用者及びスタッフの皆さん、また併設の大原記念病院リハビリテーション部スタッフの皆さんには大変お世話になりました。多くの業務に忙殺される中で、研究プロジェクトに時間をさいいただき、さらに、大学院に通い調査・研究を進めながら仕事を続けるわがままを許していただき、本当にありがとうございました。本研究や、本研究を支えた私のいくつかの痴呆性高齢者に関する調査・研究は、皆さんの協力なしにはできなかったものです。

本研究を始めるにあたって、京都府立大学生活科学部住居学科（現・人間環境学部環境デザイン学科）水野弘之先生から、痴呆性高齢者と居住環境の関わりについて重要な視点をいただきました。本研究は、京都府立大学水野ゼミでの痴呆性高齢者に関する調査・研究に基づくものです。水野弘之先生、水野ゼミの皆さん、水野ゼミの調査・研究に協力して下さった（社）受け老人をかかえる家族の会、グループホームゆい（滋賀県）、京都市春日学区ミニデイサービスの皆さん、水野ゼミの調査・研究に貴重な助言・ご指導をいただきました和歌山大学システム工学部 足立啓先生、京都府立大学 松原先生、当時松原ゼミにいた合掌さん、本当にありがとうございました。

本研究は、データ収集から分析に3年間を要しています。その間に、多くの宅老所・グループホームを訪れ、痴呆性高齢者の家族会にうかがい、痴呆性高齢者を支える姿勢や態度を学びました。これらの経験は、私の痴呆性高齢者ケアに対する価値観を大きく変えています。まだまだ消化しきれていない部分がありますが、私が出会った多くの方々の痴呆性高齢者に対する思いが、本研究をまとめる原動力になったように思います。本当にありがとうございました。今後もご意見・ご指導いただければ幸いです。

また、私は、現在、日本福祉大学福祉社会開発研究所で研究員をしています。本研究は研究所の研究プロジェクトに多大な迷惑をかけながら執筆したものです。研究プロジェクトにかかわりながら、論文執筆に努力と時間をさくわがままを許していただき、さらに暖かく長い目で見守っていただきありがとうございました。特に日本福祉大学社会福祉学科平野先生には論文執筆中、幾度となく叱咤激励いただきました。本当にありがとうございます。紙面を借りて感謝の意を伝えたいと思います。

最後になりましたが、横浜国立大学工学部の小滝先生には、他論文の執筆を含めて、分析方法や論理展開、建築計画の視点など、貴重な助言・ご指導をいただきました。あまり大学へ足を運ばない私に、時期を選び焦点を絞った適切な意見をいただき、本当にありがとうございます。なによりも理学療法士としての仕事や、宅老所・グループホームへの訪問、家族会とのつながりなど、大学以外での活動を理解していただき、これらの経験を活かす形で論文執筆を勧めてくださったことに感謝の思いでいっぱいです。これまでの集大成として本研究をまとめることができたのは小滝先生のおかげです。本当にありがとうございました。

2000年2月

大橋美幸

